

---

**導かれし者が幻想入り** lock pass meseege.

おとぼけスミー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

導かれし者が幻想入り    l o c k    p a s s    m e s s e e g e .

### 【Nコード】

N 8 6 5 1 N

### 【作者名】

おとぼけスミー

### 【あらすじ】

とある青年と妖怪の存在は、幻想郷にどのような波紋を立てているのか。幻想郷の過去を舞台に、彼らの数奇な出会いと旅が始まる！！

## プロローグ（前書き）

### 諸注意

この話は東方の二次創作イメージよりも、オリキャラ＋オリ小説のイメージの方が強いです。まああくまで幻想郷な訳ですから、しっかりと東方キャラも出していきます。ではどぞ。

## プロローグ

### プロローグ

都会の夜は、明るくてもどこか冷たい感じがする。皆自分の事で手一杯なので、心から他人を思いやったりする余裕がないのだろう。

そんな冷たい世界に、異端とも言える生き方をする者がいる。

その者の名は人橋ひとはし 浮世うきよ。若い立派な社会人である。

彼は、友人や家族、大切にしている者などの為ならばどんな事も惜しまない、自己犠牲をモットーとした人間なのである。

夜の街で彼は、警備員の仕事を真っ当し、今丁度、家へ帰る途中なのである。

住宅街を楽しそうに歩く浮世。その理由は携帯で彼女とメールのやり取りをしていたからだ。

若いだけあって軽快にやり取りをする浮世。返信を待つ時間すらも、彼にとっては至福である。

だがいくばくかのやり取りをしている内に、一通のメールが彼の顔、いや、彼の全身から至福を奪っていった。

その一通のメールとはこれである。

ごめんなさい。別れまし

よう。

何の事はない。彼氏彼女ではありがちな別れのメールである。

面と向かって言う必要のなくなった現代社会に置いて、この一言を伝えるのはとても楽だろう。

だが、送られた方はただ悲しみに打ちひしがれるしかない。

浮世は鬱憤とした気持ちを携帯を投げてさらに落ち込ませ、自分の家に帰ってベッドの枕に顔をうずめた。ベッドは涙で自然と濡れていった。

どうしようもないやるせない気持ち。もう寝る時間なのに寝る事もできない。

少しして、ベッドにいても仕方ないと判断した浮世はリビングにてテレビをつけた。

時間とチャンネルが悪かったのか、テレビにはザーツとした砂嵐しか移っていなかった。

浮世はチャンネルを変える事もなく、なぜかテレビの画面に手を伸ばした。一種の現実逃避状態になっているのであろう。

その時であった。手を伸ばした瞬間にテレビの画面が変わり、緑の森が見える景色に変わったのだ。

現代ではお目にかかる事はあまり出来そうにない景色。浮世は自然とその景色に惹かれた。

浮世は手を伸ばし続け、気がつけばその手はテレビの画面にまで届いていた。

だがその手は画面に触れるような形ではなく、その画面の中にでも入るかのように手がその画面を貫いていた。いや、むしろ画面がまるで水のようになっていたのだ。

軽い自暴自棄になっている浮世にとって、これは現実なのか夢なのか判断できていなくなっていた。

多分夢だろうなとおもったその瞬間、浮世がその部屋から突如姿を消した。

誰一人いなくなった部屋で、テレビから元の砂嵐の音だけがただ鳴るだけであった。

## プロローグ（後書き）

後書き

みなさんこんにちわ（こんばんわ）。三人一緒に幻想入りでお馴染みの方がいるのかわかりませんが、お馴染みのつもりの澄田です。

今回はプロローグからしつかり書いてみようと思ひまして、こんな形になったのです。

きっかけは友達のバクテリアさんから言われた、「お前に過去編を作る許可を出そう」って一言です。

実は言うとは過去編はこれとは違う物も考えていたんですけど、その場合は10年程度の昔ですのでちょっとなあって思ったんです。

ぶっちゃけますとこの話は三人一緒に以上に行き当たりばったりです。本当です。

オリキャラがかなり自重しないので、正直東方の二次創作って感じはしないかもしれません。

まあプロローグだけではまだわかりませんね。なので第一話ではつきりと言いたい事がわかると思います。

ノリとしては、ガンダムSEEDアストレイみたいな完全外伝に近いので。

では、第一話をお楽しみに。

## 第一話 大妖怪との出会い

### 第一話 大妖怪との出会い

鳥のさえずりと木漏れ日の差し込む森の中で、浮世は大の字になって意識を失って倒れていた。

さえずる鳥の一匹が浮世の鼻頭に止まり、浮世を起こすかのように鳴いた。

その声に浮世がゆっくりと瞼を開けた。鳥と目が合った瞬間、鳥はぱっと飛び去っていった。

上半身を起こし、辺りを見渡した。どこをどう見ても木がただ連なっていた。

自分がなぜこうなっているのか・・・浮世は何一つ理解する事は出来なかった。

立ち上がり、当てもなく浮世は歩き出した。前向きな性格なので、絶望する事もなく歩いていった。

少しして、浮世は運良く道らしい道に出た。そして今度はその道を歩き出した。

ただただ続いている森の道。現代にこんな道があるのだろうかと思いつながら、浮世は歩き続けた。

歩く中で、浮世はある事を思い出していた。テレビで見たあの映像である。

現代ではあまりない自然の織り成した芸術。考えてみればこの道はあの映像の中にあってもおかしくはない道だ。

だが、なぜそんな風景の中に、この俺がいるんだ？あれはあくまで映像のはずだろう？

そんな自問自答に、ある答えが出てきた。夢だと思っていたあの現象である。

もしや俺は、あのテレビから映像の世界に入った・・・とても思えばいいのか？

夢だと思っても、今まで歩いてきた中で紛れもなく残っている疲れと、ふとした痛みは、夢ではない事を浮世に告げた。

じゃあ俺は、一体どうなるのだろうか・・・

これからどうなるのかわからない自分自身。だがあくまで浮世は前向きである。何があるうとも前に進んでいれば何かにたどり着くだろうと不安になっていた心を奮い立たせた。

長い道を歩いて、浮世の前に滝つぼが見えてきた。

丁度喉が渴いていたので、浮世はその滝つぼの透き通るように綺麗な水を手を使って飲んだ。

喉の渴きを潤し、浮世はその場で休息を取る事にした。色々な事があつたのと疲れからであろう。

ごろんと横になって頭に手を回し、空を見た。小さな雲がいくつかあるが快晴の空である。

ここに来るまで、浮世は今だに誰にも会っていない。その事は浮世の心に少しの不安を残していた。

もしかしたら、映像の世界には一人いないとも言つのか？

ありえない状態である今の現状。浮世の持ち前の前向きさを持ってしても今の現状に不安は出来てしまう。

ただぼーっとして休んでいると、浮世の頭の中にある言葉が飛び込んできた。

お願い・・・こっちに・・・来て・・・

誰かが助けを懇願するような言葉。浮世は驚き以上に、その言葉を誰が送ってきたのが気になった。

浮世の持ち前の正義感、今の彼を動かすのには十分過ぎたのである。

浮世は誰かも知らない、言葉を送ってきた誰かの元に行こうと立ち上がった。

しかし、冷静に考えれば、どこから送られてきたのかわからない以上、浮世にはどうにも出来ないはずだ。

だが浮世は、まるでそこにいるとわかつているのかのように、滝の方へと向かっていった。

浮世が滝の裏を覗くと、その裏には長く暗い洞窟が続いていた。

蝙蝠ぐらいいかいそうにない洞窟を、浮世は迷う事なく進んでいった。足元すらおぼつかないはずなのに。

恐らく浮世は、誰かもわからない者の助けと思える言葉を信じているからこそ、ここまでできるのであろう。

しばらくして、浮世は洞窟の少し広い所に出た。そこは天井から少

しだけ日が差していたのでまだ明るかった。

水の滴る音が洞窟内で響く中、浮世はある物に目が留まった。

それは、額に御札が張られ、両手を錠と鎖で繋がれ、まるで聖書に出てくるキリストのように、洞窟の奥に貼り付けにされていた者だった。

浮世は得体の知れないそれを見た時、心の中になったわだかまりを確信へと変えた。

さつき俺を呼んだのは、きつとこいつだ。

根拠などありはしないのに関わらず、浮世はその者へと近づいていた。

近づいていく内に、その者の特徴がどんどん見えてきた。髪は腰辺りの長さ。服は汚れなどで少しぼろぼろになっており、顔は御札でわからないが、身体的特徴から若い女性と思えた。それがわかった時、浮世は気になって歩みを止めた。

なぜこんな若い女性が、こんな目にあっているんだ？一体この者は何者なんだ？

そう考えている内に、さつきのようにまた頭の中に言葉が入ってきた。

助けて・・・私は・・・何も悪い事は

してないの・・・

その言葉が飛び込んできた時、浮世は何の迷いもなく、その者の錠を外そうとした。

だが、恐らくは鉄と思える錠を、何の道具もなく外せる訳がない。悪戦苦闘するものの、錠はまったく外れそうにない。

浮世は自分の非力を嘆いた。指から血が出てもお、錠を外そうとした。

何度も何度もやり続ける浮世。その内口から思わず言葉が出てきた。

「くそお・・・外れるよ・・・外れるよお!!!」

と怒声を出した瞬間、さっきまで傷すらろくについていなかった錠が、急に壊れたのだ。

浮世はさすがに驚いたが、それよりも錠が壊れて体勢が悪くなったその者を、浮世は地面にぶつかる前に抱き止めた。

自身の手で抱えていても、浮世にはその者からあまり生気が伝わってこなかった。

どれだけ長い間、この人はこうされていたんだろうか・・・

浮世は、その者の顔についていた御札をゆっくりと外した。

見えてきたのは、浮世から見ても可愛いと思える女性の顔と、はつきりとする・・・額辺りに付いている大きな目であった。

浮世が困惑する中、さっきまで瞼を閉じていたその者が、ゆっくりとその瞼を開けた。

その目は生氣と同時に、人間にあるはずの瞳がなかった。

そしてその者は、弱弱しくも口を開いてきた。

「・・・君が、私を助けてくれたの？」

その言葉に、浮世はとりあえず返事を返した。

「・・・多分そうかな。」

事実、錠が何の前触れもなく壊れた以上、自身が助けたのかわからなかったのだ。

それでも、その者にとって浮世は恩人である。

「・・・ありがとう。」

笑顔で感謝の言葉を言われて、浮世は思わず顔が赤くなった。

「いや、俺は別にその・・・」

さつき以上に戸惑う浮世に、その者はこんな事を言ってきた。

「そう言えば、自己紹介が遅れていたね。私の名前は、ダイダラボッチって言うの。ボッチって呼んでくれたらいいよ。」

その一言に、浮世は変に反応した。

「え？ダイダラボッチ？確か、ある妖怪の名前じゃなかったっけ？」

その疑問に、ダイダラボッチがすぐさま返した。

「そうだよ。私とそのダイダラボッチだよ。」

その返答に、浮世の頭の中はもう訳がわからなくなっていた。どうにか冷静になって、浮世はそれとなく今の現状を整理した。

「い、今まであった事をありのままにまとめろぜ、俺はテレビの中と思う世界に来て、そんでもって淹つばにたどり着いて、助けの言葉が聞こえたから探してみたら、そいつがなんと妖怪だったんだ。」

何を言っているのかわからないだろうが、俺もよくわかっていないんだ。」

と一人で長々と言っていると、ダイダラボッチが浮世にある事を尋ねてきた。

「そう言えば、君の名前は何て言うの？」

「あ、ああ、俺の名前は人道　浮世って言うんだ。」

「人道・・・浮世かあ。いい名前だね。」

「そ、そうかな？」

少し照れていると、ダイダラボッチが浮世の手からぱつと離れ、浮世の前に立った。

気がつけば、さっきまでなかった生気が戻っていたようだ。

「とりあえず、私の声を聞いてくれたのは君だね？浮世。」

「ああ。」

「あれだけで、よく私がここにいるだなんてわかったね。」

「・・・正直、俺も半信半疑だったけど、何となくここにいるって気がしたって言うのかな・・・」

浮世は照れくさそうに軽く頭を掻いた。

「そう、まあどっちにしても、浮世は私を助けてくれた。浮世には

感謝してるよ。」

そう言つて、ずっと浮世に握手を求めてきた。

「はは、どうも。」

浮世も握手で答えた。

握手を解いた後、今度は浮世がダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、何であなたは、あんな事になつていたんだ？」

その質問をした時、ダイダラボッチはうつむき、暗い顔をした。どうやら答えたくないのか、思い出したくないであろう。浮世はすぐにその様子を察した。

「・・・答えたくないなら、別にいいよ。」

そう言つと、ダイダラボッチは申し訳なさそうな感じで顔を上げた。仕方がないので、浮世は違う質問をした。

「じゃあ、ここはどこなのか教えてくれないか？」

「・・・君のさっき言つてた事を考えたら、君はたぶん違う世界から来たみたいだね。それなら、この世界自体が何なのか、言つておいた方がいいね。ここは、忘れ去られた者が流れ着く場所、幻想郷つて言うの。」

幻想郷・・・浮世には聞き慣れない言葉であつた。だが忘れ去られた者が流れ着くという所から、浮世は目の前にいる者が妖怪である事に納得がいった。

そうか、妖怪は本来俺達の世界にいたけど、今となつてはこの幻想郷って所に流れ着いていった訳なんだな。

だがその答えを出したと同時に、浮世は最初から抱いていた疑問を思い出した。

じゃあ、なんで俺は、この世界に来たんだ？

その疑問だけは、どう考えても答えが出なかった。

浮世はその事について考えるのをやめ、今度はこれからどうするかについて考えた。

だが正直一人でこの事を考えても仕方ないと思い、ダイダラボッチに尋ねてみた。

「ボッチ、この辺りに人が住んでいる所はないか？あるなら教えてくれ。」

「うん、わかった。私についてきて。」

そう言うと、ダイダラボッチはさっき浮世が来た所を先へと進んでいった。

浮世はその後を追いかけていったのであった。

## 第一話 大妖怪との出会い（後書き）

後書き

どうも、プロローグで言ったとおり、第一話目にしても東方キャラ出てきませんでした。

まあ第二話どころか、もっと後で出してる人も普通にいますので、この程度ならまあまだマシですかね。

これからもオリキャラどしどし出していくと思いますので、どうか暖かい目でみてやってくださいね。

ちなみにこの話は三人一緒と違って前に名前とかは書きません。前の分から誰が喋っているか察してくださいな。

では、第二話をお楽しみに。

## 第二話 疑念（前書き）

ありのままあらずじ

彼女に振られた浮世はよくわからず幻想入りし、少し歩いていたら助けを呼ぶ声？がしたので行って助けてみたら、妖怪ダイダラボツチだった。そしてその妖怪に道案内してもらっている。

## 第二話 疑念

### 第二話 疑念

さつき浮世が歩いた道とは少し違う道を、浮世とダイダラボッチの二人が並んで歩いていった。

一応ダイダラボッチの案内の元、それなりに真っ直ぐな道を歩いていた。

だが浮世自体はさつきまでのダイダラボッチの様子から、道案内に一抹の不安を残していた。

こいつはちゃんと案内してくれているのか？

そんな疑心暗鬼が心の中で浮かんでは消えるを繰り返す内に、浮世は我慢できずに尋ねた。

「ボッチ、あなたは本当に道案内をしてくれているのか？」

その質問に、ダイダラボッチは適当な調子で答えた。

「うん。大丈夫だよ。私、ぼーっとしてるってよく言われるけど、方向感覚とか記憶力はしっかりしてるんだ。」

そっついながら、自分の頭を手を使ってアピールした。

その様子を見て浮世は、さつきとは違う、気になった事をダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、正直に訊くけど、君は本当に妖怪なのかい？」

疑りの混じった視線に、ダイドラボッチはまったく動揺せずに答えた。

「・・・助けてくれたお礼もあるし、じゃあ、私が大妖怪ダイドラボッチだって所、特別に浮世に見せてあげるね。」

そう言った瞬間、人間の大きさであったダイドラボッチが、容姿が変わりながらどんどん大きくなりだしたのだ。

目の前で急に大きくなり、さすがに焦った浮世は、

「ちよちよちよお！？わかったわかった！！十分わかったから止めて！！」

と大きくなっていくダイドラボッチに懇願した。

その声を聞いていたのかいざ知らず、ダイドラボッチはあつという間に元の大きさに戻った。

元に戻ると、少し疲れた様子のダイドラボッチがこんな事を言ってきた。

「よくわかった？私が大妖怪だって事。でも本来の姿にはあんまりなりたくないの。疲れるし、みんなにも迷惑かけるし・・・」

と言っていると、立ちくらみでも起きたのかふらつとなりだした。その様子に浮世は、

「ボッチ！！」

と即座にダイドラボッチの傍に駆け寄り、倒れそうになっているダイドラボッチを支えた。

「大丈夫か！？ボツチ！！」

呼びかけの声に、ダイダラボッチは静かに答えた。

「大丈夫だよ・・・久々にやってみたら・・・いつもより疲れただけ・・・」

浮世が助けた時よりも弱弱しい声に、浮世は不安になった。

仮にも見知らぬ世界で始めて会った他者。それもこんなに弱弱しい姿を見せているのであれば、浮世にとってはただ不安が募るだけだ。気がつけば、浮世はダイダラボッチを抱えたまま涙を流していた。

「浮世・・・？」

その様子に、ダイダラボッチは不思議そうに尋ねた。

恐らくダイダラボッチは、浮世が誰の為に涙を流しているのか、わかっていないのであろう。

涙が出ながらも、浮世はダイダラボッチにこんな事を言った。

「頼む・・・無理だけはしないでくれよ・・・」

さつきとはまったく雰囲気の違いに、ダイダラボッチは心を打たれた。

そしてダイダラボッチは、こんな答えを導き出した。

「・・・うん。」

たったの一言だが、今の浮世にとってこれほど安らぐ言葉もないだろう。

次第に浮世の顔から涙は消え、元の笑顔が戻っていた。

その間に、ダイダラボッチは浮世の手元から離れ、また元のように二人並んで歩いていった。

並んで歩く中、ダイダラボッチが急に浮世の顔をじっと見てきた。気になった浮世は、

「な、何だ？俺の顔に何かついてるのか？」

と尋ねた。

その質問にダイダラボッチは、

「そうじゃないよ。ただね、浮世って優しい人だなあって思っただけ。」

と屈託のない、満面の笑顔を浮世に向けながら言った。

この様子を浮世は、今までで一番顔が赤くなった。ぼうつとした音でも出そうな勢いである。

浮世は手と頭を同時に動かし、目を隠して必死に否定した。

「べ、べべ別に、おお俺はだな、たたたたこんな性格なだけであってだな・・・」

あまりにも必死な様子に、ダイダラボッチは思わず笑った。

「ふふふ、浮世ってわかりやすいね。」

図星をつかれた浮世は、余計戸惑いながらも、どうにか正気に戻った。

正気に戻った所で、ダイダラボッチは気になっていた事を浮世に尋ねた。

「ねえ浮世。君ってさっき、どうやって私についてた枷を外したの？」

その質問は、浮世自身もわからない疑問であつた。  
わからない以上、浮世は、

「えーっと・・・ごめん。俺にもわからないんだ。」

少し申し訳なさそうな様子で返した。

その返事に、ダイダラボッチはある仮説を立てて浮世に言ってきた。

「浮世。私が見ただけだけどね、枷がああなつてた所から見ると、君はもしかして、能力を持っているのかもしれないんだ。」

その言葉に、浮世の頭の中ではただ疑問だけが浮かんでいた。

「能力？なんだ、能力を持つって？」

浮世の問答に、ダイダラボッチがビシッと答えた。

「能力っていうのはね、この世界にいる者達が持つ事のある、特殊能力の事なの。例えば私の場合なら、妖怪の類とかを操る事が出来る能力とかになるの。」

その答えに、浮世は更なる疑問をぶつけた。

「え？さっきのボッチが巨大化したのは？」

その問いにも、ダイダラボッチは軽快に答える。

「あれは妖怪である私の力。能力っていうのはもつと違う物だよ。」

簡潔な答えに、浮世はそれなりに悩みこんだ。

自分の能力がなんなのか・・・あまり検討がついていないといつてもおかしくはない。

俺は、ダイダラボッチを拘束していた枷をその手で壊した。無意識とはいえそれが能力なのか？

だが冷静になれば、それだけでは能力の断定などできない。しばらくして、浮世はとりあえずダイダラボッチに尋ねた。

「ボッチ、俺は正直自分の能力が何なのかよくわかっていないんだ。だからボッチに俺の能力を見定めてほしい。」

結構な無茶振りに、ダイダラボッチは、

「うーん、そうだね・・・」

と考えこんだ。

じつと考えているダイダラボッチに、答えを急ぐ浮世は落ち着けずにはいられなかった。

そんな浮世に、ダイダラボッチがこんな答えを出してきた。

「ごめんね。私も出ないの。」

その一言に、浮世はため息と同時に自分を無理矢理納得させた。

まあこれから追々わかるか・・・

そう自分に言い聞かせて、浮世はまた歩き出すのであった。

## 第二話 疑念（後書き）

後書き

えーっと、二人ともほとんど進んでいませんね。ただただ道ばかりで。

でもこれで結構二人の事がわかったと思います。

次はもっと違う人が出てくると思いますので、是非ともご期待ください。

では、第三話をお楽しみに。

### 第三話 人里（前書き）

ありのままあらずじ

ダイダラボッチに道案内してもらっていた浮世は、ダイダラボッチが本当に妖怪なのか気になったので尋ねたら、大きくなって証明してきた。その後ちょっといい雰囲気になったが、やっぱり二人は歩くのであった。

## 第三話 人里

### 第三話 人里

ひたすらに森の道を歩き続ける二人。そろそろ浮世のしびれが切れそうになった頃、二人の前によりやく木々とは違う物が見えてきた。見えてきたのは、恐らくは多くの人々が暮らしていると思える人里である。

遠くから見た限りでも、活気に溢れ、老若男女が楽しそうに村々を行きかっている風景が見えていた。

ようやく他の人がいる場所が見えたとあって、浮世の心には自然と安らぎが訪れていた。

いてもたってもいられなくなった浮世は、ダイダラボッチに自分の思いを告げた。

「ボッチ。あれって人里だよな？長い道のりだったけど、やっと人がいる所が見つかったなあ。ほら、急ごうぜボッチ。」

ボッチの腕を掴み、その里にすぐにも駆け出そうとしたが、ダイダラボッチがすぐに動こうとしなかった。

唐突な行動に戸惑っただなどと思った浮世は、手を放してまた話しかけた。

「ごめんごめん、ボッチにはボッチのペースがあるよな。いきなりこんな事されたらそりゃ戸惑う・・・」

と言いかけた口が、ダイダラボッチの様子を見て閉じてしまった。さっきまでは顔を上げ、笑顔であったダイダラボッチは、今は顔を

うつむけ、暗い調子でいたのだ。

この様子に浮世は戸惑ってしまった。

なぜ急にこうなってしまったんだ？

そう思った時、浮世はある答え導き出してしまった。

もしかしてボッチは、人里に行きたくないのか？

ここまで来てダイダラボッチがこんな様子を見せた以上、このような答えを導き出すのは自然であろう。

しかし、？浮世にとっては困った事である。

浮世は違う世界にいる以上、この世界に知り合いなどいない。

何も知らないまま人里に入るのは、さすがの浮世も困る。

考えた浮世は、落ち込んだ調子のダイダラボッチに尋ねてみた。

「ボッチ、正直に聞くよ。ボッチはあの人里に入りたくないのか？」

その問いに、ボッチはうつむいたまま答えた。

「・・・私だって、人里に入りたいよ。でも、あの人里にいる人達が、私を受け入れてくれるかわからないから、怖い・・・」

不安のこもった声に、浮世は全てを察した。

そうだ、ダイダラボッチは妖怪なんだ。それもただの妖怪じゃない。さっきまであんな所に貼り付けにされていたような大妖怪なんだ。

どうしようもない現実を再確認した浮世。

だが、それに対し浮世はダイダラボッチにこう言い放った。

「大丈夫だ。ボッチは悪い妖怪じゃない。それは俺がよくわかってる。だから、俺がそばにいれば大丈夫だ。それに、黙っていればばれないだろ。」

その言葉に、ずっとうつむいてたダイドラボッチが顔を上げた。

「・・・信じていいの？浮世の事。」

不安と希望が混ざったようなダイドラボッチの声と顔に、浮世が軽快に答えた。

「ああ。信じてくれよ。」

俺に任せると言わんばかりの様子に、ダイドラボッチの顔から不安が消え、希望だけが残っていた。  
ダイドラボッチは、残った希望を声に乗せて浮世に言った

「うん。」

浮世もその言葉から察したのか、何も言わずに二人は人里へと歩いていった。

少しして、二人は人里の入り口と思える所へと着いた。  
行きかう人々、活気のある町並み。遠くから見ていただけでは伝わらないこの感覚を、二人は全身で感じ取っていた。

その感想を、ダイダラボッチが思わず口にした。

「うん、二人つきりもいいけど、やっぱり賑やかなのが一番だね。」

深くは考えてはいないと思える発言に答えるように、浮世も言った。

「あ、ああ。」

浮世は内心少し複雑になった。それでも町並みを眺める内にそれもなくなくなっていった。

じつと町並みを眺める二人、しばらくして、浮世がダイダラボッチに尋ねた。

「なあ、ボッチ。とりあえず来たのはいいけど、まずどうする?」

「そうだね・・・ちょっと町並みを見ていこうよ。」

ダイダラボッチの提案に、浮世はすぐに乗った。

「じゃあ、そうしようか。」

そして二人は、そのまま里を歩き始めた。

歩けば歩くほど、二人はその町並みの良さを感じ取っていった。

ふと、ダイダラボッチが村にある一つの店を指差した。見た限りでは団子屋のようだ。

「ねえ浮世、ちょっとあそこで団子食べようよ。」

隣にいる浮世の服をまるで子供のように引っ張りながら言った。違う方向を見ていた浮世は、その店を見てから答えた。

「それもいいな。」

「じゃあ、行こうよ。」

「ああ。」

店へと向かっていく二人。その時浮世がある事に気づいた。

あ、冷静に考えたら俺、金あつたっけ？

ポケットに手を入れてみたが、何も入ってはいなかった。  
焦った浮世はその事をすぐにダイダラボッチに言った。

「ボッチ！ごめん、俺金ない！！」

謝る浮世に、ダイダラボッチはすぐに返事をした。

「大丈夫だよ。私がいくらか持つてるから。」

そう言つて、浮世にそれらしい物を見せた。

それを見た浮世は、思わず声が漏れた。

「え？」

驚きと呆然が混ざつたような調子の顔になった。

それもそうである。何せそれは浮世にとって見慣れのない、昔のお金だったのだから。

呆然として考えた後、浮世はダイダラボッチに不安そうに尋ねた。

「なあ・・・それって使えるのか？」

その問いに、ダイダラボッチは呆れた様子で答えた。

「何言ってるの浮世？これはれっきとしたお金だよ？」

「いや、でも古くないか？」

「古い？これが今のお金だよ。」

その一言が、浮世を更に混乱させた。

しばらくして浮世は、ここが違う世界であつた事を思い出し、それが恐らくは原因だと自分を納無理矢理得させた。

「ああ、ごめんごめん。ここじゃそれが普通なんだな。」

疑念を抱いたダイダラボッチに対して、浮世は言った。

ダイダラボッチは不思議そうな感じで見ていたが、どうしてもよくなかったのか何も言わずに団子屋へと歩いていった。浮世も後を追うように歩いていった。

二人は外の椅子に座り、町並みを眺めながら団子を食べていた。団子を食べながら、ダイダラボッチは、

「おいしいね、浮世。」

と言ってきたので、浮世も食べながら返した。

「ああ。」

返した矢先に、ダイダラボッチがこんな事を言ってきた。

「でも、一人じゃ多分そんなにおいしくなかったかもね。こうして誰かと食べてるから、本当においしいと思うもの。」

そんな言葉に、浮世は少し戸惑った。

「そ、そりゃそうだろ。一人で寂しく食べてるよりはこうして二人で食べてる方が・・・」

と言っていると、ダイダラボッチの方に村の男と思える者が詰め寄ってきた。

その者は、ダイダラボッチをしばらく見た後、こんな事を言ってきた。

「お、君ってよく見たら・・・」

と言おうとしていた時、浮世の中で少しの不安があった。

もしかしてこいつ、ダイダラボッチが妖怪である事に気づいたのか？

だがそんな不安は、男の続けた言葉からすぐになくなった。

「結構かわいいじゃん。もしかして、君って今一人？」

どうやらどこにでもいるただのナンパ男だったようだ。

浮世はほっと一安心した後、ちよっとだけ違う不安をよぎらせた。

浮世はそばにいたからこそ思っていた。ダイダラボッチは浮世からだけではなく、全般的に見てかわいいと思われていたようだ。

このままこのナンパ男の誘いに乗るとは思えないが・・・

浮世が変な心配をして見ていると、ダイダラボッチがナンパ男にこう返答した。

「ごめんなさい、今は一人じゃないの。」

「へえ、じゃあ誰といるの？」

と尋ねると、ダイダラボッチはとっさに浮世の腕を両手で掴んで答えた。

「この人。」

これみよがしな様子に、ナンパ男は何も言えずにそのままその場を後にした。

去っていった後、ダイダラボッチがほつとした様子を見せた。

「わかってくれたみたいだね。よかったあ。」

と言っている隣で、浮世がひたすら戸惑っていた。

掴まれた腕には、よく見たらダイダラボッチの大きな乳房が少し当たっていた。

「ボボボッチい？ ななな何のつもりで、こここんな事やったんだあ？」

パニクる浮世に、ダイダラボッチはひょうひょうとした様子で答えた。

「え？だってあういうのはこうして見せ付けた方が早いと思ったんだもの。」

「そそそそれにしてもだな、いいいきなりと言つのは、ささささすがにだな・・・」

真つ赤な顔で忠告しようとする浮世に、ダイダラボッチが不満そうな顔をして言ってきた。

「・・・浮世は、私とこうしてるの、嫌なの？」

そんな問いに対して、浮世はオーバーヒートしたかのようにばたんと倒れてしまった。

その様子にダイダラボッチは驚き、すぐさま浮世の元に駆け寄った。

「浮世、どうしたの急に？浮世。」

耳元で呼びかけても、目が回ったような顔をしている浮世は起きそうにない。

困り果てていると、近くから誰かの声がした。

「あら？誰か倒れているわね。」

ダイダラボッチが声のする方に振り向くと、そこには頭に十字のマークのついた帽子を被り、赤と青がくつきりと分かれた服を着ていた長身の女性がいた。長い髪の毛は後ろで束ねていた。

ダイダラボッチは、誰かもわからない以上、まずは名前を尋ねた。

「あなた、誰なの？」

「私？私の名前は、八意 永琳。これでも医者よ。」

「お医者さん？」

「ええ、せつかくだから、そこに倒れている子を診てあげるわ。」

そう言いながら、倒れた浮世の傍に駆け寄った。

しばらく様子を見る永琳。心配になったダイドラボッチが尋ねてきた。

「あの・・・どうなの？治りそうなの？」

その問いに、永琳が逆に尋ね返した。

「あなた、この子が倒れる前はどうしてたの？」

「えーっと、私と浮世は二人つきりでいたんだけど、面倒臭そうなのが来たから追い払おうと浮世の腕を掴んで、こうしてるのって嫌って言ったら、急に倒れたの。」

間違っではない報告に、永琳は少し呆れた様子を見せた後、ダイドラボッチにこう言った。

「そうね、どこか休めそうな所を見つけて、この子を休ませてあげて。それから、あまりこの子にべたべたしすぎないようにね。」

と言い残して、永琳はその場を後にした。  
残されたダイドラボッチは、

「・・・休めそうな所って、やっぱりあそこだよね。」

と言いながら、浮世を担いで行ったのであった。

### 第三話 人里（後書き）

後書き

ペースとか考えてません。それがこれですよ。

とりあえず東方キャラ第一号として、永琳を登場させてみました。かなりサブ的な感じがちょっとまずかったですね。

最初に言いましたけど、これは本当にやりたかっただけが集合しているので、正直うってなる所もあるかもしれません。

それでもついてきてくれるみなさんには、本当感謝しています。

それでは、次はどうなるかはわかりませんが、第四話をお楽しみに。

#### 第四話 宿（前書き）

ありのままあらずじ

歩き続けて人里についた二人は、町並みを眺めた後に団子屋でゆっくりしてたら目障りなのが来たのでダイダラボッチが見せ付けたら、浮世がばたんきゅーして、永琳が気休めの診断を出した。

## 第四話 宿

### 第四話 宿

「・・・ん？」

浮世が目覚めた時、浮世はどこかもわからない部屋の布団に寝ていた。

とりあえず体を起こしてどうなっているのかを確認した。

部屋の間取りは畳が六畳ほどで、無地の襖と窓があった。

確認した後、浮世は自分がなぜこうなったのかを思い出そうとしていた。

確か・・・ボッチが俺の・・・腕を・・・

と思い出そうとした矢先に、浮世の頭は煩惱で一杯になった。そしてまた顔を真っ赤にした。

浮世はそういう事に関して、ほんと弱い男のようである。

電池の切れたおもちゃのようにただぼーっとしていると、ダイダラボッチが襖を開けてきた。

「やっと起きたの？浮世。」

襖から覗くように浮世に尋ねた。

声が届いてないのか、浮世は今だにぼーっとしている。

様子がおかしいと思ったダイダラボッチは、浮世の目の前に立ち、浮世の顔をじつと見た。

顔を真っ赤にし、心ここにあらずな浮世に、ダイダラボッチはどう

しようかと考えた。

しばらくしてダイダラボッチは、浮世のデコに軽くデコピンを放った。

ビシッとした音とともに、浮世は目を覚ましたようだ。

「いたっ！」

軽いリアクションを取った後に、浮世はすぐさま自身のデコを手で覆った。

突然の事に戸惑いながらも、浮世はどうか目の前に立っているダイダラボッチの存在を確認した。

そしてデコの痛みから、浮世は犯人が誰なのかすぐさま判断した。

「い、いきなり何するんだボッチ！？」

ちよっと怒った様子でダイダラボッチに尋ねると、ダイダラボッチは、

「だって、浮世ったら声をかけても起きないんだもの。だから実力行使に出ました。」

と言いながら、笑顔でデコピンを放った指を浮世に見せ付けた。

この様子に浮世は、

「実力行使って・・・今時デコピンはないだろ・・・」

と呆れた様子で軽いため息と共に肩を落とした。

そんな事などお構いなしに、ダイダラボッチが浮世に尋ねてきた。

「ねえ浮世、なんでさっき、体を起こしたままぼーとしてたの？」

その疑問に対し、浮世はさっき思い出していた事をまた思い出した。  
そうだ、俺が意識を飛ばしていた理由は・・・

その理由に到達した時、浮世の視線はダイダラボッチの大きな乳房にいつていた。

それが少なからず原因である以上は、視線がいつでも仕方ないだろう。

それでも、ダイダラボッチからしたらさすがに様子がおかしいと思うだろう。

「浮世つてば、聞ってるの？」

浮世に再び尋ね返すと、浮世は驚いた様子で反応した。

「あ、ああ。ごめん・・・またぼーっとしてて・・・」

頭をかき、申し訳なさそうな様子でダイダラボッチに言った。  
その様子にダイダラボッチは、

「・・・まあいいや。そんな事聞いても仕方ないもんね。」

と察した様子で浮世に言った。そのままダイダラボッチは話を続けた。

「それから、浮世に言っておくね。さっき浮世が倒れた時に、たまたまお医者さんがそこを通ってくれて、浮世はとりあえず休んでたら大丈夫なんだって。後、ここは村の宿の宿泊部屋だからね。」

と懇切丁寧に、浮世に説明をした。

それを聞いた浮世は、それまでの疑問を全て納得させ、とりあえず一安心した。

そんな様子の浮世に、ダイダラボッチがこんな事を言ってきた。

「あ、そう言えば私もお医者さんに、こんな事言われてたんだ。」

その一言に、浮世は恐らく見当違いの不安をよぎらせた。

「まさか・・・ボッチの身に何かあったのか!？」

と真剣な眼差しで言ったが、当のダイダラボッチはのん気な調子で答えた。

「いや、一応私の事なんだけど、浮世が関係してるの。」

「俺が関係している?どういう事だ?言ってくれ。」

「うん。えーっとね、浮世にあんまりべたべたしちゃ駄目だつて言われたの。」

その一言に、浮世は思わずえーっとでも言っているかのような顔になった。

「そ・・・そんな事?」

浮世自身はもつと深刻な事態かと思っていいたらしいが、これでは肩透かしもいいところである。

そんな事は露知らず、ダイダラボッチは軽い調子で答えた。

「うん。」

その一言によって、浮世は落胆と安心が混ざったような事態に陥った。

しばらくして浮世は、枕にまた頭を乗せて軽いため息を吐いた。がっかりとした様子ではあるが、浮世の内心は安心の方が大きかった。

とにかく、ボツチは大事には至ってなかったんだな。

その思った浮世の顔は、いつもの笑顔に戻っていた。笑顔に戻った所で、ダイドラボツチがこんな事を尋ねてきた。

「ねえ浮世、聞きたい事があるんだけど。」

「何だ？」

「・・・べたべたするって、何？」

その質問に、浮世は思わず戸惑った。ダイドラボツチがその事を知らなかった事と、その事を言わなければならない二つの意味合いによつてだ。

浮世はどう言おうかと迷った。と言うか言つべきなのかすら迷った。悩みに悩んだ末、浮世がダイドラボツチに答えを教えた。

「・・・あのな、べたべたするっていうのは、恋人同士がするような事を指すんだ。俺とボツチは恋人同士じゃないから、そんな事をするのはおかしいんだ。」

合っているのかよくわからない答えに、ダイドラボツチは、

「なるほどお。だから浮世は、いきなり倒れたりしたんだね。」

痛い所を突く様に答えた、

「・・・とにかく、これから過度のスキンシップは控えるように。」

教えるような感じで、ダイダラボッチに言った。

「はい。」

ダイダラボッチは子供のように素直な返事をした。  
返事をした後で、浮世がダイダラボッチに尋ねてきた。

「なあボッチ、今の時間はどうなってるんだ？」

その問いに対して、ダイダラボッチは、

「えーっと・・・ちよつと待ってね。」

そう言うと、ダイダラボッチは立ち上がり、おもむろに部屋の窓を開けた。

窓を開けると、そこから綺麗な夕日が部屋に差し込んできた。

「もう夕方みたいだね。」

わかりきった答えに、浮世は、

「そうだな。」

とよくわかったとでも言いたそうな顔で答えた。  
そして浮世が、続けてこんな事を言ってきた。

「じゃあ、今日はとりあえずここに泊まるとするか？」

浮世の問いに、ダイダラボッチは、

「大丈夫だよ。この部屋でもう決めてるから。」

とわかりきっていたかのように答えた。

その答えに浮世は一安心した後に、ある疑問をダイダラボッチにぶつけた。

「・・・ボッチ、今この部屋って言ったけど、もしかして相部屋なのか？」

その問いに、ダイダラボッチは、

「うん。もちろん浮世と一緒にだよ。」

と少し嬉しそうな様子で答えた。

その答えに浮世は開いた口がふさがらなくなった。

「え？え？ええええ！？マジで言ってるのか！？」

焦る浮世に、ダイダラボッチは、

「だって、そうじゃないと部屋代とか無駄になるでしょ？二人ならこの広さで十分だよ。」

「いやいや！俺が突っ込んでるのはそういうところじゃなくてだな、男と女が同じ部屋と屋根の下で二人つきりつてのはさすがにまずいと……」

と言いかけた時に、浮世の言葉が思わず止まってしまった。

なぜなら、ダイダラボッチがぼろぼろと涙を流していたからだ。

「……なんでよ、なんで浮世はそんなに私といたがらないの？私の事が嫌いなのか？私と一緒にいるのが嫌なのか？教えてよ……ねえ……」

涙で崩れ去ったダイダラボッチに、浮世がダイダラボッチの頭をなでてきた。

「……俺がボツチの事、嫌いな訳ないだろ？違うよ。ただ俺達にはまだ早すぎるだけだよ。わかってくれないか？」

浮世の一言に、ダイダラボッチは顔を上げて、小さくうなずいた。うなずいた後で、ダイダラボッチが小声で浮世に尋ねてきた。

「……同じ部屋じゃ、駄目なの？」

その問いに、浮世は、

「そうだな。宿代がもつたいないから、それぐらいはいいか。」

浮世のその一言で、ダイダラボッチは普段以上の笑顔になった。その顔にはもちろん、涙は流れていなかった。ただ笑顔だけであった。

## 第四話 宿（後書き）

後書き

さすがはやりたかったただけでありますね。半端じゃありませんねこのノリ。

ここまで付き合ってくれている強者はどれぐらいいるんでしょうか。本当色々ごめんなさい。

それでも本人は真面目にやっているんですよ。本当ですよ？

三人一緒にと違って本当ゆっくりですね。遅すぎるぐらいですかね？

更新はあくまで不定期ですので、これからもそれをお願いします。

あ、その事で一言ありました。三人一緒にも読んでくれている人なら気づいているかもしれませんが。

これからの更新ですけど、あくまで不定期ですが土曜日の昼から夜にかけて一応定期更新をする事にしました。

なので、これからはそれを一応の目安としてください。

それでは、第五話をお楽しみに。

## 第五話 夜の来客（前書き）

ありのままあらずじ

意識を失った浮世をダイダボツチが宿で寝かせ、浮世が起きた後で二人がちよっともめたけど、少しいい雰囲気になった。

## 第五話 夜の来客

### 第五話 夜の来客

話し合いが終わり、時間的にはもう夜になってきた。

浮世はとりあえずトイレに行こうと思い、ダイダラボッチに一言断ってから厠へと急いだ。

用をたし、浮世は手を洗いながら、ふとこんな事を思っていた。

それにしても・・・この村はあまりにも古すぎる気がするな・・・

ダイダラボッチが使っていた金銭は別にしても、ここは年代的にあまりにも古すぎる。

いくら田舎だと言えども、ここまで浮世との世界との年代差があるのは妙な事である。

仕方がない、後でボッチにちょっと聞いてみるか。

そう思い立った浮世は、厠から出て廊下を歩き出した

浮世が長い廊下を歩いていると、浮世が突然廊下の何もない所に体をぶつけてしまった。

それなりにリアクションを取った後で、浮世は自分の身に起きた不自然な出来事に困惑した。

浮世の目の前には何もない。しかし、浮世は確かに何かにぶつかった。

不思議に思った浮世は、ぶつかったと思える所をそくと触ろうとすると、今度は後ろから自身のズボンが引っ張られた。

引っ張られたとは言っても、大した力ではなかったので、浮世はと

りあえず後ろに振り向いた。

そこにいたのは、頭巾が被り、背丈は浮世の腰辺りと思える幼女であつた。ズボンを引つ張つたのはどうやらその子のおうである。

・・・この宿に住んでる子か？

そう思いつつ、少し戸惑いながらも、浮世はしゃがんで目線に合わせてから、その子に話しかけた。

「えーっと、何の用かな？」

笑顔で尋ねる浮世に、その子はなぜか何も言わなかつた。ただだんまりを決め込んでいる。

不自然に思つた浮世は、またその子に尋ねた。

「俺の言つてゐる事、わかる？」

浮世がさういうと、その子は一言も喋らずにうなずいた。

その様子から、浮世はこの子が何か理由があつて喋れないのかと判断した。

そう思つた浮世は、その子にこんな事を言つた。

「じゃあ、何か伝えたい事があるなら、身振りとかで教えてくれな  
いか？」

さう言つと、その子はさつきと同じようにうなずいた。  
それを確認してから、浮世はさつきした質問をまた言つた。

「で、何の用かな？」

と言うと、その子は浮世がさっきお願いした通り、身振り手振りで教えてきた。

浮世はとりあえずそれを口に出して確認していった。

「えーっと、私は・・・人を・・・探している・・・その人の特徴は・・・額に大きな目をしていて・・・髪が長くて・・・ぼーっとしてて・・・胸が大きい・・・だね。」

と浮世が確認を取ると、その子はまたうなずいた。

口に出して確認していた浮世は、その子が尋ねたい事をまとめた。

「うーん、この子はどうやら誰かを探しているみたいだな、特徴が確か・・・」

と思い出そうとした瞬間、浮世は真っ先にある者を思い出した。

待てよ・・・この子の挙げた特徴を全部足すと・・・あいつしかないじゃないか。

と思い立った浮世は、その子に探し人が誰なのかを訪ねた。

「なあ、君が探しているのって、もしかしてダイ・・・」

と言おうとしたその時、丁度浮世の後ろから、ダイダラボッチがゆっくり歩いてきた。

「あ、浮世。廁が長いから私、部屋を出・・・」

と言いかけた時に、浮世と話をしていた子が、突如ダイダラボッチに飛び込んできていた。

「わわわっ！」

突然の事に慌てるダイダラボッチだが、その子はどうにか自分の胸元で受け止めた。

受け止めた後で、ダイダラボッチはその子が誰なのか確認しようと顔を見た。

その瞬間に、ダイダラボッチの表情が突如変化した。

「・・・ぬうちちゃん？ぬうちちゃんだよね？そうだよね！？」

何度も確認をするダイダラボッチに、その子、つまりぬうはただうなずいた。

「こんな所で会えるなんて、思ってもなかったよ、ぬうちちゃん。」

懐かしさと嬉しさの混ざった調子で言っていると、ぬうがダイダラボッチにぎゅっと抱きついてきた。

恐らく、長い間ダイダラボッチと会えなかった寂しさから、自然とその行動をしているのであろう。

嬉し涙を浮かべて抱きつくぬうに、ダイダラボッチはぬうの顔をただじっと見つめた。

二人の様子には、さながら母と子のようであった。

そんな様子が続いている内に、すっかり外野状態の浮世が、気まずそうにダイダラボッチに尋ねた。

「ボッチ・・・その子って、一体何なんだ？」

と言うと、ダイダラボッチが浮世の方を見てから答えた。

「この子はね、私の友達のぬうちちゃんって言うの。これでもこの子、塗り壁って妖怪なの。」

と説明するダイドラボッチに、浮世はまた尋ねた。

「塗り壁？その子がそうなのか？とてもそうは見え・・・」

と言っていると、浮世は背中に何かがぶつかったような感覚に襲われた。

体がぐらつとなり、慌てた浮世はすぐさま後ろに振り返った。

そこにいたのは、これぞまさに塗り壁と言わんばかりの者が立っていた。

言葉を失う浮世を尻目に、ダイドラボッチがその壁に話しかけた。

「あ、ぬうちちゃんがいるから、やっぱりかあ君もいたんだね。」

とまるでいたのが当然かのように言うと、その壁、すなわちかあが口もないのに口を開いてきた。

「かあとぬうは一心同体。かあいなければ、ぬうはいられない。また、ぬうがいなければ、かあもいられない。」

と随分硬い調子で返してきた。

言葉を失っていた浮世は、そろそろ我に返り、そのままダイドラボッチにまた尋ねた。

「ぼ、ボッチい？こ、この壁って・・・」

と浮世はかあを指差して尋ねた。

ダイドラボッチはさっきと同じ調子でまた言った。

「うん、その子も、私の友達のかあ君。多分浮世の言う塗り壁ってイメージは、かあ君の方だね。」

と察した調子で言った。

「ま、まあ・・・」

と浮世は今だに戸惑いながらも、どうにか返事をした。その時に、浮世の後ろでかあが浮世に話しかけてきた。

「お兄さんはさっき・・・このかあにぶつかったか？」

と尋ねられた浮世は、身に覚えがないと思いつつ、さっきあった事を思い出していた。

さっき、浮世は確かに目に見えない壁にぶつかった。しかし、今日の前にいるのは紛れもなく目に見えていた。

その事から、浮世はあった事をそのままかあに言った

「えーっと・・・さっき、見えない壁にならぶつかった記憶があるけど・・・」

と言うと、かあが体の端についている手を浮世の肩をぽんと叩いてきた。

「それはまさしく、かあの事だ。」

と言われて、浮世は疑問をそのままかあにぶつけた。

「え？今の君は見えてる気がするけど・・・」

と言うと、かあは自慢げに語ってきた。

「かあは、姿を隠す事ができるのだ。だから、お兄さんはさっきかあにぶつかったのだ。それはつまり、かあの思惑通りなのだ。」

と言われて、浮世が戸惑っている内に、ダイドラボッチが後ろから浮世に話しかけてきた。

「浮世、塗り壁って妖怪はね、自分の企みとかがうまくいくと喜ぶ妖怪なの。だから、かあ君は今喜んでるのよ。」

と言われた浮世は、さっきまでであった疑問とともに、それまでであった事に全て合点がいった事を自己確認した。

そうか、これが妖怪って物なのか。

浮世はただ、目の前にいる妖怪と、それが持つ習性に感心した。そして浮世は、とりあえずダイドラボッチにある事を尋ねた。

「ボッチ、この子達は、これからどうするんだ？」

と言われて、ダイドラボッチは、

「そうだね、せっかくだから、私達の部屋でみんな泊まる事にしない？あの部屋なら、むうちゃんやかあ君も寝られると思うの。」

と浮世に返した。

そう言われた浮世は、

「・・・それはいいんだけど、この子達はとうなんだ？」

と尋ねたので、ダイダラボッチがむうとかあの二人？に、

「あのね、むうちゃんにかあ君、これから私とこの人はこの宿の同じ部屋で寝泊りするんだけど、二人はどうか？一緒に寝泊りしない？」

と二人に尋ねた。

むうはダイダラボッチに対して黙ったうなずき、かあは、

「むうがいいなら、かあもいい。」

と答えた。

「じゃあ、晩御飯を食べた後に、みなでお部屋に行きましょう。」

と言った後、ダイダラボッチは道案内でもするかのように、晩御飯が用意されている所へと歩いていった。

他の三人も当然ダイダラボッチへとついていった。

廊下を歩いている時に、浮世がふとある疑問を抱いた。

冷静に考えたら・・・かあ君ってどうやって襖を超える気なんだ？

そう考えてから浮世は、後ろをゆっくりと歩いているかあに目を向けた。かあの大きさはどう見繕っても天井ぎりぎりの大きさである。浮世にじつと見られたのが気になったのか、かあが口を開いてきた。

「どうしたんだ、浮世お兄さん。かあの体がおかしいか？」

「いや、おかしいと言うか・・・正直に言うと、君はどうやって襖とかを超える気なんだい？」

疑問をそのままかあにぶつけると、かあは鼻で笑ってきた。

「それなら大丈夫だ。かあは大きさも変えられるのだ。これは普段の大きさよりまだ小さいのだが、もっともっと小さくもなれるのだ。せっかくだから、浮世お兄さんに見せてあげよう。」

と言うと、かあは天井までの高さから、浮世と同じぐらゐにまで縮んだ。

その様子を見た浮世は、ただ納得するしかなかった。

食事が終え、浮世達は寝泊りする部屋にて就寝していた。

現代とは違い、一つのろうそくの小さな光だけが、全員が布団で寝ている部屋を照らしていた。

恐らく全員が寝静まったと思えた時、浮世だけはどうも寝られない様子を見せていた。

浮世が寝られない理由・・・それは、今の自分がなぜこんな世界にいるのかと言う疑問であった。

浮世にとって、まったく見慣れない世界。所々が浮世にとって、勝手が違っていた。

それでも浮世は、この世界が自分の世界より恐らくいい世界だと思っていた。

その理由は、この村の人々の暖かさである。

自分のいた世界ではどんどん失われている人情。だが、この世界はあまりにも人情で溢れていた。

それが浮世にとっては、とても喜ばしい事であつたらしい。

そんな事を思っている内に、浮世もまた睡魔に襲われ、皆と同じように眠りについた。

自分がなぜこの世界に来たのか、知るよしもなく、深く思う事もなく・・・

## 第五話 夜の来客（後書き）

後書き

ええつと、とりあえずこんにちわ。

ペースは友達から言われましたけど、相変わらずゆっくりです。まあ勘弁してくださいな。とりあえず一日目は終わりましたよ。

今回から新キャラとして、塗り壁妖怪コンビのぬうと、かあつてのを出してみました。名前の由来とかはまあまんまです。

むうはキャラ的に当然なんですけど、かあも一応精神は子供って事を覚えておいてくださいね。

てか、かあつて読みにくいですね。まあ仕方ないんですけど。

ここだけの話ですけど、塗り壁って本当はこの話のぬうみたいな妖怪らしいですよ。眉唾ですけど。

後、わしは食事のシーンとかほとんど書きませんので、それも気持ち覚えておいてください。

では、第6話をお楽しみに。

## 第六話 みんなのこれから（前書き）

ありのままあらずじ

浮世がトイレにいつていたら、塗り壁妖怪のぬうに会い、ぬうがダイダラボッチに抱きついた後に浮世の後ろからかあが出てきて、その後四人？は同じ部屋に寝泊りした。

## 第六話 みんなのこれから

第六話 みんなのこれから

翌朝、四人が寝る部屋の小さな窓から朝日が差し込んできた頃、浮世が一番早く起きたようだ。

「ん？もう朝か・・・何か体が重いな・・・」

と不自然に思った浮世が目を開けると、なぜか他の三人が浮世の掛け布団の上で寝ていたのだ。

他の布団が蹴散らされている所を見ると、どうやら全員、寝相によつてこうなつたようだ。

「こいつら・・・寝相が悪すぎるってレベルじゃねえぞ・・・」

その有様を確認し、浮世はどうしようかと考えた。このままでは自分の体を起こす事もままならない。

「くそ・・・もういい!!」

思い立った浮世は、自分の掛け布団を一気に引っぺがそうとした。しかし、思いのほか乗っかっている者達、恐らくは塗り壁のかあが重かつた模様。浮世の手は布団でがっとなつたまままったく動かなかった。

「・・・」

もはや浮世にはどうする事もできなかった。

と思われたその時、割と浮世に近いダイダラボッチが起きたようだ。

「ふあゝ・・・もう朝あ？」

とねばけ調子の声をさせる。

その後で、ダイダラボッチが浮世に気づいた。

「浮世お？なんで私の布団の下にいるのお？」

まだ寝ぼけているので、勘違いをしているようだ。

「いや、ここは俺の布団だよ。ボッチ達が寝ぼけて俺の布団の上に来たんだろ？」

「ええ？私達があ？」

「後ろ見てみる。」

「うん・・・」

と言われ、ダイダラボッチは後ろを振り向いた。

恐らく自分と同じように浮世の布団の上で寝ている二人が、ダイダラボッチの視界に入った。

「・・・あ、わかったあ、みんな寂しかったんだね。」

寝ぼけているだけあって、ダイダラボッチは滅茶苦茶な答えを出した。

「いやいや、そうだとっても、人の布団の上に集合してんじゃねえよ!」

怒り調子に、浮世が言った。

「えーっと、とりあえず二人を布団の上から降ろせばいいのね?」

ようやく起きたような様子で、浮世に尋ねた。

「まあ、そうしてくればいいんだけど、さすがにかあ君をどかせれ・・・」

と言おうとした時には、ダイダラボッチが既に二人を軽々と片手で布団の上から降ろしていた。

降ろされた二人は、ようやく目を覚ましたようだ。

「うゝむ・・・もう朝なのか?」

かあがやはり寝ぼけ調子で言ってきた。  
ぬうも同じく寝ぼけ調子である。

「あ、二人ともやっと起きたみたいね。」

ダイダラボッチがその様子を見て言った。

「じゃあ、みんな起きたんだし、布団片付けよっか。」

とダイダラボッチが言った後、率先して布団を片付け始めた。  
他の者も、その様子を察して片付けを始めた。

しばらくして、顔を洗い、朝食を済ました一行は、朝の町をゆつくりと歩いていた。

歩いている時に、浮世は冷静になってある事を考えていた。

今更なんだが・・・かあ君はこの姿で大丈夫なのか？

とそんな心配をしていると、町にいる子供がこっちに向かって駆け寄ってきた。

「うわあ、大っきいね、君。ねえ、どこから来たの？」

とその子供は、浮世が心配していたかあに話しかけた。どうやらお目当てはかあだったようだ。

「どこから？かあはどこから来たのかちよつと覚えてない。」

とその子供に返した。

「へえ、そうなんだ。あ、そうだ。この後みんなで遊ぶから、君も一緒に遊ばない？」

「うん・・・ぬうもいいなら、かあもいい。」

「ぬう？」

と言われた子供は、かあの傍にいたぬうに視線を移した。

「あ、君の事？」

と尋ねた子供に対して、ぬうは黙ってうなずいた。

「うん、もちろんいいけど、ぬうちゃんはいいの？」

とまた尋ねると、ぬうはまた同じようにうなずいた。

「じゃあ、二人ともこっちに来てよ。」

とその子供は、二人を案内するように歩いていった。

ぬうとかあの二人は、そのままその子供へについていった。

一連のやり取りの後、浮世が今あった事を整理した。

「い、今まであった事をありのままにまとめろぜ、俺がかあ君の心配をしていたら、子供がかあ君とぬうちゃんを遊びに誘ってきた、二人ともいつちまったんだ。俺とボッチは何も言う間がなかったんだぜ……」

と以前やった事に対し、ダイダラボッチは、

「……浮世、それって流行ってるの？」

ありのまま浮世に尋ねた。

「それほどでもない。」

とまだふざけた様子で返した。

「まあいいけどね。」

とボツチもあきらめた様子で言った。

「それはそうとボツチ。」

我に返った浮世が、ダイドラボツチに話しかけてきた。

「この里の子は、どうやら妖怪の類とかには慣れてるみたいだな。」

「そうみたいだね。」

「・・・それはいいんだけど、さっきの子は、かあ君を自分と同じ子供だと思っていたみたいに接してきたよな。」

「・・・それはね、浮世。」

ダイドラボツチが、変に改まった様子で言ってきた。

「種族が違っても、子供たちはわかりあえるものなのよ。」

大人びた様子を見せてきたダイドラボツチに、浮世は少し戸惑ったが、

「・・・そうだな。きっとそうだ。」

と同感の意を見せた。

二人でかあとぬうの様子を見ている内に、浮世がさっきまで思っていた疑問をダイドラボツチに尋ねてきた。

「今更なんだけど、さっきボツチはかあ君を軽々と持ってたよな？ぶっちゃけ重くなかったのか？」

「大丈夫だよ。かあ君は子供なんだから。」

と言われても、布団の上にいた時の重さを考えると、浮世はどうにも納得できなかった。

「もしかしてだけど、ボツチってとんでもない力持ちとか？」

と言うと、

「そ、そんな事ないってば!!」

とダイダラボッチは照れながら、浮世の顔を思いっきりビンタした。凄まじい轟音と共に、浮世は町にあった店まで吹き飛ばされていた。

しばらくして、全身包帯だらけの浮世が、ダイダラボッチと一緒に店の長椅子に座っていた。

「・・・」

さすがに不機嫌な浮世に、ダイダラボッチがひたすら謝っていた。

「ごめんね浮世、あんなに飛ぶなんて思わなかったの・・・」

「・・・もういいよ・・・」

とやけくそに返事をした。

その後で、浮世はふと自分が思った事を口にした。

「・・・なあボツチ・・・冷静に考えたらさ・・・俺ってこれからどうすりゃいいんだろうな・・・」

そう、浮世は訳もわからずこの世界に来た以上、目的も何も定まっていらない状態である。

悩む浮世に、ダイダラボッチがこんな事を聞いてきた。

「それだったら・・・私と一緒に、妖怪と人と仲良くする旅をしない？」

「え？」

「私ね、浮世に助けられる前、この世界にいる色んな妖怪達に、人と仲良くしようって呼びかけをしたの。もちろん人にも同じようにね。でも、一人じゃあんまりうまくいかなかったって言うのかな・・・気がついたら、私はああなってたの。」

照れくさそうに話すダイダラボッチの顔を見て、浮世はなぜダイダラボッチが封印されていたのか、わかりたくなけてもわかってしまった。

恐らくダイダラボッチがよかれと思ってやっていた事が、自然と人や妖怪から疎まれる原因を作っていたのだろう。だから、ダイダラボッチは封印をされてしまったのだ。

浮世にとって、出来ればそんな形でたどり着きたくなかったであろう、ダイダラボッチが封印されていた答え。

しかし、浮世はそれも受け入れてこそ、ダイダラボッチの誘いに答えられると判断した。

「・・・わかったよ、これから、ボッチと一緒に旅をしよう。」

浮世の決意の一言に、ダイダラボッチは、

「本当？じゃあ、改めてよろしくね、浮世。」

と浮世に、了解の握手を求めた。

浮世はそれに答えるように、

「ああ、よろしくな、ボッチ。」

とその手を握り返すのであった。

## 第六話 みんなのこれから（後書き）

後書き

こんぱわ（＾―＾）みんなのアイドル（笑）の澄田です（＃＾―＾＃）

今回の話によって、ようやく浮世達のこれからが見えましたね（>―<）／

東方キャラは・・・我慢してくれよ、ジョニー（＾―＾）

それはいいんですけど、実はぶっちゃけた話が一つあるんです（―・―）

それは・・・自分で考えたオリジナル妖怪のキャラがあんまりいいんです（；；；）

なので、わしの尊敬する銀さんしろがねを真似る訳じゃないんですけど、感想とかでオリジナル妖怪の募集をしたいと思いますm（――）m

設定とか能力とか詳細とか詳しく書いてくれるとありがたいですm（――）m

ある程度現存の妖怪とかの方がありがたいんですけど、ぶっちゃけ妖怪ならそれでいいです（>―<）／

ただし、話で出す場合は、妖怪本来の姿ではなく人の姿で出すと思います。ここは幻想郷ですから、それぐらいokしてくださいなm

——) m

あ、でも妖怪本来の姿がある的な設定はなるべくお願いしますm(——) m

では、そんな募集をしてからなので次は遅くなるかもしれませんが、第七話をお楽しみに(#^|^#)

PS、マジで自分が考えてるの二人ぐらいしかいないので、マジお願いしますm(——) m集まらなかったらリアルこの話死にます・  
・(∴∴)

## 第七話 予言を告げる妖怪（前書き）

ありのままあらずじ

浮世が朝起きると、びっくりするぐらい寝相の悪い彼らに困ったが、ダイダラボッチが起きてどかしてくれたのでどうにかなった。外に出ると、かあとぬうが町の子供に遊ぼうと誘われ、ついていった様子を浮世達は見守っていた。その後浮世がダイダラボッチにデリカシーのない一言を飛ばした為、浮世が文字通り吹き飛ばされ、包帯ぐるぐるのミイラ状態になった。そして浮世は、これからの目標を定めた。

## 第七話 予言を告げる妖怪

### 第七話 予言を告げる妖怪

浮世がこれからどうするかが定まったのはいいものの、冷静に考えればそれはどういった旅なのか浮世にはあまり検討がついていなかった。

なので、浮世は早速ダイダラボッチに尋ねてきた。

「ボッチ、旅をするのはいいんだけど、まずはどこに行くとか決めてるのか？」

と浮世が言つと、ダイダラボッチが首を傾げてしまった。

「あ・・・そう言えばそうだね。以前の旅は結構行き当たりばったりだったって言うのかなあ・・・」

「さすがにそれは困るんだけど・・・」

と浮世は呆れた様子を見せた。

悩める二人の前に、誰かが急に話しかけてきた。

「ちょっと、その二人、何か困っているのか？」

と言われ、浮世とダイダラボッチは声のした方に振り向いた。

そこにいたのは、ポニーテールをなびかせ、頭には一目でわかる大きな牛の角を生やし、白い和服姿の女性が、煙草を吹かしていた。

どこをどう見ても妖怪丸出しなその女性に、浮世はまず聞くべき事

を聞いた。

「あの・・・誰だ、君？」

当然な問いに、その者は悠然とした態度で返してきた。

「おい、名前を尋ねる時は、まず自分から名乗るのが筋じゃないのか？」

それもまあ道理である一言だ。

浮世は少し納得のいかない様子で、その者に挨拶した。

「・・・俺の名前は人橋 浮世って言うんだ。で、隣にいるのが妖怪のダイダラボッチだ。」

ダイダラボッチも紹介する感じで、浮世が言った。

「そうそう、それでいいんだよ。それじゃ、私も答えるでしょうか。私の名前は、くだんだ。」

とその女性は挨拶をした。

「で、くだんさんは、俺達に何か用があるのか？」

浮世が改まった様子で尋ねた。

「用？私はただ、お前達二人が困ってそうにしてたから、何か手助けでもしてやろうと思ったただだよ。」

「手助け？悪いけど、これはあなたに話しても仕方の無い事だ。」

浮世はそっけのない態度で、くだんに応対した。

「そうでもないんじゃないか？私には・・・お前達の未来が見えて  
いるのだからな。」

その一言が、さっきまで無関心そうな浮世の表情を変えた。

「未来が・・・見えている？それはどういう事だ？」

浮世はただ真つ直ぐに、くだんを見据えた。

「まあ見えていると言つのは語弊があるな。正確に言つと・・・予  
言だ。」

「予言？」

「そうだ。私は種族の違いを超えて、そいつの予言をしたりするん  
だ。まあ基本的には人間にしているがな。」

そう語るくだんが、浮世は半信半疑な様子である。

「じゃあ・・・些細な事でいいから、何か予言をしてくれないか？」

と問った浮世に、くだんが軽快に答えた。

「そうだねえ・・・そろそろお前達と一緒にいた者が、遊びから帰  
ってくる頃合だ。」

と言うと、さっきまで町の子供たちと遊んでいたかあとぬうが、浮

世達のいる方へと歩いてきた。

「うむ、かあはとても楽しかった。ぬうもそうか？」

ぬうに意見を求めるかあ。ぬうもうなずいて答えた。

そう、くだんの予言が当たったのだ。偶然かもしれないが、それでも予言どおりにはなっている。

二人が浮世達に駆け寄って来た時、浮世は動揺を隠せずにはいられなかった。

その様子を不自然に思ったかあは、浮世に話しかけてきた。

「む、どうしたのだ、浮世兄さん？」

かあの一言に、浮世は我に返った様子で返した。

「あ、ああ、なんでもないよ。」

そう言った後で、くだんの方をまた見た。

「なるほどな・・・じゃあ、その予言を俺達に言ってくれるのか？」

「お前達が望めば、してやってもいいぞ。」

その一言を聞いて、浮世はダイダラボッチに意見を求めた。

「ボッチは、そういう事を知りたいか？」

と言われたダイダラボッチは、普通に浮世に返した。

「私は、どっちでもいいよ。浮世が決めたらどう？」

「うん・・・そうだな・・・」

予言、曖昧かもしれないが、これからの道しるべになる可能性は十分にある。

しかし、それと同時に、知りたくない事もしてしまうかもしれない。

浮世は悩んだ末に、くだんに答えを出した。

「くだんさん・・・好意はありがたいが、予言なら遠慮しておくよ。行き当たりばつたりな旅でも、変に先が見えない方が面白いんだ。」

浮世の思いを込めた言葉に、くだんは感心した様子で答えた。

「ほう、そうかい。まあ知りたくないという事もわからん事はないか。」

と言うと、くだんは浮世達に踵を返してこう言ってきた。

「先に言っておくが、私はずっとここに居る訳じゃあない。だから、お前達に今度会う時はどうなるかわからないぞ?」

と釘を刺そうとしたが、今の浮世にはそれすら無粋だったようだ。

「大丈夫だよ。俺達は、どんな未来でも乗り越えてみせるさ。」

そう言われたくだんは、一本取られた様子を見せた後に、楽しそうに笑った。

「ははは、お前みたいな人間は始めてだ。私と会った人間は大抵未

来を知りたがるのに、お前はちつともそれを望まない。ここまで正直だと、もう笑みしかこぼれないよ。」

振り返り、愉快そうに語った。

そんな様子のくだんに、浮世がある事を尋ねてきた。

「あ、でも知りたい事はある。」

「なんだい？」

「俺に能力があるかもしれないんだが、それが何なのかわからないんだ。あなたは、そういった事はわかるか？」

と問いかける浮世に、くだんは振り返って歩き出し、適当な調子で答えてきた。

「・・・私はあくまで予言しかしないよ。でも、それが知りたいのなら、妖怪の山にでも行くといい。私から言えるのはそれだけだ。じゃあな。」

片手を軽く振って、くだんはその場を後にした。その後で、浮世がダイダラボッチに話しかけた。

「ボッチ、妖怪の山ってどこにあるんだ？」

そう尋ねられたダイダラボッチは、それがあらしい方角を指差した。

「えーっと、あっちの方だよ。せっかくだから、最初の旅は妖怪の山にしようか。二人も、それでいい？」

ぬうとかあに賛同を求めると、二人とも返事代わりに軽くうなずいた。

「じゃあ、これから妖怪の山へレッツゴー。」

そして、四人はダイダラボッチを先頭に、妖怪の山へと歩いていった。

一方、その様子を遠巻きからみていたくだんは、こんな事をつぶやいていた。

「・・・あの人間が、予言を知りたいと言わなくてよかった。まさか、あんな物が見えるだなんて、思いもしなかったよ。」

吹かしていた煙草の煙をゆっくりと吐き、雲が適当に散らばった空を仰いだ。

「・・・さて、これからどうなるか。だねえ・・・」

## 第七話 予言を告げる妖怪（後書き）

後書き

こんぱろ（＃＾―＾＃）早速オリジナルな妖怪出しちゃいました澄田です（＾―＾）

出してくれたのはわしとすっかりお馴染みなつもりの銀さんです（＾―＾）マジありがとうございます（；；）いやあ、本当ありがたいです。

そんなわしですけど、ぶっちゃけまだまだ足りないのが現状ですm（――）m

ですので、引き続き募集しちやいますので、よろしくですm（――）m

ずっと謎だった浮世の能力が、次回いよいよ明らかに・・・なったらしいですね（＾―＾）

ノリで話を書き続けている以上、  
どうなっちゃうかわしにもよくわからないんです（？・？）

まあ一本筋は通っているので、どうかゆっくりまったりと見てくださいな（＃＾―＾＃）

では、第八話をお楽しみに（＃＾―＾＃）

## 第八話 鴉妖怪の導き（前書き）

ありのままあらずじ

浮世がこれからの事でふわふわとしていたら、くだんという妖怪に話しかけられ、根拠のある予言をしてやると言われたが、浮世は考えた末に断り、せめて自分の能力はどうかと尋ねると、妖怪の山に行けと言われたので、そのまま一行は妖怪の山に行く事になった。

ではとぞ。

## 第八話 鴉妖怪の導き

### 第八話 鴉妖怪の導き

人里を発ち、浮世達は妖怪の山までひたすらに歩いていった。

浮世は長い道中で一人、歩きつつもさつきくだんの言った事がまだ引っかかっていた。

妖怪の山に行けば、俺に能力があるのかわかる・・・それは、どうやってわかるものなのだろうか・・・

およそ余計な心配とも取れる物だが、知り方次第ではと考えると、浮世も不安にはなるだろう。

じーっと考えて、てくてくと歩き続ける一行。

考え事をしているのでだんまりを決め込んでいる浮世に、暇そうなダイダラボッチが、そつと浮世のほつぺたをぎゅうつとつねった。

「いたたたたあ！！何するんだよボッチ！？」

引つ張られた所を手で押さえ、がなる浮世。顔は少し涙目になっていた。

「だってえ、浮世ったらさつきからずっと喋ってくれないんだもの。ちよつとは喋ってよ。」

ダイダラボッチが、不機嫌な様子で顔をフグのようにプクツと膨らましてきたので、浮世は頬の痛みを忘れて、はははと笑ってしまった。

「ちょっとお、そんなに笑わないでよ。」

今度はフグではなく、正真正銘不機嫌になって浮世に掴みかかったが、浮世はそれでも笑い調子である。

「だって・・・いきなりそんな顔するからさあ・・・はははは。」

浮世の笑い声に重なって、ぬうとかあの二人も自然と笑っていた。これにはダイダラボッチも、ただ呆れるしかなかった。

「もういいわよ。みんなで私を笑い者にしてればいいじゃない。」

本気ですねたダイダラボッチは、皆と歩みを合わせず、すたすたと先に行ってしまった。

「ちょ、待てよボッチ。」

浮世達三人が、慌ててダイダラボッチの後を追っていった。少し先にて、ダイダラボッチは変に開けた所で、三人を待っていた。いや、誰かを話をしているので、止まっている様子であった。

「ん？誰だあれ？」

疑問に思いながら、ようやく三人がダイダラボッチのすぐ傍にまで来ると、ダイダラボッチが誰かと喋って、いや、話しかけられていた。

その者の容姿は、頭に鴉を乗せたような髪型に、ぴっちりとしたスーツ。そして人目でわかる大きな黒い翼が、背中から生えていた。

「いやあ、こうして会うのは久々ですねえ、ダイダラボッチさん？」

キザな調子と、作っているのが丸わかりの笑顔を向けて、ダイダラボッチに話しかけてきた。

「そうね、八咫鳥。出来れば会いたくなかった。」

ダイダラボッチにしては珍しく、やけに冷たい応対をした。

「やだなあダイダラボッチさん。私めはそんなに嫌な妖怪ではないですよ？」

取り繕った嘘が見え隠れする台詞は、まるで相手を逆撫でしているようであった。

そんな二人の間に、浮世が割って入ってきた。

「お前、一体誰だ？」

浮世の問いに対し、八咫鳥はダイダラボッチに接している時より、冷たい態度で接してきた。

「・・・いきなりなんですかあなた？お名前を尋ねる時は、まず名乗るのが先でしょう？」

それは当然の事であるのだが、浮世は相手の態度と相まって、心の中に軽い怒りを蓄えた。

「ああ、それもそうだな。俺の名前は、人橋 浮世だ。」

「人橋、浮世・・・ああ、あなたが、あの人が話していた人ですか。」

一人でに納得してきたので、浮世は当然疑問に思った。

「あの人？あの人って誰だ？」

「おっと、つい口が滑ってしまいましたね。まあ気にしないでください。こっちの話ですから。」

適当な調子で、浮世の尋ねた事ははぐらかされてしまった。その後で、八咫鳥が興味深そうな様子で、浮世の方をじろじろと見てきた。

「・・・ほお、なるほどなるほど、これは・・・」

一人でぶつぶつと言われれば、浮世だけではなく、他の者も不気味に思う。

「八咫鳥、あなた、浮世に何か余計な事でも言う気なの？」

相変わらず冷たい態度を変えないダイダラボッチ。

「いえいえ、私めはあくまで導くだけ・・・余計な事ではありませんせんよ。」

導く、その単語だけが、浮世の中で引っかかった。

もしかしたらこいつが、くだんさんの言っていた・・・

そうとは限らないだろうが、浮世は話の流れから察した。

「あなたが・・・俺の能力が何かを知っているのか？」

率直に、唐突に、はつきりと、浮世はそう言った。  
それを聞いた八咫鳥は、不気味にくくと笑った。

「知っている・・・というのは語弊がありますねえ。正確に言えば、これからあなた自身に気づいてもらうんですよ・・・自身の能力が何かを。」

そうか、やっぱりそうだ。俺は能力を持っていて、こいつがその能力が何かを教えてくれる奴だったんだ。

だが、八咫鳥の言い方では、どうやら直接教える気はないようである。

「気づく？俺自身がか？どうやって？」

「単純な事ですよ。これから私めと一つ・・・戦ってもらいます。」

「はあ？」

八咫鳥が言った事に対して、浮世は驚嘆の表情になってしまった。

俺が・・・この妖怪と戦うだって？

突然すぎる一言は、浮世が当然納得するはずなかった。

「ちょっと待てくれ、俺の能力は戦わなければわからないのか？」

「そうです。私めの能力が一番効果的に発揮するのは・・・血を血で洗う、戦いの最中ですよ。」

笑顔でさっきまで見せなかった眼を、薄目で見せてきた。

その目つきの悪さは、さっきまでなぜ笑顔であつたのかを全員に覺らせた。

では、その目を見せてきたという事は・・・彼なりになんかしらの意味を含めているのであろう。

浮世は八咫鳥の心意気に応えた。

「・・・わかった。これから俺とあなたで、一対一で戦うよ。」

浮世の固い決意が込められた、彼らしい一言であつた。

しかし、その決意にダイドラボッチが黙っている訳がなかった。

「浮世！？あなた、この世界に来て間もないんでしょう！？戦う事なんて出来るの！？」

当然といえる心配だが、浮世はそつとダイドラボッチを諭した。

「大丈夫だよ。俺だつて、それなりにがんばれる。ぬうやかあも、心配しないでくれよ。」

浮世の後ろで心配そうに見ていた二人を氣遣つた。

二人はただ、黙つてうなずいた。浮世を信じているからこそである。浮世は三人分の思いを背負つて、戦いへと身を投じていった。

「くくく・・・どうやら戦う覚悟は出来たようですね。」

さっきまでの不気味な笑顔に戻し、浮世を見据えた。

「ああ。じゃあ、手合わせ願おうか。」

浮世のマジになった顔と様子に、八咫鳥もさっきまでの軽い様子ではなく、真面目に応えた。

「はい。では始めましょうか。まあ安心してください。死なない程度にやりますから・・・」

今、浮世にとって、意味のある戦いが、八咫鳥にとっては、仕事としての戦いが、始まるうとしていた。

## 第八話 鴉妖怪の導き（後書き）

書き

ふう・・・やっと連載の方書ける状態になれたよ・・・（-\_-）

最近はずっと短編祭りって事で、ほぼ毎日2話ペースで書いてたから、こっちの方はもう完全にほったらかしでした（? - ?）

まあ、経験値的な意味では大きかったですかね。後めぐり合えた人とか。

今回の話によって、ようやく浮世に能力があるのかがわかりましたね（^ー^）

でも・・・相変わらずおっせえ・・・自分で思いますよ本当・・・

（-D-）

まあ、最初からゆっくりとやっていく予定でしたから、それも仕方ないんですけどね。

今回登場した八咫鳥って妖怪は、わしの馴染みの零岬さんからです。マジ感謝ですm（-）m

ただどやっぱり絶賛募集中ですので、これからもよろしく願いますね（#^ー^#）

あ、せっかいですから、八咫鳥のプロフィール的なものをどうぞ。

八咫鳥「ヤタガラス」

外見 見た目はスーツを着た人間で、髪型は髪に鳥を乗つけたような感じ。後ろに黒い羽を生やし、顔は目つきの悪さをを誤魔化す為にいつも笑顔。

能力 人を導く程度の能力

人物設定・・・

人を良い方にも悪い方にもなにかしらの為になる方に導く妖怪。基本的には、面白くなる方に導こうとするので、悪い方に傾く事が多い。

悪人ではないが、不気味な容姿等が災いしてか、周りからはあまり好かれてはいない。

自分のペースに持ち込む事に長けている為、自分より目上の者や力の強い者でも、容易く手玉に取ってしまう。これもまた好かれない要因だろう。

いつも軽い調子だが、職務を真つ当する時はしっかりとした一面も見せる。

イメージ二つ名 運命の導き手

バトルイメージ

自身の羽を矢のように放つ弾幕。心理戦等で相手を霍乱したり、高速飛行からの連撃などが得意。

こんな感じです。

では、多分結構な人の予想を裏切る、第九話をお楽しみに（#^|

^  
#  
)

## 第九話 能力覚醒（前書き）

ありのままあらずじ

人里を出た一行が妖怪の山の近くで待ち受けていたのは、八咫鳥と名乗る物であった。浮世が自分の能力を確かめる為に、浮世と八咫鳥が一騎打ちをする事になった。

ではどぞ

## 第九話 能力覚醒

### 第九話 能力覚醒

合図などあるわけなく、二人の戦いはにらみ合いながら始まった。この時の浮世は、戦いと言ってもあくまで殴りあう程度だと考えていた。

俺はこれでも、案外喧嘩が強いんだ。簡単には負けない。

そう、彼はまだ知らなかったのだ・・・弾幕ごつことという言葉を・

・  
浮世がどうしようとかイメージトレーニングをしていると、浮世の頬をヒュンと何かがかすめた。

それは、八咫鳥が高速で放った自身の羽であったのだ。

頬から血が流れ、呆然とする浮世。

八咫鳥はさっきの不気味な笑いをさせてきた。

「くくくく・・・どうしましたか？先ほどの啖呵を切った時の勇ましたはどこにいったのですか？」

そんな事を言われても、浮世はてんで今の現状を理解してなかった。自分が思っていた事と、まるで違う事が起きていると気づいた時、浮世の頭の中がぐちゃぐちゃになってしまったのだ。

え？今の何？どういう事？これって殴り合いとかの類じゃないの？

訳がわからないまま棒立ちになっていると、八咫鳥の周りに羽がぶ

わつと飛び広がった。

その矛先が全て、浮世の方に狙いを定めていたのだ。

「まあいいです。ご自身の能力に気づくまで私めは・・・容赦なく攻撃をし続けます。一分は持つてくださいね。」

にこりとそう言うと、浮世目掛けて・・・空中に待機していた羽が、断続して浮世に襲い掛かっていった。

「ちょちょちょちょちょお！！??？」

浮世の方にダダダダダダと四方八方飛んでくる羽の弾丸の前に、浮世は避けながらとにかくダッシュで逃げた。

「む、無理無理無理無理無理無理無理！！！！こんなもん一分どころか十秒持つかあ！！こんな戦いするなんて聞いてねえよ！！助けて！！お願い助けてボツチ！！」

飛び交う羽を避け続けて、必死に呼びかけても、ボツチは結構遠くで、かあと話をしていた。

「浮世・・・大丈夫かなあ？あんな状態から、どうやって勝つ気なんだろうね？」

「浮世兄さんの事だ。もしかしたら、凄い隠し玉を持っているのかもしれない。」

「そうだよな？かあ君の言うとおりだよ。私を助けた時の力を、きつと温存してるに違いないわ。」

幸か不幸か、浮世には二人の会話の内容がはつきりと聞こえてしまった。

そしてその会話の内容から察するに、浮世はどうあがいても助けを貰える訳がなかった。

ははははゝゝゝあいつらゝゝゝ俺の事買いかぶりすぎだろゝゝゝ  
・てかこんな有様で、戦えてる訳ないだろゝゝゝ何が温存だよゝゝゝ  
・そんなもんあるならとっくに死んでるよゝゝゝ

しかし、全ては自分が招いた結果である以上、自分でどうにかしなければならぬのが現状である。

雨のような敵弾が飛んでくる中で、浮世はとりあえず近づこうと判断した。

そう、遠くから一方的にやられてしまうのだったらゝゝゝいつその事、近づいてしまえばいいと考えたのだ。

幸い、浮世は喧嘩のできる男である。これほどの遠距離攻撃を張ってくるのであれば、八咫鳥は近距離戦が恐らく苦手だろうと高を括った。

持ち前の運動神経と動体視力等を活かし、浮世は八咫鳥の弾幕をかくぐつて、ようやく殴れる距離にまで達した。

ここぞという所で、浮世は渾身の右ストレートをブンと放った。

「うらあああ！！」

しかし、その右ストレートは見事に空を切った。

「！？」

浮世は、ただ避けられただけではない驚きをしていた。

それもそうである。パンチの放った先にいたはずの八咫鳥は、まる

で消えたかのように姿を消していたのだ。

浮世が姿を消した八咫鳥に気づいた時には、その体を八咫鳥の弾幕に撃たれていたのだ。

「ぐああ!!」

当たった威力以上に、浮世は撃たれた事に衝撃を受けた。

ごろごろと転がった後で、浮世は撃ってきたと思える所をどうにか見た。

そう、八咫鳥は浮世のちょうど真後ろにいたと思える所から、浮世を撃っていたのだ。

なぜだ・・・いつの間に後ろにいたんだ・・・

浮世の疑念を見透かしたように、八咫鳥はくくくと笑いながら口を開いてきた。

「おやおや、なぜこうなったのがまるでわからない・・・という顔をしていますねえ。」

「お前・・・何をしたんだ？」

「何もしていませんよ、私めと戦った者は、皆そう口走るんですよ。私めは、何も小細工をしていないと言っのに・・・」

八咫鳥は、文字通り困った様子を見せてきた。笑顔はまったく崩さないままで。

浮世にはそれがまるで、ふざけているとしか思えない様子にしか見えなかった

どうしようもない憤りを抱えたまま、浮世は不屈の闘志で立ち上が

り、八咫鳥に対して戦闘の意思を見せた。

「そうか・・・だが、お前が何をしようが、俺は簡単に負けない！」

浮世は決意を固め、八咫鳥に決死の特攻をかけた。

その時に、浮世はさっき起きた不可解な事の原因を、ようやく理解したのだ。

なんて事はない。八咫鳥はただ・・・圧倒的なスピードで飛び回っていただけなのだ。

そのスピードの速さを、浮世はどうして理解出来たのか、それはとても単純な事である。

なぜなら、八咫鳥は浮世の目の前で飛び去り、浮世の後ろから回り蹴りを放っていたのだから。

「ぐう!!」

浮世は反応する間もなく、ドガアという鈍い音とともに、八咫鳥の回し蹴りを受けた。

浮世はどうか持ち直し、意地から八咫鳥に自分の蹴りを放った。当然それは当たる訳がなく空を切り、八咫鳥は一瞬の内に距離を取っていた。

浮世はその時、ようやくある事を理解したのだ。自分と相手にある・・・圧倒的な実力差を。

今更それがわかった所で、浮世にはどうする事も出来なかった。

浮世が絶望の淵に立たされそうになった時、八咫鳥の不気味な笑顔が・・・より一層、不気味になっていった。

「そうですね・・・このままずると長引かせても仕方ありませんね。そろそろ本気で参りましょうか。」

そう告げた時、八咫鳥は完全に・・・浮世の視界から消えてしまった。

視界から消えても・・・八咫鳥はその場にいる。

浮世の周りに飛び散る羽と、大きな風、ガガガガという音に伴って、ぼろぼろになっていく浮世の体が、それを説明していたのだ。目にも止まらない、圧倒的な速度から繰り出される八咫鳥の高速の連撃が、浮世の体をぼろぼろにしていたのだ。

その最中に、八咫鳥のあの嫌な笑い声が浮世の耳に響いてきた。

「くくくく・・・それがあなたの限界ですか？違うでしょう？さあ、私めを楽しませてください！！くく、くはははははは！！」

嫌な笑い声は、聞くに堪えない高笑いへと変わって、さらに浮世を追い込んでいった。

薄れてゆく浮世の意識、そんな中、浮世は・・・この戦いに活路を見出す可能性のある、曖昧だがかすかな可能性を思い出していた。

私を助けた時の力を、きつと温存してるに違いないわ。

そうだ・・・俺には・・・戦う為の能力があるかもしれないんだ・・・だが・・・使い方も何もわからない・・・

浮世は困り果てた。意識が朦朧とする中で、すぐれるかもわからないい藁を見つけた浮世は、とにかく今の有様を解決する術を考えた。

飛び回り、捉える事も困難な敵を相手にしたのなら・・・捕まえてしまえばいいんだ。

それが出来れば苦労はしない。しかし、今の浮世は、細かい事を頭の中で整理する事も叶わなかったのだ。

視界に捉えられない物を、浮世は必死に掴もうとした・・・ただ必死に。

その姿が哀れに見えたのか、八咫鳥は飛ぶスピードを更に速めてきた。

「やれやれ・・・どうやら、もう面白そうな事は期待できそうになりですね。これで終わりにします。」

八咫鳥渾身の攻撃が、今まさに浮世に襲いかかろうとした。

「鳥符・・・ネイルランス!!」

手の爪を鋭利にし、それがまるで一本の槍のようになり・・・浮世を貫かんと放たれた。

絶体絶命かと思われた浮世。

「浮世!!」

ダイダラボッチの声が届く前に、浮世はその槍に・・・貫かれた・・・かと思われた。

「・・・？」

八咫鳥は自分の槍に対して、えもいわれぬ違和感があった。目の前の獲物を突いたはずの槍は・・・何かに刺さった感触もなく・

・・かたかたと止まっていたのだ。  
その真相は・・・浮世がその槍を、刺さる寸前に手で掴んでいたのだ。

浮世はただ、八咫鳥を見据えていた。その目はまさに・・・浮世の目とは違う物であった。

目だけではない、浮世の体からは、うつすらと黒い何かがにじみ出ていたのだ。

その直後に八咫鳥を襲ったのは・・・まぎれもなく、異質な何かであった。

感じ取れた根源は、目の前にいる浮世その者であった。そう、まるで浮世の中にずっと潜んでいた何かが、今まさに現れたとも言える物だった。

そしてそれを感じ取れた時、八咫鳥は今までで最高の笑みをこぼしていた。

「くくくくくく!! ようやく目覚めたようですねえ浮世さん、ご自身の能力に!!」

八咫鳥の問答に対して、浮世は無言のまま、空いている手を八咫鳥に・・・掌底とも言えない形で、文字通りぶつけた。

ガツンという音と共に、八咫鳥はごろごろと地面を転がっていき、森の木の本一本に体がガンとぶつかって止まった。

八咫鳥を吹き飛ばした後で、浮世を覆っていた何かは解け、浮世はそのまま気を失ってしまった。

## 第九話 能力覚醒（後書き）

後書き

ふいゝ、とにかくにも、第九話終了です（>|<）／

多分見ていた人のほとんどが予想を裏切られたと思います。浮世つてここまで戦えないんだって事に。

まあ仕方ありませんよね。東方つて世界をあんまり知らない人間が、いきなり戦える訳ありませんもんね。てか知つても普通無理だろうし。

とりあえず、八咫鳥は結構強い奴だつて事も察してくれたと思います。まあいいじゃないですか（^|^-）

この話にしては、初めてのバトルなんですよねこれでも。初めてでこれねえ・・・初々しくていいと思ってます（^|^-）

少なかったギャグもちよつと使つてみると、澄田的には好きな話ですこれ（^|^-）

そしてやはり出ました・・・厨2!!|（>D<）／もう澄田のお約束です!!|（>D<）／

まあ、今回は楽しくやりたかつたつて感じですので、次回はもうちょい普通な感じにしましょうかね。

では、記念すべき程でもない第十話をお楽しみに（#^|^-#）

## 第十話 浮世の能力（前書き）

ありのままあらずじ

弾幕戦闘なんて知らない浮世は、八咫烏相手に一方的にばこられるかと思っただが、土壇場で能力が覚醒し、どうにかなったっぽいけど気絶してしまった。

ではどぞ。

## 第十話 浮世の能力

### 第十話 浮世の能力

気を失い、ドサツと前のめりに倒れた浮世。

その様子を心配してか、さっきまで傍観者であったダイダラボッチとぬうとかあの三人が浮世に駆け寄った。

「浮世！！」

「浮世兄さん！！」

三人が三人とも、浮世のそばで呼びかけるような様子を見せたが、浮世は気を失い、何の反応も見せなかった。

不安になったダイダラボッチが、浮世を抱きかかえて、意識を失ったままの浮世にさらに呼びかけた。

「浮世！！起きてよ浮世！！起きてっば！！！！」

いくら呼びかけても起きない浮世に、ダイダラボッチはしびれをきらし、声ではなく実力行使に出た。

「起・き・てええええええええええ！！！！！！！！！！」

ダイダラボッチは絶叫しながら、浮世の頬をベシベシベシとひたすらに往復ビンタした。

こんな事をされては、いくら気絶していても起きるのが当然である。

「いたたたたたたたた！！！！！！！」

痛みから出る声を上げ、浮世はやっと目覚めた。  
が、聞こえていなかったのか、ダイダラボッチはなおベシベシベシ  
ベシとビンタを続けてきた。

「ちょ、止めてボッチ！お願い止めて！！」

浮世の悲痛な叫び声はさすがに聞こえたようである。ダイダラボッ  
チはピタッとビンタを止めた。

その後で、ビンタですっかり頬の赤くなった浮世に、ダイダラボッ  
チが涙目になって見てきた。

「浮世・・・浮世お！！」

さっきまで、ずっと辛い気持ちを押さえ込んでいたのであろう。ダ  
イダラボッチは目が覚めたばかりの浮世に抱きついてきたのだ。

「ちょ、ボッチ！？」

突然の事に、浮世は戸惑ったものの、戸惑いはダイダラボッチの悲  
しそうな声を聞き、すぐになくなった。

「ずっと・・・心配して見てたんだよ・・・浮世がいつまでたつて  
も・・・力を使わないから・・・私、何度も飛び出しそうになつた  
んだよ・・・ぬうちちゃんとかあ君がいなかったら・・・私・・・」

ダイダラボッチの心からの声。そして涙。

浮世を本気で心配していたから、浮世の事を思っていたからこそ、  
見守り続けていた証。

浮世はダイダラボッチの思いと鼓動を感じ取り、そつと、ダイダラボッチの頭をなでるように手を置いた。

「・・・ごめん。次からは、無理しないようにするよ。」

建前でも、演技でもない、浮世の心からの言葉。

浮世の思いがダイダラボッチに伝わり、ダイダラボッチは涙を止め、いつもの笑顔を取り戻していた。

「うん・・・」

とてもいい感じの雰囲気、八咫鳥の不気味な笑いが水を差すようにしてきた。

「くくくく、大した物ですねえ、浮世さん。さすがと言わざるをえません。」

笑みを浮かべたまま、浮世の方にカツ、カツ、と歩いてきた。ダイダラボッチがとつさに浮世を守るような態勢を取ったが、八咫鳥は「ご心配なく」と言う様子を見せてきた。

「これ以上、私めは浮世さんと戦う気はありませんよ。私めの導きに、浮世さんは応えてくれたのですから。」

そう、この戦いの当初の目的は、浮世の能力の覚醒にあった。だが、先ほどの様子だけでは、能力が何なのかまったくわからない。詳細が気になった浮世が、浮世を守ろうと前に立っているダイダラボッチを制して、八咫鳥に尋ねた。

「すまないが、俺の能力って・・・一体何なんだ？実は俺・・・能

力を使った時の記憶があんまりないんだ……」

不安そうな顔を浮かべている所を見ると、どうやらさっき豹変していた時の記憶が本当でないようである。

そんな浮世に、八咫烏が饒舌に話してきた。

「くくく、覚醒をした以上は、もう能力の詳細を言っても構わないでしょうね。では言いましょう、浮世さんの能力を。」

もったいつけた様子を見せつけ、八咫烏がはっきりと、こう言ったのだ。

「浮世さんの能力……それは、封を解く程度の能力です。」

封を解く……程度の能力？

浮世は八咫烏の宣告に対し、ひたすらに疑問を浮かべた。その疑問は、思わず自分の口から出てきてしまった。

「封を解くって……どういう意味だよ？」

まったく意味を理解できない浮世が、言わずにはいらなかった――

言。

仕方のない事ではある。空を飛ぶとかそういうのならわかりやすい物だが、これではさすがに意味がわからないだろう。

八咫鳥は、待つてましたと言わんばかりに、説明を始めた。

「浮世さん、あなたの能力を簡単に言うのであれば・・・鍵のかかった物を外したり、もしくは壊してでも開ける・・・という物です。」

八咫鳥の説明に、浮世はダイダラボッチと初めて会った時の・・・あの不可解な出来事を思い返した。

そうだ、あの時ダイダラボッチの枷を外したのは・・・それだったのか？

もしそうであるのなら、あの時の出来事はやはり、能力によって起きた現象であったのだ。

しかし、ふと浮世が思った事は・・・この能力と、さっき自分が見せたはずの姿と・・・どう結びついてるというのであるのか？

浮世自身がよくわかっていない事を、他者に聞いても仕方ないかもしれないが、やはり聞かずにはいられなかった。

「八咫鳥、さっき俺が見せた姿なんだが・・・あれは、俺の能力と関係しているのか？」

その質問に、八咫鳥はあくまで笑って答えてきた。

「ええ、大いに関係していますよ。あなたの能力は・・・そう単純ではありませんから。」

「単純ではない？」

「はい。能力には拡大解釈という言葉があります。あなたの封を解く程度の能力も、単純に扉や鍵を開けるだけではなく、封印や抑えられている力なども解き放たれるのですよ。」

「つまりさっきのは・・・俺の中で抑えられていた力・・・だってのか？」

「それ以外の答えは、私めでも出せませんね。恐らくそうでしょう。」

あれが・・・俺の中で抑えられていた・・・ってのか？ちよつと待てよ・・・あんな力が・・・俺の中で・・・あんな力？いや待て、俺は、あの時の記憶がない・・・はずだ・・・じゃあ、なんであんな力なんて言えるんだ？

浮世は頭の中で、ぐるぐると考えを巡らし、自問自答を繰り返していた。

浮世の体に起きた、身に覚えのないはずの事に、浮世は訳がわからず困惑してしまった。

どういう事だよ・・・俺は身に覚えがないはずだ・・・ないはずなんだ・・・

自分で自分を信じられなくなる浮世。

頭をかかえ、自問自答で自身がつぶれそうになった時、ダイダラボツチやぬつやかあが浮世の前に立ち、浮世の心を支えようとした。

「大丈夫だよ。浮世は浮世だよ。」

「そうだ、浮世兄さんは浮世兄さんだ。」

「・・・」

三人の励ましの思いを感じ取り、浮世は自身の心をしっかりと支えた。

「ああ・・・そうだな。俺は俺だ。変に悩む事もないな。ありがとう。」

いつもの調子に戻った浮世が、精一杯の感謝を三人に言った。

「どういたしまして。」

ダイダラボッチが三人を代表するように返した。

「そうだ、八咫鳥にお礼を・・・」

と思い立って八咫鳥がいた方を見たが、そこに八咫鳥の姿はなく、いたと思える証拠の散らばった羽しかなかった。

それを確認した後に、周りの木がざわめきながら、どこからともなく八咫鳥の声がしてきた。

「私めが出来る事はここまでです。後は、あなた次第ですよ、うきよさん。機会があれば、また会いましょう。では、よい旅を。」

そう言い残し、木のざわめきが消え、八咫鳥は恐らく、その場を本当に去って行った。

「ああ。ありがとうな。」

率直な感謝の言葉を、去り行く八咫鳥に言い放つ浮世であつた。

浮世達のいる所から遠くで、八咫鳥は一人、胸を抱えながら、倒れ  
そうな体を木に寄りかかつてどうにか支えていた。

「いやあ・・・まさか、あんな物を隠していたとは・・・私めでは  
予想できませんでしたよ・・・」

息を切らしてそうつぶやいていると、八咫鳥に対して、どこからと  
もなく呼びかける声がしてきた。

「どうだった？あの子の力は？」

その声色はそう・・・人里で浮世達と話をした、くだんその物だっ  
た。

「これはこれは・・・私めの心配にでも？」

「それも兼ねてかねえ。お前さんにこの事を言おうと思ったんだが、  
早とちつてお前さんが先に浮世の方に行つちまったから、言えなかつ  
たじゃないか。」

「すみませんねえ・・・面白そうな事になると・・・周りが見えな

くなるんですよ．．．私めは．．．」

「そうかい。それで、胸の奴は大丈夫なのかい？」

「どうですかねえ．．．痛み以上に．．．この違和感と．．．しっかりと残った跡の方が気になりますよ．．．」

胸を抱えてながら、服をめくり上げて、その箇所を見せてきた。そこに出来ていたのは、べったりと真っ黒に染み付いた．．．大きな手形であった。

心なしか、染み付いた所から、禍々しい物がにじみ出していた。

「こりゃあ、また随分はつきりと刻まれたねえ．．．多分二、三日は消えないよ。」

「そうですか．．．では、その間まで．．．私めは姿を隠しておきましょうか．．．これでは格好の獲物ですからね．．．」

「そうかい、まあ、養生しなよ。」

「はい．．．」

生気のない状態でも、八咫鳥はなお笑みを浮かべていた。

「．．．くくくく、やはり幻想郷は面白い．．．面白い事に満ち溢れている．．．浮世さん．．．今度会う時は．．．もっと面白くなったあなたを見せてくださいね．．．」

そう言い残し、八咫鳥はずるずると体を動かし、どこへなりと歩いていった。

## 第十話 浮世の能力（後書き）

後書き

厨2最高!!\(>D<)/厨2最強!!\(>D<)/

自重しない厨2ラッシュに、みなさんどこまで付き合えますか？

ゆっくつりつしつてつてつとおりので・ん・か・iiiiiiii  
い!!!!!!\(>D<)/

頭の中でMAD再生してしまいました。すみませなんだm(\_\_\_\_\_)m

ゆっくり進んでいるのはまああきらめてくださいな(^\_|^)

まったく・・・いつまでたつても駄文だなあ・・・(´D、`)

とりあえず、零岬さんのお陰で三話は引っ張れましたな。零岬さん  
サンクスですたい!!\(>\_|<)/

零岬さんから不満の声もありませんので、多分八咫鳥のキャラはこ  
れでいいんですよ？

よし、次回はどうかメドは立っているのですがあ・・・妖怪のネ  
タねえええええええ!!!!!!!!!!!!

師匠の奴はかなり後半になりそうだし、とにかく目の前のネタが  
なああああああい!!!!!!!!!!!!

と言う事で、現在進行形で絶賛募集中ですたい！！（>|<）ノマ  
ジお願いしますだm（——）m

これからどうなるかは、もちろん次回をつて事で。

では、第十一話をお楽しみに（#^|^#）

## 第十一話 妖怪の戦い（前書き）

ありのままあらずじ

八咫鳥から能力を告げられた浮世は、一瞬自分が怖くなったが、周りが支えてくれて事なきを得た。八咫鳥の胸には、不気味な手形刻まれた。

ではどぞ。

## 第十一話 妖怪の戦い

### 第十一話 妖怪の戦い

視点変わって、先ほどの場所にて浮世達は、ちょっとした話し合いをしていた。

「とりあえず、俺は弾幕ごっこってのを覚えておいた方が良い訳か。」

「そうだね。このままだったら、その内危なくなるもんね。」

「で・・・弾幕ごっこって、どうやるんだよ？説明なしじゃ、ちょっと無理だ。」

浮世の当然すぎる疑問に、ダイダラボッチはうーんと言う様子を見せてきた。

「どうやる、かぁ・・・私とかは、気がついたら覚えてたって所があるからさぁ・・・どう説明しようかな・・・そうだ!!」

何か閃いた様子のダイダラボッチ。手をポンと叩いた後に、ぬうとかあの二人を見た。

「ぬうちゃんにかあくん、今から私と弾幕ごっこをしてくれない？」

「む？ボッチ姉さんとするのか？」

「そうよ。軽くでいいわよ。浮世に説明できれば程度でいいんだし。」

「そうか。むうはどうだ？」

黙ったままだが、いいよと言った様子でうなずいた。

「それじゃ、久々に張り切って行こうかな。久々だしね。」

「かあも、ちよつと頑張ろう。」

そう言った後で、三人はそれとなく戦いの態勢を取った。構図的には2対1と言う構図である。

なるほど、口で説明するんじゃないくて、見て説明するって言いたい訳か。

浮世がその様子を見ながら、心の中で納得した。

その戦いから、浮世は色々と知れそうだなと楽しみにしていた。

そう言えば……ボッチやこの子達って……どんな戦いをするんだろうなあ……

と思っている内に、どうやら戦いが始まったようである。

「それじゃ、私から軽く行くよ。」

楽しそうに腕をぐるんぐるんと回し、どこかを叩きそうな様子を見せてきた。

軽くか・・・あの腕から、八咫鳥が放ったような小さい弾幕でも撃つのか？

そう予想していた浮世。しかし、ダイダラボッチが放った弾幕は、そんな予想を完全に超えていた。

「それじゃ、まずは一発、えい！！」

ぐるんぐると回していた腕をブオンと振りかぶり、ぬうとかあに對して放たれた弾幕は・・・明らかにかあよりも大きく、拳の形をしており、ゴオオオという轟音を立て、地面をガガガとえぐりながら飛んでいった。

「ちよ、ええええええ！！！！？」

浮世が驚く間もなく、弾幕は前に立っているかあにドゴオンと当たった。

が、弾幕はかあに對してそれほどダメージはなかった様子。当たった途端に霧散してしまった。

「それぐらいでは、かあには効かないのだ。では、今度はこっちの番だ。」

その掛け声と共に、後ろにいたぬうが手の平を合わせてその間に何かを作っている様子を見せた後に、手の平同士をパンと叩いた。

その瞬間、地面からゴゴゴと文字通り二つの壁が現れ、ズズと地面を這いながらダイダラボッチに向かっていき、二つの壁が挟みこんだ。

ぐしゃあという痛々しい音を鳴らし、ダイダラボッチを文字通り潰した。

「・・・」

浮世が口をばくばくとさせて驚愕している内に、ダイダラボッチを潰した壁にべきべきとひびが入り、少しもせずにバカアンと壊された。

そこから、両手を上に広げているダイダラボッチが姿を見せてきた。

「びつくりした。こんな技も覚えたんだね。油断しちゃったよ。」

全身土だらけの様子で、二人に感心した。

「でも、戦いはもつと派手にやらなくちゃ!!」

腕を振りかぶり、地面を思いっきりガンと叩いた。

その瞬間、叩いた所から地面をゴゴゴゴと伝って、かあのぬうの二人をさっきの弾幕より一回りも大きな手が二人を掴もうとせんとばかりにグワアと襲い掛かった。

「むうん!!」

その手が二人を潰そうとした時、かあが掛け声と共に自身の体を同じぐらいに大きくさせて、その手をぬうから守るように防いだ。

巨大な手はかあという壁に阻まれ、ゴシヤアと壊れ、ぼろぼろと地面に落ち、還っていった

その後で、ぬうが何かを操るような仕草を見せた後に、地面から壁をどんどん出し、今度はブオンと空を飛んでダイダラボッチに襲い掛かっていった。

「おつと。」

ダイドラボッチがそれをかわし続けるものの、数と大きさに圧倒され、一枚の壁にバンと当たってしまった。

「いたた。」

その一枚を起点に、壁が一齐にダイドラボッチを襲い、ダイドラボッチは壁に押されながら後ろの木にまで飛ばされ、壁と一緒にドガガガガとぶつかった。

壁に埋もれた状態のダイドラボッチ。さすがに終わったんじゃないかと思われたが、その壁をドガアと蹴散らし、ダイドラボッチは姿を見せた。

「もう、軽くていいって言ったじゃない。こうなったら、私も本気でいくよ!!」

その掛け声と共に、最初に放った弾幕を、文字通りボボボボボと連発して放っていった。

その弾幕を、ぬうが作った壁がガガインと阻んでいった。

気がつけば、三人は入り乱れたように飛び交って戦いを繰り広げていたのだ。

戦いの中であると言うのに、ダイドラボッチはあくまで楽しそうな様子である。いや、ぬうやかあも楽しそうにしていた。

さっきから、呆れた様子で見ていた浮世も、その様子を見せられた時、ダイドラボッチが真に伝えたかった事がわかったのだ。

そうだ、弾幕ごっこはただの戦いじゃない。わかりあい、楽しむ為にもあるんだ。

それを理解した時、二人の戦いは浮世の目には、戦いではなく、遊

んでいる姿に映ってきていた。

俺も・・・こうして、あいつらと遊べれるかな・・・

そんな事にふける。

が、三人の力が凄まじいせいか、辺りの地形がどんどん変わる勢いで、遊びは過激化していった。

「どうだボツチ姉さん！！これがぬうとかあのこんびねーしょんだ  
！！」

「やるわね！！でも、私だって負けられないんだから！！」  
土と土煙と轟音が混じりあり、もう何がなんだか訳がわからない状況になってしまった。

これには浮世もほって置く訳にはいかないと判断した。

「おいおいおい！！いい加減にしろお前ら！！」

その声が聞こえたのか、三人は遊びをピタつと止めた。  
しかし、止めるタイミングがかなり遅かった模様。辺りの地形は既に痛々しい事になっていた。

「あのな、俺に説明するだけだったら、何もここまでやらなくてもいいだろ！？」

浮世の怒鳴り声に、三人がビクツとなって萎縮した。

「う、ごめんなさい・・・」

「楽しかったので、つい・・・」

三人ともが、申し訳なさそうな態度を取った。起こられている子供その物であった。

まあ、楽しくてやりすぎたのは事実である以上、浮世もそれ以上は怒らなかつた。

それに、浮世に取って叱り付ける以上に、もっと大事な事があるのも事実である。

そう、浮世はどうやって戦う術を身に着けるか、だ。

三人はこの世界の住民である為、歩いたり、息を吸ったりすると同感覚で弾幕を放ったりしていたのであろうが、浮世はそうはいかない。

この世界の戦い方を覚えようとするのであれば、浮世は業に入るしかないのだ。

浮世はそれらをまとめて、尋ねた。

「で、俺はどうやって戦えばいいんだ？」

## 第十一話 妖怪の戦い（後書き）

後書き

おいしいい！！！？途中放棄臭がプンプンするんだけどおおお！！！？

すみませなんだm（――）m昨日投稿したばかりで、ちょっとモチベが微妙なのだ。そして他の連載も気合入れなきゃ駄目なのだ。

だもんで、今回はここまでにさせてもらうだ。本当に・・・すまないと思う！！（＞A（

一番のぶつちやけは、時間ないんですう・・・本当ごめんなさいm（――）m

駄文のまままったく成長してませんけど、ちよつとは頑張ってますだ（＞―＜）／

ですので、これからも付き合ってくださいませ（＾―＾）

えーつと、しつこいでしょうけど、妖怪今だ募集中です。このままだとやっべえ・・・ネタが・・・（´A、（

具体的な希望は、今の浮世の練習相手・・・みたいな？でも浮世より普通に強いレベルで。

この更新も、次は遅くなるかもしれないので、皆さんそれは承諾しちゃってくださいな（＾―＾）

では、第十二話をお楽しみに（＾|＾）

## 第十二話 お喋りな狐（前書き）

ありのままあらずじ

能力がわかったのはいいが、弾幕ごつことは何かまだわかっていなかったなので、ダイダラボツチとぬうとかあの三人が戦い、それとなくわかったが地形がえらい事に。そして浮世は、どう戦えばいいか尋ねた。

ではどぞ。

## 第十二話 お喋りな狐

弾幕ごつこの何たるかはそれとなく理解した浮世。

しかし、弾幕の出し方などは一切のごとく理解できてはいなかった。そういう意味で、浮世はこう言ったのだらう。

ダイダラボッチもそれを察した様子であり、さきほどの八咫鳥との戦い等を考慮し、ダイダラボッチがそれなりの回答を出してきた。

「そうだね、浮世の場合だったら、ぬうちゃんとかあ君みたいにどつしり構えたり、私みたいにガンガン弾幕を飛ばすよりも、八咫鳥みたいに弾幕と格闘を意識した感じで戦った方がいいと思うよ。」

結構的を射た発言ではあったが、割と肝心な所が抜けていたので、浮世がそこを問うた。

「なるほどな。で・・・弾幕ってどうやって出すんだ？」

「出し方？そーだね・・・イメージ!!」

「い、イメージ？」

「そう、イメージだよ。」

イメージって・・・弾幕ってそんなに曖昧な物なのか・・・

疑い、戸惑う浮世だが、ダイダラボッチの近くで、うんうんとうなずいているぬうとかあの様子を見ると、どうやら本当にそうらしい。

「イメージか・・・それはいいけど、最初は何をイメージするべきなんだ？」

「そうだね、自分の能力とか、身近な物とかだね。」

身近・・・能力・・・そうだ、これならどうだろうか。

浮世の脳裏に真っ先に浮かんだ物、それは、鍵であった。

封を解く、それは、鍵がなければ出来ない事。浮世の頭の中では、そういう構図が浮かんでいたのだ。

それに、浮世にとって鍵は結構身近であったのだ。なぜなら現実世界の浮世は仕事の一環で鍵をよく扱っていたからだ。

色々と考えをまとめ、これはいいなと判断した浮世。そして、次のステップを踏もうと判断した。

「よし、イメージする物は決まった。で、イメージした物はどんな感じで出せばいいんだ？」

「えーっと、まずはこうして・・・自分の手の平の上にあるな、って感じでやればいいと思うよ。」

ダイダラボッチが自分の手を浮世に見せ、その上に弾幕になりそうな物を生成してきた。

「なるほどな。ちょっとやってみるか。」

思い立った浮世は、早速自分の手を自分の目の前に持ってきた後、それとなくイメージを始めた。

「出る・・・出る・・・出るお・・・」

余った手でその手の付け根を持ち、必要かどうか分からないが精一杯の力を込める。齒軋りが鳴り、すごい気迫と集中力を見せていたが、ダイダラボッチはこの様子がまずいと判断し、諭した様子で助言した。

「あの・・・力みすぎだよ浮世・・・もう少しリラックスしなよ・・・それじゃイメージできても、戦いじゃ使えないよ・・・」

まあ当然の理屈だが、浮世の耳には届いていない様子。持ち前の集中力が完全にあだになっていた。

その集中力が功を制したか、浮世の手の上で、いびつだがそれらしい物がぐぐぐと出来そうな様子を見せていた。

「いける・・・あと少しでえ・・・」

力み、イメージし続ける浮世。それらしい物はだんだんとその形を作っていた・・・はずだった。

そう、そのイメージしていた物が更にいびつになり、形を崩した後・・・浮世の手元でポンと爆発を起こした。

爆発の衝撃で浮世の顔は真っ黒になり、黒い煙がぶすぶすと立ち昇っていた。

「・・・なんでだよ・・・あとちょっと・・・だったのに・・・」

言葉を失っていき、態勢も崩れて、浮世はドサツとその場に倒れてしまった。

その様子から、ダイダラボッチはある事を覚った。

「浮世、多分だけど八咫鳥との戦いの疲れとかが残ってるんじゃない

いかな？今日はもう休んだ方がいいよ。疲れてたら弾幕って出しにくいし、それに弾幕を出す事自体が疲れるからね。」

「それは・・・先に言うべき・・・だったろ？」

「あ、そうだったね。ごめん。」

てへという様子を見せるダイドラボッチに、浮世はもうそれ以上言うのを止めて、とりあえず体を伸ばして空を仰いだ。

雲が適当に散らばる青い空。雲は風に流されて、どこへなりと飛んでいく。

その姿を、何となく自分と重なっているかな・・・と浮世はぼんやり思っていた。

実際はそう思えるかと言われると微妙な所だが、まあ浮世がそう認識しているのなら、そうなのかもしれない。

流れる雲を眺め続けていると・・・その雲に混じるように、何かが飛んでいる姿が目映った。

「ん？」

疑問に思った浮世だが、一瞬で飛び去って行ったそれは、何だったのか認識するのはとてもじゃないが浮世には無理だった。

だ、その飛び去った者が何だったのか、答えはすぐに出てきた。なぜなら、それがわざわざこっちに来たのだから。

「お？ここに人間がいるとは珍しい。それも、妖怪と一緒にいる人間とは・・・」

声のした方に全員が振り向くと、そこには、森の木陰から姿を見せってきた者がいた。

赤い服に赤いスカート、赤茶の髪をなびかせて、浮世達の方にひょうひょうと歩いてきた。

木陰から姿を現した時、その者の頭と後ろに・・・狐の物と思われる尻尾と耳がついていた。それも尻尾は九本ほどあり、どれも先端にうつすらと火がともっていた。

いきなりの登場に戸惑う一同。それを尻目に、その者が口を開いてきた。

「ほお、この山では見慣れない妖怪じゃのう。多分違う所から来たんかのう？しかし、この山に人間がよく来れたものじゃのう。恐らくは一緒にいる妖怪の手助けでこれたんじゃろがのう。あ、わっちが誰か知らんじゃろ？わっちの名前は尾裂狐<sup>おなげ</sup>。寄尾<sup>よりひ</sup> 尾裂狐<sup>おなげ</sup>という者じゃ。それでも狐の妖怪じゃよ。さっき空をぴよんと飛んどうた時にお主らが目についてのが、気になって来てみたんじゃ。それにしても、その人間の格好は随分とハイカラじゃのう。今時の若い人間の考えというのは本当わからん。わっちは昔からおるが、人間というのは理解するのが今だに難しい・・・」

あまりにも饒舌かつ長い台詞に、起き上がった浮世が止めにかかった。

「ストップストップ！！喋るのを一旦中断してくれ！！」

その声を聞いた尾裂狐は、申し訳なさそうな様子で話す事を止めた。

「喋るのはいいが、あまりにも一方的すぎるだろ？初めて会ったのなら、俺達にも名前ぐらいは名乗らせてくれないか？」

「すまんすまん。わっちは一度喋ると中々止まらんのだじゃ。まあ喋るのが好きだから仕方ないとわっちは思っておるんじやがのう。人

生は楽しい方がいいに決まっておるからのう。そうすれば心は老いる事もなく生涯を・・・」

「だーから！！喋るのは一旦ストップ！！」

二回目の浮世は言葉ではなく、態度で示した。

一段落してして、ようやく浮世達の自己紹介が始まった。

「俺の名前は、人橋 浮世だ。」

「私の名前は、ダイダラボッチ。この子がかあ君で、この子はぬうちゃん。よろしくね。」

「かあだ。よろしく。」

ぬうは言葉ではなく、ぺこりと頭を下げて示した。

一通りの紹介が終わり、浮世が代表して、尾裂狐に話し始めた。

「で、あなたは特に目的はなく、俺達の所に来た・・・訳だよな？」

「そうじゃ。何か面白そうな事でもしとるんかと思っただんじゃが・・・どうやらそれが済んだ後みたいじゃのう。」

周囲の荒れ果てた所を眺めた後で、尾裂狐は察した。

「面目ないね。」

「うむ。」

ダイダラボッチとかあが申し訳なさそうな様子で相槌を打っていた。

「まあよいか。んで、お主らはこれからどうするんじゃない？行く当てはあるんか？」

尾裂狐の疑問に対して、浮世が自分の今の現状から考えて、答えを返した。

「そうだな・・・一応妖怪の山には来たんだが・・・よく考えたら泊まる所とか決めてなかったな。」

「野宿じゃ嫌なの？浮世。」

「いやいや！！こんな所で野宿したら、俺がどうなるかわからんだろ！？」

もつともな意見に、ダイダラボッチは黙り込んだ。

浮世の言い分に、尾裂狐は何か閃いた様子を見せてきた。

「泊まる所がないとな？それじゃったら、この近くに確か誰も住んどらん家があつたはずじゃ。そこに泊まったらどうじゃ？」

「何？それは本当なのか？それだつたらありがたいんだが・・・」

尾裂狐の提案は浮世にとってありがたいが、後ろの三人はどう思っているのか。

浮世が少し心配していたが、三人とも賛成の意思を示していた。

「いいんじゃないの？誰もいないんだっただらさ。」

「ぬうもそれでいいらしいから、かあもいい。」

「そうか。じゃあ、これからそこに向かうとするか。尾裂狐、道案内を頼む。」

「うむ。それじゃ、わっちについてこい。すぐ近くじゃからのう。」

尾裂狐の道案内の元、四人は妖怪の山の深くへと入っていった。その時の彼らは知らなかった。住んでいないはずの家に・・・誰かが住んでいる事を。

第十二話 お喋りな狐（後書き）

後書き

ふいふ、ルシファーさんのお陰で首の皮が繋がりましただ……（  
（ダ））

本当、わしって持ちネタないんですよ。・・他に使いすぎですね

一つの作品に全力注ぐとか出来ないの、まだまだ妖怪絶賛募集中ですだ（＞|＜）／

で、今回登場した尾裂狐って妖怪のプロフィール的な物を一つ。

寄尾 尾裂狐 (よりび おさき)

能力 速さを操る程度 of 能力

見た目 40代ぐらいの女性。九尾の狐だが「八雲 藍」とは違  
帽子をつけておらず、尻尾の先から火が出ている。赤をベースとし  
た花柄の服とスカートをきている。髪の毛は赤茶のショートロング。  
狐ひげにややつり目な顔であるが、常に笑顔なので気にならない。

## キャラ設定

狐の妖怪。式とは違って完全に独立しており、自由きままに幻想郷を動き回っている。

特定の場所に長居しないので、一度会っても次会う時はまず同じ場

所ではない。

とにかくしゃべる事が大好きで、1度話したすとまず止まらない。誰かが止めるまで止まらない。

明るくさっぱりした性格で、一緒にいて楽しい存在。

普段から動くのがかなり速いが、能力を使った時は、あの「射命丸文」の比ではない。

能力は成長の速度なども操ることができるが、人間の成長はできない。

半径一メートル以内ならその空間の速度も操れるが一日5分程度が限界。

昔あった事が原因で、むやみに能力を使うことを嫌っている。

イメージ二つ名 速見の妖狐

バトルイメージ

尻尾の狐火から放たれる弾幕と、高速度からの攻撃がメイン。

こんな感じです。戦わす予定・・・あるのかなあ・・・（´Д、`）

前回の八咫鳥とはまったく違うタイプのキャラですので、扱いもちやんと考えなければね。

そんでもって、次もまた妖怪採用するつもりですだ。

では、第13話をお楽しみに（#^ー^#）

### 第十三話 拒絶の鎌鼬（前書き）

ありのままあらずじ

ダイダラボッチから弾幕の出し方的な物を学ぼうとしたが、うまくいかずにイライラしている所に尾裂狐つてのが現れて、今日の寝床になるかもしれない所に案内してもらった事になった。

ではどぞ。

### 第十三話 拒絶の鎌鼬

尾裂狐曰くのすぐ近くは、浮世達にとつては結構な距離であつた模様。尾裂狐と最初に会つた時はまだ日も高かつたはずだったが、気がつけばもう夕焼け空が顔を見せていた。これには浮世も不満な様子である。

「・・・なあ、これでも近くなのか？」

浮世の不満に、尾裂狐もあまり機嫌がよさそうな返答はしなかつた。「わうちにとつては近いんじゃないよ。普段のわうちだったら半刻もかからん。しかし、それじゃと恐らくはお主らを置いてけぼりにしてしまうじやろ。だからこうしてゆっくりと歩いておるんじゃない。」

尾裂狐の主張に、ダイダラボッチが興味深そうな顔で迫つてきた。

「へえ、尾裂狐って普段はそんなに速いの？見てみたいな。」

「ほう？そんなに見たいとな？それじゃったら見せてやろうか？」

これみよがしな様子を見せた尾裂狐に、浮世が軽く止めに入った。

「いやいや！それよりまずは目的地につく事を第一にだな・・・」

と言つた瞬間であつた。さつきまで目の前にいたはずの尾裂狐が、皆の視界から消えてしまったのだ。そう、音もなく。

「・・・え？」

ほぼ全員がきよろきよろと消えた尾裂狐を探そうとしたが、尾裂狐の姿はどこにも見えない。

狐につつまれたかのような状況になった時、尾裂狐は浮世の後ろから、長く鋭い爪を浮世の首に当てていたのだ。

「どうじゃ？ わっちが見えてたか、お主ら？」

浮世がその声とその場にいた事に驚嘆し、尾裂狐からドタアと倒れながら距離を取った。

「い、いつの間にいたんだ！？」

浮世の怯えながらの声に、尾裂狐が軽快に、自慢げに応えた。

「今、そう言った瞬間じゃよ。」

応えた瞬間、尾裂狐が今度は浮世の顎に手を当てていた。

浮世は何が起こっているのか理解できず、その場から動く事も出来なかった。

その様子を見ていた尾裂狐は、浮世からそつと手を退けて、また先へと歩き出していた。

「そんじゃ、わっちの速さはわかったじゃろうから、先に行くとするぞ。お主らの足でももう四分分钟もせんから安心するといい。」

尾裂狐がそう告げた後で、四人は黙ったまま尾裂狐の後をついて行った。

尾裂狐の言った通り、10分も経たない内にそれらしい物が彼らの前に見えてきた。

見た所は田舎などでよくありそうな古い感じの家であり、確かに人がいそうな雰囲気は出していなかった。

「あれが・・・尾裂狐の言っていた家か？」

浮世が一応の確認を取ってきたので、尾裂狐もはつきりと応えた。

「そうじゃよ。今は誰も住んどらんはずじゃから、遠慮なく入ってもいいじゃろ。」

「それじゃ、お言葉に甘えて・・・」

ダイダラボッチが先に行こうとしたその時であった。その場にいた者を呼び止める声が・・・確かにした。

「・・・って。」

ほぼ全員がその声を聞き取れていなかったので、声のした方、つまり後ろの方に振り向いた。

そこにいたのは、恐らくはぬうと同じぐらいの背丈をし、裾のあまり合っていない和服を着た、少し散らばった短髪の少年であった。全員が振り向いた時、少年は瞳のない目を皆に向けて、言葉を続けた。

「あれ・・・僕が住んでる家なんだけど・・・」

表情をまったく変えず、家に指を指して小さな声で淡々と言ってきた少年に、浮世はえもいわれぬ悪寒に襲われた。

目の前にいる存在が、確実に人間ではない事が・・・浮世に伝わってきたのだ。

他の者はそんな事見た瞬間からわかっていたので、それほど動揺もしてなかった。

「ありや？ここは空き家だと思っとったんじゃが・・・既に住んでる者がおったのか。これは予定違いじゃのう。」

尾裂狐が頭をぼりぼりとかいて、困った仕草を見せていた。

その様子をちらつと見た浮世は、このままでは今日の寝床がない事を感じ取り、少年の説得を試みた。

「あのさ、今日だけでいいから、君の家に泊めてくれないか？そうじゃないと俺達、野宿する事になるんだよ。」

浮世のそれなりに必死な頼みに、少年はやはり顔色一つ変えずに返事をした。

「・・・別にいいけど・・・」

浮世が「よっしゃあ！」と喜んでいる脇で、ぬうとかあの二人がなぜか少年の方に歩み寄っていた。

会話を交えるぐらいの距離で、かあが少年に話しかけてきた。

「君の名前は、何だ？」

「僕？僕の名前は・・・結。鎌川 結。君は？」

「かあだ。それで、隣にいるのはぬうだ。後ろにいる人は浮世兄さんにボツチ姉さん、そして尾裂狐姉さんだ。」

それとなく、紹介するように言うかあ。

「・・・兄弟なの？」

「違う。みんなかあとぬうの友達なのだ。」

「友達・・・」

その一言を聞いた結は、さっきまで無表情であった顔は、少しではあるが悲しそうな顔になっていた。

その様子をおかしいと思ったかあは、心配そうに尋ねた

「む？どうしたのだ？かあが何か悪い事でも言ったか？」

「・・・さっき言った事、なしにする。悪いけど、僕の家には泊めない。」

その一言に、浮世があからさまに「ええ！？」と驚いていた。

そして、かあが当然その理由を尋ねた。

「なぜだ？さっきはよかったのに・・・かあが謝ればいいのか？」

「謝ってどうこの問題じゃないよ・・・僕の前から、消えて。すぐに。」

結の顔には、悲しみと確かな怒りが込められていた。まるで目の前

にいるかあが・・・よほど憎いかのような様子である。

こんな様子を見せられたかあは、起きた事を予期していたような事を口走った。

「・・・ぬうの言っていた通りだ。この子はやっぱり・・・」

かあがそう言っている内に、ぬうがかあを制して、結の正面に立った。

結の前に立ったぬうの顔は、子供とは思えないほどしっかりと顔で、結を見据えていた。

ぬうのその顔を見た結は、不機嫌そうな様子で尋ねてきた。

「・・・何？何か言いたい事でもあるの？」

結の問いに、ぬうは答えなかった。否、答えられなかった。ぬうは喋る事の出来ない妖怪であるのだから。

そんなぬうの意思を代弁するのがかあである。

「ぬうは・・・君が寂しがっていると・・・言いたいのだ。」

「寂しがってる？僕が？」

「そうではないのか？君のその思いは・・・かあにも伝わってくるのだ。」

結の怒りと悲しみの理由、それは、友がいるぬうとかあへの・・・純粋な嫉妬心であったのだ。

結はその嫉妬心から、浮世達を自分の家に泊める事を拒否したのだ。ぬうはそれにいち早く気づき、かあもそれとなく感じ取ったのだ。凶星をつかれた結。しかし、少年はあくまで素直にならなかった。

「……だから……何だって言うんだよ……君に……君たちに……僕の気持ちなんて……わかる訳ないよ……」

それまでで一番、深い悲しみを背負った一言に、ぬうはあくまで真っ直ぐに結を見ていた。決して目を背けてはいなかった。その強い目を前にして、結は変に怯えた。文字通り……ぬうを怖がっているようであった。

そんな結に対して、ぬうは黙ったまま、近づいた。ただ歩いて……近づいた。

それに合わせて、結はぬうから距離を取るように後ずさった。しかし、ぬうはいさん構わず進んでいく。

次第に、結がそれまで以上に怯えていった。

「来ないで……来ないでよ……来ないでよお!!」

目の前に手をかざし、ぬうを拒むように……結の手から、ヒュインと何かが飛んでいった。

それはぬうの体をかすめるようにスパパンと切り裂いていった。

「ぬう!!」

浮世が飛び出そうとしたが、ぬうは後ろに手をかざし、「大丈夫」とで言っているような仕草を見せていた。

かあもぬうの後ろで、飛び出すのを必死にこらえていた。そう、今は他の者が決して手を出してはいけない。もし手を出してしまえば、結はますますさびしさの中にうずもれてしまう。

ぬうはそれがわかったいたからこそ、手を出さないよう指示してきたのだ。

全員がただ見守る中、ぬうはゆっくりと……結に近づいていった。

「・・・なんで？なんで・・・逃げないの？なんで・・・」

ただ驚く結に、ぬうは黙ったまま・・・笑顔ですつと手を差し出した。さながら、握手でも求めているかのように。

結がその手を見た時、ぬうが言いたい事を・・・結自身が言ったのだ。

「・・・僕と・・・友達になってくれるの？」

その一言に、ぬうは満面の笑顔でうなずいた。

その後で、結はぬうが差し伸べた手を・・・ぎゅっと、握り返した。

「・・・ありがとう。」

今の結が言える。精一杯の一言であった。

### 第十三話 拒絶の鎌鼬（後書き）

後書き

ふう〜、出してくれた妖怪即出し状態です。澄田です（・|・）

これからの方針として、出してくれた妖怪はほぼ速攻で出していく事に決めましただ（>|<）ノ

その方が後腐れなさそうですからね（^|^）

ですので、次回はいよいよ師匠の出してくれた妖怪を出す・・・予定です（・|・）

しかし・・・結局今回出した妖怪はルシファーさんの出してくれた奴と大分変えましたなあ・・・名前もじえんじえん違う・・・

とりあえず、今回出てきた妖怪のプロフィールですたい。

鎌川 結 （かまかわ むすび）

能力 ものを切り裂く程度の能力

見た目 10歳ぐらいの子供で黒い和服を着ている。瞳のない目に散らばった感じの短髪。常に無表情である。

キャラ設定  
かまいたち  
鎌鼬の妖怪。

まだ子供で能力は弱いが、木を2、3本ならいっぺんに切り倒すこ

とができる。

無口でいるが内心はさびしがりやで、人見知りもする。  
自分と同じぐらいの子供と仲良くなりたいと思っているが、雰囲気  
と無口さと接し方が災いしてかうまくいかない様子。

そのためか、よく日向に一人で昼寝をしている。  
しゃべっても小さい声で話す。

イメージ二つ名 幼き刃

バトルイメージ 戦いはそこまで上手ではないが、能力等を含めた  
戦闘力は結構高い。

こんな感じです。一応ぬうと身長とか一緒だって事、忘れないでく  
ださいね（＃＾―＾＃）

では、怒涛？の第十四話をお楽しみに（＃＾―＾＃）

## 澄田康美から連絡

澄田康美の小説をご贋履して下さっている読書の方々に連絡です。

この度、澄田康美は師匠から教えてもらった所を覗き、

そこで学んだ事を元に、わしはある短編を書きました。

タイトルは、「小説の木」です。

これは、澄田の今後がかかった大事な小説です。

決断していい加減な気持ちで見ないでください。

見てくれた人は、お手数ですが感想をお願いします。

良い点と悪い点を、正直に書いてください。

建前などは気にせず、ありのままに書いてください。

わしはそれを全て受け入れる所存です。

澄田からの連絡は以上です。

連載の更新ではなかった事を、

深くお詫び申し上げます。

#### 第十四話 七人の願望者（前書き）

ありのままあらずじ

尾裂狐の案内で空き家と思っていた所に行った浮世達だが、

既にそこに鎌川 結という妖怪が住んでいた。

交渉に戸惑ってしまったが、

ぬうが手を差し伸べて、友達になり、その場は解決した。

ではどぞ。

## 第十四話 七人の願望者

ぬうと結の一連のやり取りが終わり、

一同は結の家にて一段落していた

家の中は、田舎等でよく見かける感じである。

皆一様に座って団欒とし、

ぬうは先ほどの怪我を結に手当てして貰っていた。

「ごめんね・・・君を傷つけて・・・」

怪我をした腕に包帯を巻き、怪我の様子を見ながら、

結はぬうに申し訳なさそうな様子でぼそぼそと言っていた

ぬうは首を横にふるふると振り、

「気にしないで」とても言っている様子を見せていた。

見えていて微笑ましい光景に、

浮世やダイダラボッチも笑みをこぼしていた。

「・・・仲良くなって、よかったね」

「ああ、本当だな」

もっと他に言える事もあつただろうが、

今の二人に相応しい言葉はこれが一番だと、

浮世もダイダラボッチも思つたのだ。

浮世とダイダラボッチの隣に座っていた尾裂狐も、

口にこそ出していなかったが、

同じ気持ちで二人を見届けていた。

しばらくして、結の手のよるぬうの手当てが終わつたようである。

「はい、終わったよ」

結がぬうから手を離し、

ぬうは手当てをされた所を見回した。

結の暖かさも込められた手当ては、

ぬうの心も癒していたようである。

ぬうは結ににこりと微笑みかけ、

結は「へへ」と照れた様子で返した。

それによつて、場は更に和んでいく。

そろそろという所で、ぬうの隣でじつと座っていたかあが、

結にそつと、話しかけてきた。

「結君、明日の朝、三人で遊ばないか？」

「え？ いいの？」

「結君がいいのなら」

かあの突発的な提案に、

結は戸惑ってしまったが、

友達となった証を示そうと、

結はその提案に乗った。

「わかった」

「よし、それでは、何をして遊ぶか話し合おう」

かあの一言で、子供だけの話し合いが始まった。

浮世やダイダラボッチ、尾裂狐が混ざる事は出来ない、

子供達だけの話し合い。

大人三人はその様子をただ見守っていた。

しかし、見守っているだけというのは、

やはりもどかしい物である。

「・・・ボッチ、俺に何か出来ないかな？」

「そうだね・・・」

「水汲みにでも行ったらどうじゃ？」

力仕事は男のする事じゃ」

尾裂狐の突発な発言に、

浮世は「ちょっと待て」という対応をしてきた。

「水汲みって・・・水はどこにあるんだよ？」

「この近くに川があるんじゃないから、そこから水を汲んできたらええほら、ちようどそこに桶があるじゃろ？」

尾裂狐が指差した先には、

程よい取っ手のついた桶があった。

「・・・なるほどな  
でも、力仕事だったらボツチの・・・」

浮世が言葉を続けようとしたが、  
はっとなって口をつぐんだ。

隣にいるダイダラボッチから、

明らかな殺気を感じ取ったからだ。

「・・・何か、言った？」

ダイダラボツチの問答に、

浮世は首を横にぶんぶんと振り、

必死に否定していた。

「それじゃ、水汲みに行つてこい」

尾裂狐の一声に、

浮世はぶつぶつと不満そうな態度で、

一同に見送られて、川に向かっていった。

夜道も暗い有様であつたが、川のせせらぎの音を頼りに、

浮世はどうにか川にたどり着いた。

暗くてはつきりとは見えなかったが、

川の水は透き通つたように綺麗であり、

恐らく、そのまま飲んでも大丈夫なぐらいである。

浮世は足元の石に注意しながら、

川の流れる所にまで来た。

月明かりが反射して映る月に見とれながら、

浮世はしゃがみこみ、桶に水を汲んだ。

「これぐらいでいいか」

桶に八分目ぐらいまで水を入れて、

浮世は川の流れを見届けながら、

皆のいる家に帰ろうと歩き出した。

その時であつた。

浮世は、えもいわれぬ気配を感じ取ったのだ。

人が妖怪か、そのどちらとも言えない気配。

浮世は気配のした方に、そつと振り向いた。

気配のした方には、

人影らしき物は見当たらなかった。

思い過ごしかと思つた浮世は、

また歩き出そうとしたが、

気配のした方から、浮世を呼び止める声がしてきたのだ。

「待ちなされえ・・・その者」

浮世が感じ取った気配は、気のせいではなかった。

確かにそこに何かがいたのだ。

浮世は少し驚きながら、今度はすぐに振り向いた。

浮世の視界には、森の中から歩いてくる者が映っていた。

その者は人の形をしているのに、人の気配がしていなかった。

しかし、妖怪の気配とも違う気配であった。

まるで・・・死人でもあるかのような気配である。

浮世は唾を呑み込み、どうにか自分の口を開けた。

「お・・・お前は、誰だ？」

恐怖で体がこわばりそうになっていた浮世だが、

どうにか己を奮い立たせて、言葉を出した。

浮世の問いかけに、死人のようなその者は、

死んだような声で返してきた。

「私は・・・私だ・・・」

「え？名前は・・・ないのか？」

「私達に・・・名はない・・・」

私達？どういう事だ？どう見ても一人しかいないじゃないか・・・

浮世がそう思った瞬間であった。

視界に移りにくいものの・・・浮世の周りを取り囲むように、

七人の人間の姿をした者がいた。

皆一様に死んだような気配をしており、

皆同じような格好をし、

皆が浮世をじっと見ていた。

浮世がその事に気づいた時、

浮世は戸惑う事も出来ず、

じつと体が固まってしまった。

恐怖といった概念だけではない。

浮世の体を支配したのは、

そんなに単純な物ではなかったのだ。

浮世が何も出来ない状態で、

七人の何かは、口を揃えて、浮世に話しかけてきた。

158

「君が、お前が、お主が、貴様が、あなたが、あんたが、てめえが、私の、俺の、吾が輩の、わしの、僕のもの、あたしの、我の、代わりになれ！！」

そうすれば、

僕は、俺は、吾が輩は、わしは、私は、あたしは、我は、解放される！！

さあ、私の、俺の、吾が輩の、わしの、僕のもの、あたしの、我の、代わりになれ！！」

七人の意味不明な問いかけに、

浮世は困惑するしかなかった。

ただ一つ、浮世にもわかる事はある。

今すぐに・・・この場から逃げる事だ。

事情も勝手もわからない者達からは、

逃げるが定石である。

浮世は死に物狂いで、その場から逃げようと走った。

足元なんて気にせず、とにかく走った。

しかし、七人の死人がそれを許すはずがなかった。

皆一斉になって、浮世を追いかけてきた。

「逃げるな！！」

お前は、

私の、俺の、吾が輩の、わしの、僕の、あたしの、我の、  
代わりになるのだ！！」

相変わらず彼らの意味不明な問いかけに、

浮世は声を振り絞って、

その問いかけの真義を問うた。

「だから・・・代わりになるって、どっぴう意味だよ!？」

浮世の問答に、

七人の死人は寂しそうな声色をさせて、

はつきりと・・・答えたのだ。

「単純な事だ

私の、俺の、吾が輩の、わしの、僕の、あたしの、我の、為に

死んでくれ」



## 第十四話 七人の願望者（後書き）

後書き

書き方新しくしてみました。澄田でゝすv(、、\*v)

やっと師匠の出してくれた妖怪登場ですたい。

そんでもって、明らかに浮世ピンチ！！これはやばいぜ浮世！！

ま、どうなるかはもちろん次回にてねd(。ゝω・ゝ)

一応、プロフィール紹介です。

キャラその7

七人ミサキ

能力 災厄を撒き散らす程度の能力

外見 七人で行動する山伏達

人物設定・・・

常に七人で行動している妖怪で厄介極まりない存在。

一人殺すと七人の内一人が抜け、

その殺された一人が加わり新たな七人ミサキとなる。

そしてその意思は一つに統合されている。

つまり七人の統合された一つの意味が、七つの体を操っているようなものだ。

その為メンバーが変わる度に性格や口調が変わってしまう。

七人ほぼ全員が成仏したいと考えており、無差別に人間や妖怪を殺している。

しかもメンバーの中に妖怪がいれば、

その妖怪の能力も不完全ながら使用も可能。

一人称は私達。

イメージ二つ名 結ばれし七人

バトルイメージ

文字通り七人で数に物を言わせた戦術を取る。

こんな物です。あ、これはプロフィール紹介しない方がよかったかな？

では、気になる第十六章をお楽しみに（\*^ー^\*）

P S ！この書き方嫌だったら意見どうぞm（――）m

## 第十五話 切なる願い（前書き）

ありのままあらずじ

ぬうと結が仲良くなり、

かあが遊びの提案を持ちかける。

浮世他二名はそれを見守っていたが、

浮世がパシリ同然の扱いで川に水を汲みに行った。

水を汲んで帰ろうとした矢先に、七人組の妖怪と遭遇した。

浮世が必死に逃げていると、その者達が明確な目的を口にした。

ではどぞ

## 第十五話 切なる願い

浮世がその者達の目的がわかった時、浮世は・・・平常心を保てなくなっていた。

俺に・・・死んでくれだつて！？

いきなりの死の宣告に、浮世はもはや逃げる事しかできなかった。

迎え撃つ事など考えられなかった。

実際、浮世がこの世界にて体験した戦いは一度だけ、

それも、命のやり取りなどではなく、あくまで手合わせ程度の戦いであつた。

だが、この者達と戦う場合は、そんな生易しい物ではない。

命と命を削りあう、正真正銘の殺し合い。

今の浮世は、幻想郷に訪れてから、かつてない恐怖に駆られていた。

今まで幻想郷で味わった感覚は、悲しみ、愛、友情など、およそ恐怖とは無縁の感覚。

しかし、今浮世が味わっているのは、紛れも無い恐怖の味である。

浮世にとってその味は、当然口に合う訳がなかった。

浮世は真っ直ぐな人間である。恐怖などろくに知りはない人間である。

だが今の彼の心は、恐怖で一色になっていた。

さっきまでまだ見えていた暗い夜道が、更に見えなくなる感覚。

いつしか彼の視界に見える物は、迫ってくる死の恐怖だけになっていた。

息が切れても、彼は走った。

足が痛くても、彼は走った。

怪我を負っても、彼は走った。

行くあてが見えなくても、彼は走った。

今自分がどこをどう走っているのかわからなくても、彼は走った。

走る事しか、彼には出来なかったのだから。

だが、浮世が走り続けても、彼らは浮世の命を貰うために、浮世を追いつけた。

浮世の足を叩いたり、浮世の腕を掴んだり、

浮世の背中に刃をつきたてようとしたりと、

彼らは思い思いに浮世の足を止めようとした。

しかし浮世は、それら全てを振り切って、とにかく走り続けたのだ。

浮世には、待っている者がいる。自分の帰りを待っている者がいる。

それが浮世の最後の支えであつたのだろう。

とにかく走り続ける浮世の前に、希望となりうる物が見えてきた。

そう、ダイダラボッチ達のいる家が、確かに移ってきたのだ。

浮世は安堵から、迂闊にも体の力を抜いてしまった。

その瞬間を、彼らは決して見逃す事はしなかった。

浮世の油断し切った背中に・・・彼らの刃が、突き刺さった。



「・・・随分、帰りが遅いの・・・あの人間・・・」

浮世の帰りを待つ一同は、明らかに暗い調子になって、じっとなっていた。

夜道に行った浮世の遅さに、

全員が「もしかしたら」という考えを頭によぎらせていたのだ。

しかし、ダイダラボッチは一人、浮世を信じていた。

「だ、大丈夫よ!!」

ちよつと水汲みに手間取ってるだけよ!!」

ダイダラボッチの一声を聞いても、誰一人顔を明るくしなかった。

考えてみれば、ここは妖怪の山である。人間が一人でいて安全な道理はない。

皆が最悪の答えだけは口にしない中、ダイドラボッチはとうとうしびれをきらした。

「こうなったら、私だけでも浮世を探してくる！」

皆が「待つて」と止める間もなく、ダイドラボッチは立ち上がって、家の玄関を思いっきり開けた

玄関を開けた先に、浮世はいた。確かに浮世はいた。

だが、先ほど楽しそうに話を交わしていた浮世とは、変わり果てた姿をしていた。

全身はボロ雑巾のようにずたぼろになり、血が滴り落ち、

背中には・・・刀が一本、突き刺さっていたのだ。

それが見てわかったダイドラボッチは、目の前の現実に・・・直視できなかった。

「・・・浮世？」

口から漏れた、彼を呼ぼうとする声。

その声に、浮世はあまりにもか細い声で・・・返事をしたのだ。

「ただいま・・・ボッチ・・・遅れてごめん・・・」

目の前のダイダラボッチよりも、明らかに自分の事を心配すべき状態でも、

浮世はあくまで笑顔になって、ダイダラボッチに・・・そう言ったのだ。

その言葉が最後の台詞にでもなったかのように、浮世はその場に倒れてしまった。

浮世が倒れた後で、ダイダラボッチはようやく・・・目の前の現実  
に直視したのだ。

「・・・浮世お!!!」

ダイダラボッチは浮世の傍に駆け寄り、浮世の体を抱えた。

浮世の生気のない顔は、ただ笑顔だけが残っていた。

今にも閉じそうな目を、浮世は恐らく全力で開けていた。閉じない  
ように、必死に。

ダイダラボッチを心配させまいと思った、浮世の最後の心配りである。

「浮世！！しっかりしてよ！！浮世！！」

ダイダラボッチの必死の問いかけに、浮世は生気はないまま・・・ただ答えた。

「ははは・・・そんなに心配するなって・・・帰りが遅れただけだろ？」

もちろん、ダイダラボッチが心配したのは、浮世の帰りが遅れた事ではない。

今にも消えそうな浮世の命のもし火が消える事を、ダイダラボッチは心配したのだ。

自分を助けてくれた者が、今自分の目の前でその命が消えそうになっている。

ダイダラボッチは、そうなる事だけが、どうしても怖かったのだ。

ダイダラボッチは長生きをした。人間と比べれば、途方も無いほど長生きをした。

だからこそ、いくつもの死をその目で見てきた。

今の浮世は、正にその命が消えそうになっている状態だとわかって

いたのだ。

ダイダラボッチは恨んだ。目の前の命を助ける術が……自分には無い事を。

そして、浮世をこうした存在を……ただ恨んだ。

ダイダラボッチがとめどなく涙を流している時に……浮世をこうした原因が、

声だけをさせて、ダイダラボッチに話しかけてきたのだ。

「やつとだ……やつとその者が、私達の代わりとなる……これでやつと……」

私は、俺は、吾が輩は、わしは、僕は、あたしは、我は、解放されるんだ」

どこからともなくしてくる複数の声に、ダイダラボッチは……

浮世をこうした者達だと、直感した。

「……あなた達が……浮世をこうしたの？」

ダイダラボッチが今まで見せた事のない、圧倒的な怒りを前にしても、

彼らはいたつて平然に、事実を述べてきた。

「彼は、

私の、俺の、吾が輩の、わしの、僕の、あたしの、我の、  
代わりになる為に死ぬのだ

その一言が、ダイダラボッチを更に怒らせた。

「そんな・・・勝手な理由で・・・浮世をおおお！！！！！！」

ダイダラボッチが怒りをあらわにし、今にも姿を豹変させようとしたその時、

浮世がそつと、ダイダラボッチの手を掴んで止めたのだ

「やめてくれ・・・ボッチ・・・彼らは・・・俺が助ける・・・」

「・・・助ける？何を言ってるのよ！？」

あなたを襲っている者達を、逆に助けるだなんて・・・」

「違うんだ・・・彼らは・・・ただ自由になりたいんだ

・・・だから『それであなたが死ぬ気なの！？』」

「私は・・・そんなの嫌！！浮世が死んだら・・・私・・・」

さっきの怒り以上に、ダイダラボッチは悲しみに襲われていた。

それほどまでに、浮世の事を思っているからこそ、

ダイダラボッチは涙を流しているのだ。

浮世もそれぐらいは察している。

だからこそ浮世は、最上の答えを、ダイダラボッチに用意していたのだ。

「安心しろよ、誰も……死なせやしない」

## 第十五話 切なる願い（後書き）

後書き

厨2があるから、小説は面白い。

厨2があるから、小説は出来る。

厨2があるから、話は進むのです!!

今回はすさまじい厨2因子の爆発がありましたなあ。

以前との更新速度の差があまりないので、ちょっと短めです。ソーリーm(――)m

その分、結構気になる話展開には出来てると思ってますだ。

え？落ちの付け方が悪い？すみませんねえ、ちょっと強引なのは自覚しております!!

駄文からあんまり成長してないのは永遠の悩みですたい!!

ちょっとはうまくなりたいよ・・・(´Д、`)

まあ、見てくれる人が増えてくれてる現状はありますので、

これからも気合を入れて望みたいです。

では、第十六話をお楽しみに（\*^|^\*）

## 第十六話 浮世の約束（前書き）

ありのままあらずじ

浮世が七人ミサキに絡まれ、

逃げようと必死に走ったら、

とりあえず家までは帰れたが、

七人ミサキにばこばこにされてしまった。

ダイダラボッチがその事で激昂しようとしたが、

浮世に策があるらしい。

ではどぞ。

## 第十六話 浮世の約束

安心しろ、誰も死なせやしない――

それが、浮世の下した答えである。

だがこの現状で、そんな事が言える有様だと言えるのか？

今の浮世の言っている事は、どう見ても絵空事にしか聞こえなかった。

もちろんダイダラボッチも、浮世の言った事が非現実的だと思っていた。

今命が狙われている自分は死なずに、彼らも生かす方法――

一体浮世に、どんな考えがあると言っのだろうか？

全てを丸く治める浮世の秘策が、とうとう語られる。

「彼らは……縛られているんだ……長い間にきつと……

どうしようもないぐらい強い呪いに掛かったんだと思う……  
だから俺が……彼らを解放してやればいいんだ……  
俺の能力なら、それがきつと出来る……いや、きつとじゃない・  
・

絶対出来る……信じてくれ……ボッチ……」

浮世の言い分は、まったく根拠がない言い分である。

今まで浮世がその能力を奮ったのは、二つとも偶発的に起きた事である。

その時は無意識の内の発動であつたが、今回だけは違う。

今回は意識して、能力を使わなければならない上に、

その能力が効くかもわからない試みである。

普通なら、そんな試みを自信を持って言えるはずがない。

ダイダラボッチも最初はそう考えた――

だが、浮世の自信を持った顔と言葉と 생각이、

ダイダラボッチを自然と納得させたのである。

ダイダラボッチはこくんとうなずき、自分に出来る事はないかと、

浮世に催促した。

浮世はぼろぼろになった体を奮い立たせて、

ダイダラボッチに、自分の頼みを頼み込んだ。

「ボッチ・・・俺を立たせてくれないか・・・  
彼らの前に立って・・・彼らに俺の話を・・・聞いてもらいたい  
んだ・・・」

ダイダラボッチは浮世の肩を担ぎ、浮世を彼らがいると思える所に  
一緒に立った。

そして、浮世が彼らに――自らの公約を述べた。

「聞いてくれ・・・これは恐らく、俺一人だけじゃできない事だ・・・  
・

君たちの協力がある・・・聞いてくれないか？」

それを聞いた彼らは、彼らの代表と思える者が一人――浮世  
の前に現れた。

元々は綺麗な和服であつたろうば、長い時を経て、

ぼろぼろになった服が、彼の呪いの年数を物語っていた。

暗闇で顔はわかり辛かったものの、

代表者は死人のような声で、浮世達に話しかけてきた。

「それはどうせ・・・自分が助かりたいから考えた策であろう？」

私達は幾人も見てきた・・・そんな人間達の姿を！！

私達はその度に傷ついた！！だから私達は、人間の言う事など信じない！！

さあ、おとなしく死んで、私達の代わりになるがいい！！

そして、私達の苦痛を和らげるのだ！！」

代表者のあまりに一方的な言い分に、浮世は顔を上げて――

じつと、その者を見つめた。

暗闇で見えづらくても、彼は紛れもなく浮世の前にいる。

浮世にとって、それだけ十分だったのだ。

それだけ出来れば・・・きっと思いは伝わる。

そう思い立った浮世は、代表者の言い分に、物言いを入れたのだ。

「・・・それじゃ、いつまで経っても君たちはそのままだ・・・

それじゃ駄目だ・・・それじゃずっと・・・犠牲者が出る・・・

また誰かが苦しまなければ・・・駄目じゃないか・・・

そんな不毛な輪廻は・・・俺がなくてやる・・・

だから、君たちの思いを――俺にぶつけてくれ」

浮世のその一言によって、彼ら七人が――文字通り、浮世の前に現れたのだ。

浮世の前に立つた彼らは、皆声を揃えて――思いのたけをぶちまけてた。

「――私達は・・・自由になりたい・・・みんなで自由になりたい・・・  
だけど無理だ・・・私達の呪いを解く事なんて『安心しろよ』・・・」

彼らが涙し、語る言葉に、浮世は涙をぬぐうように、言葉を割り込ませた。

「その解けない呪いを・・・俺が解いてやる・・・  
だから・・・みんなで・・・心を一つにしてくれ・・・  
もう一度言う・・・俺が救ってやる・・・約束だ・・・」

浮世の言葉が、彼らの心を一つにし、彼らは浮世を囲むように、手を繋いで輪になった。

浮世はダイダラボッチの手から離れ、円の中心で、自分の手をじっと見た。

「できる・・・俺なら出来る・・・絶対出来る・・・彼らを救いた  
い・・・

俺の能力・・・俺と彼らの思いに・・・応えてくれ・・・」

浮世は両手を上に広げて・・・強く願った。ただ強く願った。

「  
—  
彼らを、  
救ってくれええ！！！！」  
」

浮世がそう言い放った瞬間、  
辺りは浮世から放たれる光に包まれて  
いったのだ。

光が晴れ、そこに現れたのは——浮世の周りを飛ぶ、七つの光の玉であつた。

その光は浮世の周りをゆつくりと周りながら、ふわふわと軽そうに飛んでいた。

それと同時に、浮世の周りにいた七人の姿は消えていた。

そう——その七つの光の玉こそ、彼らの——解放された姿であつたのだ。

光の玉から、皆の意思と言える言葉が聞こえてきた。

私の、俺の、吾が輩の、わしの、僕の、あたしの、我の、

「おい、もしかして俺、自由になれたのか!？」

「そうだよ!!僕達、自由になれたんだよ!!」

「これ、あたしが見てる夢じゃないよね!？」

「やっと・・・先にいった吾が輩の家族に会える・・・」

「わし、あいつに会えるんやな!!やったでえ!!」

「我は・・・救われたのか？」

六つの光が狂喜の声を上げ、浮世の周りを縦横無尽に飛び交った。

その中で一つだけ、浮世の前にふらふらと浮かんでいる光があった。

「——約束どおり、私を、いえ、私達を……救ってくれましたね」

声色から察するに、さきほど違って、女性の声をさせていた。

「君は……さっき代表で喋ってた子だね……女性だったのか……  
ごめんな……さっきは全然わからなかったよ……」

浮世が申し訳なさそうな態度で、その光を摩るように手を当てた。

光は逃げようともせず、じっとなっているだけであつた。

「あの時の私達は……皆で一つの人格なのです  
ですから、口調等も統一された物になるのです」

「そうか……だからあんな喋り方だったのか……」

浮世が安心した顔を見せた所で、光は浮世の元を離れ、浮世の頭上に集まっていった。

少しもしない内に、空から一筋の光がその場に降り注いできた。

その光に導かれるように、七つの光は――天へと昇っていった。

天に昇りきる前に一言、皆が一つとなった言葉が、浮世に向けて言われたのだ。

「ありがとう」



その一言を最後に、空からの光は消え、七つの光は天へと昇って、その姿を消した。

浮世が最後の言葉を聞き取った瞬間に、浮世は気を失い、倒れた。



## 第十六話 浮世の約束（後書き）

後書き

今ここに・・・七人の魂が、救われましたあ・・・（；；）

七人ミサキはキャラとして消えてしまいましたけど、

浮世のキャラ的に七人ミサキはどうしても救いたかったんです。

後、作者自身が・・・どうしても彼らを救いたかったのもあります。

そんな浮世とわしの意思がシンクロした結果・・・彼らは救われたのです。

いえ、この言い方はおかしいですね。

浮世と彼らが強く願ったからこそ・・・彼らは救われた、

という言い方がいいですね

とりあえず、七人ミサキとの出会いと別れは、こうして幕を閉じました。

次回からは、応募してくださった妖怪が大勢出てくる（予定）ですので、

これからよろしく願いしますだm（――）m

では、第十七話をお楽しみに（\*^|^\*）

## 第十七話 力と愛（前書き）

ありのままあらずじ

ぼろぼろになつた浮世は、

七人ミサキを恨むどこか、救いの手を差し伸べた。

七人ミサキはその思いのたけをぶちまけた後、

浮世の助けによってその魂は成仏していった。

その後、浮世は力尽きて気絶した。

ではどぞ

## 第十七話 力と愛

まどろむ意識の中、浮世は——この世ではない空間にいた。

風景は漆黒と朱色が溶けるように混じりあい、

浮世は水の中にでもいるように体が浮いていたのだ。

浮世は眼を開け、その空間に目を向けた。

見慣れない風景に、浮世は戸惑う事などなかった。

否、意識が定まっていらない為、それをはっきりと認識できていないのだ。

指一本すら動かさず、漂い続ける浮世に——語りかけてくる声が生じた。

——聞こえているか？私の子孫よ——

浮世はあまり聞きなれていない、誰かもわからない声。

声色などから察するに、多少年を取った老人らしき声である。

突然の問いかけに、浮世は返事をする前に、まずは戸惑った。

そんな浮世に、声は続けて話しかけてくる。

——今はただ聞いておけばいい

私の話を——

その一言の聞いた後の浮世は、文字通り動こうとはしなかった。

ただ話しかけてくる声に——耳を傾けた。

——それでいい

では、お前に話をしてやろう

私は、人間であるお前から見れば、あまりにも遠くの先

祖だ

本来なら、こうしてお前の前に姿を見せる事など、  
あるはずがなかったのだ

だが、お前はある時に一度だけ、私の血を呼び覚ました  
お前はその時の記憶なぞないだろう

あの時のお前は、お前ではなかったのだから  
今のお前では、私の力を奮うに足りぬ

この先の旅を経て、己の技量を磨くがいい  
お前の元々の世界ならそれは望めないが、この世界なら

ば可能性はある

お前が真にその力を奮えるに値する者になった時、  
私はまたお前の前にその姿を見せる

・・・すまない、今は私の姿が見えていなかったな

っている

とにかくだ、お前は今、現実世界の肉体が瀕死状態にな

お前の心だ

お前の仲間が手当てをしているが、本当に大事なものは、

手を貸そう

お前が彼らの思いに答えるのであれば、私も少しだけ、

これだけはわすれるな、お前は一人ではない――

その一声を最後に、浮世の目の前の風景に、一筋の光が差し込んだ。

その光に導かれるように、浮世の体は光の方へ吸い込まれるように向かっていった。

その最中で、浮世はたった一つの疑問を――口にした。



「あなたの……名前は――」



浮世が目を覚ました時、視界は自分の仲間の顔で埋まっていた。

かすかに天井の模様程度しか見えない視界。

浮世が目を覚ました事がわかった皆は、各々が浮世に声をかけたのだ。

「やっと目を覚ましたんか、人間  
おはようさん」

「おはよう、浮世兄さん  
よかった、手当てに効果があつたみたい」

「おはよう、浮世兄さん  
かあももちろん、皆心配していたぞ」

ぬうは声こそ出していなかったが、

浮世に「よかった」とでも言っている笑顔を向けた。

その時、浮世は――自分が一番知っている人がいない事に気がついた。

尾裂狐がいる、結がいる、かあがいる、ぬうがいる。

だが、彼女だけはいなかった。

この世界で一番傍にいてくれた存在が、今いないのだ。

浮世は、その事を不安に思い、ほぼ無心で布団から上半身を起こした。

思いつきり起きたので、周りにいた一同は慌て気味に距離を取った。上半身を起こした後で、浮世は――自分の全身に走る鈍い音と痛みを感じ取った。

浮世が自分の体に目を向けると、上半身の服がなく、

代わりに肩から胴体にかけて包帯が伸びていたのだ。

浮世がその包帯に手をかけようとした時に、結は語りかけてきた。

「あ、それは浮世兄さんが怪我してたから、僕が手当てをしたんだよ」

浮世はその一言から、それまでの記憶を呼び覚ました。

そつだ、俺は七人ミサキに絡まれて――

彼らの手助けをした後に、気を失ったんだ

およそその通りの事を思い出した浮世。

だが、その記憶を辿り、今の自分の現状には納得できても――

やはり彼女がいない事だけには納得できなかった。

いつも傍にいてくれた彼女なら、こんな時こそ浮世の傍にいるはずなのに、

今は彼女の存在がない。

浮世がその事で悩み続けていると、尾裂狐がそんな浮世を心配したのか、

今の浮世が最も欲しい情報を教えてくれた。

「そんなに心配せんでも、ボッチはお前さんの為の服を探しに言ったのじゃ」

尾裂狐のその一言は、浮世の不安を消すと同時に――ある事を理解させた。

そうか、俺の服ってそんなにぼろになってたんだな・・・

事実、浮世は刃物で刺される程の目に合っているのだから、

服がぼろぼろになっていてもまったくおかしくはない。

浮世はやつと安心できた様子になった直後に、家の玄関が静かな音を立てて開いた。

その後——浮世がこの世界で一番聞き慣れた明るい声が聞こえた。

「ただいま」

浮世の状態はど——「」

その声は続こうとした所で、つぐまれてしまった。

否、ダイダラボッチは、目を覚ました浮世を見て、声を失ったのである。

もちろんそれは、よい意味での事だ。

ダイダラボッチが、浮世の為だと思える服を床に落とした後で、

浮世が元気よさそうな調子で、ダイダラボッチに手を振り、声をか

けた。

「おはよう、ボッチ

それって俺の為に探してきてくれた」

浮世の言葉は当然、ダイダラボッチの飛び込み抱きつきに阻まれた。

「浮世おおおおお！！！！！！！！！！」

今までで一番の絶叫と歓喜の声を上げて、浮世に抱きついた。

予想以上にその力は強かったので、浮世の体はバキボキと音を立てた。

「いだだだだだだ!!! ちょ!!! 加減してボッチ!!!」

浮世の言葉が聞こえていないのか、ダイダラボッチはひたすらに抱きついたままである。

だが、その力が次第に弱まり、ダイダラボッチは……力のない声を出したのだ。

「ずっと……心配してたんだよ……ずっと……待ってたんだ」

よ．．．」

浮世の事を信頼していたからこそ、傍から離れた。

浮世の事を思っていたからこそ、その後の事を考えた。

浮世の事を信じていたからこそ——その言葉が出てきたのだ。

ダイダラボッチは浮世に抱きついたまま、ぼろぼろと涙を流した。

その涙はもちろん全て、浮世が目覚めた事に喜ぶ涙である。

浮世はすつと、ダイダラボッチの頭をなでるように手を当て、声をかけた。

今浮世が、一番に言つべき言葉である。



「不安にさせて、ごめんな」

浮世は泣き続けるダイダラボッチに笑顔を向けて、そう言い放った。

その一言が、ダイダラボッチの涙は止めさせた。

目に残ったわずかな涙を、浮世が手でそっとぬぐい、軽く笑った。

「ははは、こうして見ると、子供みたいに見えるな、ボッチ」

ダイダラボッチはきよとした顔になった後で、

自分が軽く馬鹿にされたと思い、少しだけ怒った。

「わ、私は子供なんかじゃないもん!! 浮世の馬鹿!!」

「はは、ごめんごめん」

さっきと違い、あまりにも軽い——「ごめんの二言」。

いや、今のダイダラボッチには、それぐらいのごめんでいいのかもしれない。

愛の前では皆、子供になるのだから——

## 第十七話 力と愛（後書き）

後書き

ええ話やないかぁ・・・（、、） ↑ 自己満足

度を越えたシリアスの後は、こうしたほのぼのが一番です。

え？序盤の厨2は何って？気にしない気にしない♪

て言つのはさすがに冗談です。

意味不明っぽいけど、これからにすごい重要な事です。タブン

さて、次回からいよいよ物語はまた動き出していきます。

ので、皆さんの出してくださった妖怪達も、本格始動する事間違いないですたい。

では、第十八話をお楽しみに（\*^|^\*）

PS 東方キャラって出すべき？（、、3、、）出すなら誰がいいかな？過去だけど。

## 第十八話 新しい服（前書き）

ありのままあらずじ

浮世が生死の境をさまよっている時に、

夢の中でよくわからない者の声を聞く。

目を覚ました時には皆がいたのだが、

ダイダラボッチは服を探していた為に不在。

ダイダラボッチが帰ってきた時、ダイダラボッチは浮世に抱きつき、

浮世の骨をバキバキ言わした後で、

浮世はダイダラボッチをなだめ、

いつもの風景に戻っていった。

ではどぞ。

## 第十八話 新しい服

その後で、浮世が気にしたのは、ダイダラボッチの持ってきた服である。

先ほどのやり取りで、

浮世はダイダラボッチが持ってきた服の確認がおろそかになっていた為、

もしダイダラボッチが奇天烈な服を持ってきたとして、

浮世はそれが嫌でも着なければならぬ事態になってしまうのだから。

しかし、ダイダラボッチのセンスは浮世にはわからない為、

判決を待つ死刑囚がその日を尋ねるように、浮世はダイダラボッチに確認を取ったのだ。

「あのさ・・・ボッチが持ってきた服って・・・どんな奴？」

浮世の言葉に、ダイダラボッチは嬉しそうな様子で、先ほど落とした服を拾って、

浮世にはつと見せびらかすように見せてきた。

「こんなんだよ」

ダイダラボッチが見せてくれた服は——とりあえず布の服だった。

まるで上着のようなごつい上服に、ずんぐりむっくりとしたズボンらしきもの。

所々に紐が巻きついた感じでまとめられており、一言で言うのなら

聖徳太子が着ていたような服であった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

いや、はちゃめちな服ではないのだが、これを着ている自分を想像した浮世は、

どうにもしっくりこない感覚に襲われていた。

ダイダラボッチが親切心で持ってきてくれたのは重々承知な浮世だが、

素直に喜ぶ事はさすがに出来なかった。

それが顔に出てしまった浮世に対し、ダイダラボッチがまるで子犬のような目をさせて、

浮世をじっと見てきてのだ。

「・・・やっぱり、嫌なの？」

こんな様子で懇願されて、浮世はNOと言える訳がない。

「い、いやいや！俺は全然嫌じゃないよ！！むしろOK！！」

心の中では、二つの意味でちきしょー！！と嘆きながら、浮世は建前を繕った。

悲しいかな、浮世も男である以上、

こんな可愛い仕草をされては、男として断れなかったのだ。

まあ元々断る権利など、浮世にありはしなかったのだが。

そんな浮世の返答に、ダイダラボッチは嬉しそうな顔を見せていた。

「本当！？じゃあ、すぐに着替えよつか！！」

「え？  
・・・」



数分後、包帯を巻いていた姿から、すっかりビフォーアフター浮世の姿があつた。

髪型はさすがに元のままだが、服はもう完全に………聖徳太子だ。

「うわゝ、やっぱり似合うよ、浮世」

傍で喜ぶダイダラボッチとは対照的に、テンションをがた落ちさせる浮世。

浮世自身は、これ絶対似合っていないだろ？と心で思っていたからだ。ちなみに、他の者の反応はこうである。

「おお、さすが浮世兄さんが  
威厳があつて、とても似合っているぞ」

「ほう、わっちが思ってたよりマシだと思うぞ」

「かつこいいなあ、僕も大人になったら、浮世兄さんみたいな服着ても似合うかな？」

様子を見る限り、どうやら皆真面目になっているようである。

ついでにぬうも心なしか似合っていると言いたげである。

そんな集団の意思を前にして、浮世の心中は捻じ曲げられてしまった。

あれ？これって思ったより似合ってる？

いや、恐らく一般大衆から見れば、現代人の浮世がそんな古風な服を着ていて、

似合っている訳がないのだ。

ただでさえ浮世の顔は日本人よりではないというのに、

それに拍車をかけるがごとくのこの服装。

だが、集団の意見というのは、個人の意見を潰してしまう物である。

結果、浮世は似合っていないという考えから、

まんざらでもないかという考えにすぐ変わってしまった。

223

「ははは、似合ってるなら何よりか  
本当、ありがとうな、ボッチ」

「お礼なんていいよ  
外に出てたら、ちょっと貰ってきただけだから」

ダイダラボッチの発言から、浮世は——あまりにも今更すぎる事に気がついた。

「そう言えばボッチ——この服、どうやって手に入れたんだ？」

浮世の問答に対し、ダイダラボッチは何も迷う事なく――返事を返した。



「真つ赤で長い髪をした人から貰ったんだよ」



場所は変わって、ここは地獄——ではなく、幻想郷のどこか。  
しかし、そこはとても楽園とは思えない、まさに地獄が具現化した  
かのような地

辺りにある草木は紅く枯れ果て、生き物は皆死に絶えていた。

そんな風景の中を、死に物狂いで逃げる人間がいた。

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・」

道なき道を、息を切らせて、ただ逃げおおせようとする人間。

だが、足元にある骸に足を取られて、人間はその場に転倒してしまった。

「う、うわぁ!!」

倒れても、すぐに立ち上がり、逃げようとする人間。

だが、その人間の足は突如すくみ、動けなくなってしまった。

その原因と思える者が——人間の背後からゆっくりと歩いてきていた。

人間は背後から迫る何かに振り向く事も出来ず、ただ顔から汗を流すしかできなかった。

少しもしない内に、人間の後ろから首元に——人間の手のような物が伸びてきた。

その手は、元々がその色なのかすらわからないほどに、

血のように真っ赤に染まっていたのだ。

人間はガタガタと歯を鳴らし、ただ怯えるしかできなかった。

そんな人間に——伸びてきた手の持ち主と思える者が、  
ゆっくりと話しかけてきたのだ。

「なぜ逃げる？なぜ怯える？なぜ怖がる？やはり、お前も人間なのか」

妖艶な手をしていたのだが——声色は80を超えた老人の声  
よりも低く、

まるで地鳴りのように響いてきた。

その声を聞いて、人間は余計に怯え立った。

「ひいいいいい！！！！助けて！！助けてくださいい！！」

懇願の声を上げ、命乞いをする人間。

怯える人間をあやすように——首元にあった手が、人間の口  
元を塞いだ。

そして、その手の持ち主が——あまりにも不気味な笑顔を浮

かべて、

人間に耳打ちをするように、つぶやいてきたのだ。



「安心しろ、お前を一人ではなくなる  
皆一つになるのだから——」



## 第十八話 新しい服（後書き）

後書き

浮世、衣装チエーンジ！！（>D<）／

え？以前の服がむしろ分らなかったって？一応ジーパンと長袖つすよ（´・ω・｀）

とりあえず、ちょっとしたフラグ？立てておきましたよd（）。ゝω・（）

そんでもって、こわい人？てか妖怪？が出てきそうですね（。・）

多分七人ミサキを軽く超えそうな奴じゃないかなこれ？

これからの話は、ちょっとグロあるかもですう・・・（・A、）

すみません、やっぱりR15しておけばよかったかもしれませんね。

まあ、そこまでグロい事はしないと思いますけどね。

てかわし自身がその・・・グロ嫌いなので（^ー^）

では、第19章をお楽しみに（\*^ー^\*）

PS、この話の記念として、短編書き下ろしました。よろしければどうぞ。

タイトルはボッチのラブ作戦！です。

第十九話 子供の遊び 大人の話（前書き）

ありのままあらずじ

浮世がダイダラボッチの持ってきた服に不安を募らせてたら、

その服がどう見ても聖徳太子で、

着てみたら全員からそこその評価を貰ったので、

浮世はしぶしぶ丸め込まれた形になった

その頃、どこかで人間が何かに襲われていた。

ではどぞ。

## 第十九話 子供の遊び 大人の話

浮世はダイダラボッチの口ぶりから、

今自分が着ている服がどういう経由で手に入っただのかを悟った。

これって・・・・・・・・知らない奴からもらったのか？

人かどうかはさておき、どう考えてもその服はダイダラボッチの知り合いではなく、

初対面の者が渡してきたという構図なのである。

少し不安になる浮世に、ダイダラボッチが一応の説明をしてきた。

「大丈夫だよ

優しそうで親切な人だったから、きっと悪い人じゃないよ」

ダイダラボッチのその一言から、頭を掻きながらも、浮世も一応の安心をした。

「それだったらいいんだけど……」

事実、この世界の者は基本的にフレンドリーな者が多い。

浮世もそういった者をいくつも目にしてきたので、

ダイドラボッチがそう言ってくれた事で、

浮世はとりあえず安心できたのだ。

それに、浮世自身も着ていて特に違和感も感じていない以上、

その服には恐らく何も仕込まれてはいないのだろう。

そんな浮世の心配などよりも、尾裂狐は外の風景を気にしていた様子である。

「おい、みんな、外の景色を見てみい」

尾裂狐が指差した外の景色は、雲一つなく、綺麗な朝日が昇っている青空だった。

この様子を見ればわかる通り、既に夜は明けて、朝になったのだ。

その事実よりも、皆はむしろ——その美しい朝の景色に見とれていた。

昨日のドタバタから一転して、こんなに綺麗な景色が拝めた事が、皆の心に真っ直ぐに入っていたのだ。

「おお、きれいな朝日だな」

「本当だね」

「うぬ、本当に綺麗だ」

「僕も、こんな朝日は見た事ないよ」

「（きれい………）」

皆思い思いに、自分の率直な思いを見せていた。

その後で、かあが結構今更な事を思い出していた。

「そうだ、ぬうに結君、外に出て遊ぼう」

「あ、そう言えば約束したね

それじゃ、行こうか――！」

子供達三人は元気よく、家から飛び出していった。

無邪気で楽しそうな声と背中を見送る三人は、

そんな様子に微笑み、和んでいた。

「ははは、本当、楽しそうにしてるよな」

「そうじゃのう」

大なり小なり、子供達はああであるべきじゃ」

二人が腕組みをして見守る中、一人だけ裾をまくって腕を回すダイドラボッチがいた。

「うーん、なんだか私も混ざりたくなってきたー!」

「いやいやー!!さすがに混ざるのはちょっとま『私も行くよー!!』  
・・・」

浮世が止める間もなく、ダイドラボッチは子供達の輪の中に混ざっていった。

その様子に尾裂狐は、率直に深夜のおっさんのような語りをしてきた。

「うむ、体は大人でも、心は子供じゃのう  
いんや、あの体つきであれば、男からすればむしろ高得点ではな

いか？

今時の男はああいう個性タイプに弱いんじゃない？

胸なんて飾りという男もあるが、やはりある方がいいという意見の方が多い

まああいつの場合じゃと、ちと大きすぎるかもしれんう

しかし、それと相まってのあの仕草等はやはり男心に刺さる物があると思うのじゃ

生憎わっちは女じゃから男心と言つのはようわからん

浮世、お主はどう思うのじゃ？」

尾裂狐が恥じる事もなく語る傍で、浮世は完全に縮こまっていた。

尾裂狐の問答にも、力の無い答えを出してくる。

「いやその……………あなたのおっしゃる通りです……………」

悲しいかな、尾裂狐の語った事が浮世にはほとんど当てはまってしまったので、

浮世にはもはやそれ以外の答えなど出せなかったのだ。

尾裂狐はこの答えに対して、軽くため息を吐いていた。

「やれやれ、やはり男というのはそういう物か  
そういう所は昔っから変わらんう

わっちにも男の知り合いはおるのじゃが、わっちのような者よりも、

キヤピキヤピした方を好む者ばかりじゃ

まあ、下手な男に絡まれるよりはマシじゃがのう

とにかく、わっちの知り合いにはろくな男がおらんのじゃ」

尾裂狐のあまりに一方的な物言いに、浮世は必死に意見を求めようとした。

「それって・・・・・・・・俺も含めてるのか？」

気弱そうな顔に汗をだらだら流しながら言った浮世の言葉に、

尾裂狐は頭の耳と背中尻尾をピンと立たせて、きよとした顔になっていた。

「何？お、お主の事か？」

そ、そうじゃのう・・・・・・・・まあ、わしの知り合いと比べたら、マシな方じゃと思うぞ？」

明らかに動揺している尾裂狐に、浮世は少し不自然だなと思った。

流していた汗をピタッと止め、真剣な眼差しで、じっと尾裂狐を見つめた。

「おい、なんでそんな言い方をするんだ？  
それ、本音で言ってるんだよな？」

浮世の疑りの声に、尾裂狐はやはり動揺した様子で答えてきた。

「い、いやいや、わっちはいつも通りじゃよ？  
お、お主がそんな返しをするとは思わなかったから、ちょっと戸惑っただけじゃ」

尾裂狐の軽く赤くなった顔からは、心なしか汗が出ていた。

猜疑心がたまに強くなる浮世は、そんな尾裂狐に顔を近づけて、更に質問を重ねた。

「だったら、その顔の赤みとかはなんだよ？」

「こ、これはその……あれじゃ、熱っばいんじゃよ……」

顔を背けて言ってきたので、浮世は更に猜疑心を募らせた。

「おい、顔をそっば向ける必要はないだろ？お前本当に嘘ついてないよな？」

「だ、だから、わっちは嘘なんか言うつらん！！  
いい加減にわっちから顔を離さんか！！」

ムガーっとなって怒る尾裂狐に、さすがの浮世も距離を取らざるを得なかった。

その後の浮世はそれ以上突っ込まずに、とりあえずその話題を止めた。

そして浮世は、冷静になって今すべき事を考えた。

しばらく考えた後に、浮世はある答えを導き出した。

「そうだ、俺達の朝飯って、どうなってるんだ？」

「ああ、そうじゃのう

結がいくら持っているにしても、それにあやかるのは失礼じゃろ  
よし、今から何か取ってくるとするか」

「え？取ってくるって、何を？」

「わっちは、山に行つて山菜でも取ってくる  
お主は、川で魚でも取ってくるとええ」

「魚を取るって………道具もなしでやれってか？」

「男なら、それぐらいの気合を見せてみい」

結構理不尽な尾裂狐の要求に、浮世はしぶしぶと応じるしかなかった。

「わかったよ……その代わり、尾裂狐もちゃんと取ってくれるんだぞ？」

「わかつとるわい」

自信満々な尾裂狐の態度に、浮世は一応の期待をしていた。



外に出た二人は、尾裂狐が早速山の方へと駆けようとしていた。

「それじゃ、すぐにでも行くかのう!!」

そんな尾裂狐の足を止める気はなかったと思えるが、浮世が一言、声をかけてきたのだ。

尾裂狐は当然足を止め、浮世の方に振り向いた。

「尾裂狐、行く前に一言行っておくよ」

「なんじゃ？」

「口だけじゃないって所、見せてくれよ」

浮世のその一言を聞いた尾裂狐は、踵を返して、浮世に言ったのだ。

「わ、わつちを誰だと思つとるんじやい!!」

お前さんが気にしなくても、ちゃんと取ってくるわい!!」

少し慌て調子に言つた後で、尾裂狐は消えるように山へ駆けていった。

その様子を見ていた浮世はふと、尾裂狐の言つた事にあつたおかしな所に気がついた。

「あれ?今尾裂狐が俺の事……お前さんって言つてた気がするな?

なんでお主じゃないんだ?うゝん……まあいいか」

少しだけ考えたものの、浮世は深く考えずに、桶らしき物を持ってそのまま川へ行つた。

家の近くで遊んでいる子供四人に見送られながら――



尾裂狐は一人、山を駆け抜けながら、自分の中で渦巻いている感情に困惑していた。

「なんでじゃ・・・・・・・・昨日の浮世をボツチの後ろからこっそり見てから・・・・・・・・あいつの事がどうしても気になる・・・・・・・・どうしてじゃ・・・・・・・・」

尾裂狐はひたすらに走りながら、自分の胸をぎゅっと掴んでいた。

そして尾裂狐は、今自分に起きている異変に――――率直な言葉  
葉を述べた。



「どうしてこんなに、わたちの胸が痛むのじゃ？」



## 第十九話 子供の遊び 大人の話（後書き）

後書き

やれやれ、気がつけば子供だらけじゃないか」（・ゝ・・・） ㌞

大人はわずかに二人だけ。これは由々しき自体だね本当（・・・ω・  
・）

え？もつと由々しき事態が発生してる？

え？無差別にフラグを立てるんじゃないやねえ？

イヤイヤ、アレハタダムネヲイタメテルダケデスヨ。

え？だったら浮世の活躍をどうして気にしたかつて？

ナカナカミラレナイコウケイニカンドウシタダケデスヨ。

とにかく！！前回のあれはとりあえず置いて、今回はほのぼの  
させた訳ですたい！！

次回は・・・・・・馬鹿が流れてきます。

では、記念すべき第二十話をお楽しみに（\*^|^\*）

## 第二十話 とりあえず流れてきた（前書き）

ありのままあらずじ

浮世が着せられた服に若干の不安を覚えたが、

幻想郷だからとりあえず納得。

朝日が昇ってきた頃に子供たち三人にボツチも加わり、

暇になった浮世と尾裂狐は食料を探しに行く事になった。

尾裂狐には何かしらの変化が訪れていた。

ではどぞ。

## 第二十話 とりあえず流れてきた

昨日の夜通ったであろう道を行って、浮世は川へと向かっていた。

昨日起きた事を感慨深く思いながら、ただただ歩みを進める。

さほど距離がある訳ではない為、少しもしない内に川岸が見える場所に着いた。

着いた浮世が真っ先に考えたのは、どうやって捕まえるか。である。

尾裂狐から無理難題に近い形で送り出された為に、

このままでは道具もなしに取らねばならないからだ。

しかし、手元にあるのは少し大きめの桶のみである。

「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・・・これで魚なんて取れる訳ないだ  
ろ・・・・・・・・・・」

軽く途方に暮れる浮世は、とりあえず川のすぐ近くまで行ってから  
座り込み、

ぼーっと川の方を見つめ始めた。

澄み切った綺麗な川は、色々な物が流れてきている。

木の葉、大きささまざまな魚、名称の曖昧なよくわからない虫。

しかし、そんなものの中で、一際異彩を放つ物が浮世の前を流れてきたのだ。

それは綺麗で長い黒髪をさせて、色鮮やかな櫛を挿していたが、

頭のとっぺんには大きなたんこぶが出来ている女の子だったのだ。

体の幼さに合わない、ぶつかぶかの十二単を身に着けたその子は、

ピクリともせずに浮世の前を流れていった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

軽く思考が停止した浮世だが、冷静になって状況を分析し始めた。

「い、今あった事をありのままに伝えるぜ！！

俺が魚をどうやって捕ろうかと思って川を見つめてたら、

大げさな和服を着た女の子が流れてきたんだぜ！！

何を言ってるのかわからないだろうが、俺も・・・・・・・・って言うてる場合じゃない！！」

どこに向けているのかもわからないポーズをしてありのままに伝え  
た後、

すぐに川の中に入り込み、流されそうになった女の子をどうにか助  
け上げた。

「ふう・・・・・・・・間に合ってよかった・・・・・・・・」

あんな事しなかったら、慌てる必要もなく助けられた気しかない  
が、

まあとりあえず浮世は、流されそうになった女の子を助けたのだ。

浮世はまず頭のたんこぶをじっと見てから、顔の方に視線を移した。

さすがにすやすやという顔はしておらず、むしろダメージの残った  
感じの顔である。

「さて、どうすればいいかな・・・・・・・・とりあえず、横にして  
おくか」

抱え上げたままでは仕方ないので、浮世はその子を手頃な所に適当  
に寝かせた。

寝かせた後で、もう一度その子の体等を見渡した。

その容姿に似合わない、大きな十二単は、何の意味があるのかと気になりながら、

まず一番に気になる事があった。

この子……なんで川を流れてきたんだ？

普通に考えるのならば、頭のたんこぶから察するに、

恐らくは何かしらのショックで頭を打ち、

そのまま気絶して川を流れてきた——と考えるが妥当だろう。

浮世はどうしようか考えた。起こすべきか、それとも放置すべきか。

と考える間もなく、その子は目をぱちくりと開けて、起き上がってきたのだ。

「ううゝむ……痛いのが……なぜこんなに痛いのか……そうじゃー！」

あやつに勝負して負けたからじゃー！むむうー！あやつめー！  
今度会ったらわらわが痛い目に合わせてやるぞー！」

起き上がって早々、たんこぶを摩ったかと思うと、こんな独り言を飛ばしてきた。

これには浮世でならずとも、びっくりするのは普通である。

言葉を失っている浮世の存在に、彼女はようやくと気づいたようである。

「むう？お兄さんは誰じゃ？というかここはどこじゃ？」

少女の問答に対し、浮世は慌てながらもどうにか応えた。

「あ、ああ・・・俺の名前は、人橋 浮世だ  
で、ここは一応妖怪の山の川だけ・・・」

「ふうむ、なるほど  
どうやらわらは川に流されてここまで来たのか」

「まあ、リアルで川から流れてきたんだけど・・・」

「む？それじゃとわらはは、お兄さんに助けてもらったのか？」

「まあ、そうなるかな・・・」

浮世のその一言に、少女は素直な感謝の姿勢を見せた。

「ありがとうじゃ

このまま流されとつたら、また人里辺りにまで流されとつたかも

しれんのじゃ」

「またって・・・こんな事が度々あるのか、君は？」

「もう何度目か数え切れんのじゃ」

試しにという感じで指折りしているが、さっぱりという顔を浮かべた。

ある程度話をしたところで、浮世はある事を聞くのを思い出していた。

「そう言えば、君の名前は何だい？」

「そうじゃ、名乗るのが遅れてしもうた

わらわの名は——」

と言いかけたところに、ダイダラボッチが一人、浮世の方に手を振り、声をかけてきた。

どうやら遊びの輪を外れて、浮世の方に来たみたいである。

「浮世、魚さん取れそうなの？」

ダイダラボッチが浮世の元に駆けつけようとする前に、

ダイダラボッチが浮世の近くにいる少女の存在に気がついた。

「あれ？君つてもしかして——おこし峰越　八蛇ちゃんじゃないの？」

ダイダラボッチの問答に対して、

峰越　八蛇はゆっくりとダイダラボッチの方に振り向いた。

なぜかその顔は、かなりの怒りのオーラに包み込まれていた。

「そうじゃあ………」

「やっぱりそうだ!!」

八蛇ちゃんつてば、また川に流されてたの？」

「そうじゃよお………」

二人のやり取りの間に、浮世が割って入ってきた。

「ボツチって、この子と知り合いなのか？」

「そーだよ

八蛇ちゃんね、喧嘩してよく川に流されちゃう子なの」

ダイダラボッチの口ぶりを察するに、

どうやらこの子はしょっちゅう喧嘩をしては負けを重ねて、

川に流されていく子のようにである。

浮世は川を流されていた事に納得できたものの、

ある事にだけはどうしても納得がいかなかった。

それは、今の八蛇が見せている——怒りの原因である。

見たところ先ほどまではこんな怒りなど見せていなかったのだが、

ダイダラボッチが顔を見せた瞬間に、突如として見せてきたのである。

浮世はこれまでダイダラボッチと一緒にいたからわかるが、

ダイダラボッチは誰かに恨まれるような事は絶対にしない。

感謝こそされても、恨まれるような事はしないはずだと思ったのだ。

だが、目の前の少女は——恨みとしか思えない怒りを出していたのだ。

「今日こそ……積年の恨みを晴らしてやるのじゃ!!」

覚悟するのじゃ、ダイダラボッチい!!」

八蛇はダイダラボッチを指差した後に、程よい距離を取ってきた。

そして、己の手元で丸い塊のような物を生成し始めたのだ。

生成される過程で、既に結構な勢いの風が周りに吹いていた。

「ぼ、ボッチ!!お前あんな小さい子に何したんだよ!？」

浮世の当然の問答に、ダイダラボッチは「さあ？」というリアクションを取ってきた。

「何でか知らないけど、あの子って私と会ったいつも怒ってるの」

「だ、だから、何で怒ってるのか心当たりはないのか!？」

「うゝん・・・わかんない」

もはやポカーンとなって、呆れるしかない浮世。

そうこうしている内に、辺りに吹いていた風は止み、

八蛇は手元に綺麗な光沢を放つ球体を完成させていた。

「ふっふっふ！！わらわがお前を倒す為に考えた技じゃ！！  
とくと味わうがいいのじゃ！！」

それを頭上に掲げて、ダイダラボッチの方に思いっきり投げ込んだ。

「喰らうのじゃあ！！」

球体はすごい勢いで、ダイダラボッチの方に飛んでいった――  
――かと思われた。

球体は八蛇の手元から1mもしないぐらいの距離で、ただ地面に落ちた。

そして球体からは、それらしい物が放たれたのだが、  
誰もいないところでただ風を巻き上げているだけであった。

ちなみに八蛇とダイダラボッチとの距離はおおよそ10m。

起きている風は八蛇にすら届いていない所を見ると、  
これでは届いている距離には到底及ばない。

「な、なぜじゃあ！？なぜ届かんのじゃあ！！」

八蛇が一人で嘆いている間に、ダイドラボッチが浮世に説明をしてきた。

「八蛇ちゃんね、ああやっていつも失敗ばかりしちゃうのだからいつも喧嘩に負けちゃうの」

「ああ、なるほどね……………」

喧嘩に負けている原因はよくわかった。

では残された疑問、ダイドラボッチを嫌っている原因だが、

この疑問もしばらくしない内に浮世にはわかった。

「……………やっぱり、八蛇ちゃんって可愛いね……………」

「

ダイドラボッチが困った様子の八蛇に走り出したかと思うと、

その勢いのまま、八蛇に対して飛び込んできたのだ。

「八蛇ちゃああん!!」

「あわわわわわあ！！？」

八蛇は慌てた様子で避けようとしたが、時既に遅し。

ダイダラボッチの両腕ががちりと八蛇の体を捕まえていた。

「は、放すのじゃ！！」

八蛇は必死に抵抗するが、ダイダラボッチはまったくもって放そうとしなかった。

歓喜に溢れた顔を浮かべて、すりすり八蛇の顔に自分の顔を当てていた。

「うーん、やっぱり八蛇ちゃんの肌っていいよねえ  
それにかうわいいし、至れり尽くせりだよお」

「や、止めるのじゃ！！頼むから止めるのじゃああああ！！！！」

その様子を見ていた浮世は、八蛇がダイダラボッチを嫌いになる理由がよくわかった。

会う度にこんな事されたら、そりゃ嫌いになる訳だ。

改めて、ダイダラボッチのフリーダムな性格を再確認した浮世であった。



## 第二十話 とりあえず流れてきた（後書き）

後書き

我が恩人、黒詩鳥さんの出してくださったキャラクター。

峰越 八蛇ちゃん登・場！！＼（＞ｄ＜）／

これでもう子供四人目・・・君たちはそんなに子供が好きかね！？  
（、ー、、）

次出してくれる妖怪はなるべく男性希望です・・・老人キャラとか  
？（・、<sup>3</sup>、・）

まあ、出してくれるだけありがたいと受け取りますので、自由にど  
うぞ（^ー^）

後、今回からは妖怪のプロフィールを出すのをあえて止めにします。

物語が進むにつれてわかってもらうようにしますだ。

一応二十話記念って奴でもしょうか考えましたが、

わしのペースだったら祝ってもきりが無いと判断しましただ。

では、第二十一話をお楽しみに（\*^ー^\*）

## 第二十一話 雷の刀 巨人の怒り（前書き）

ありのままあらずじ

浮世はしぶしぶと川に魚を取りに行くと、

八蛇って子が流れてきて、八蛇とダイダラボッチが軽く喧嘩しそうになったが、

結果的にはダイダラボッチがすりすりした。

ではどぞ。

## 第二十一話 雷の刀 巨人の怒り

しばらくの間、ダイダラボッチは嬉々として、八蛇はただ悲鳴を上げて、

ずっと同じやり取りを続けていた。

「うーん、蛇の鱗って本当に落ち着くねー  
ずっとこうしていたいよ」

「わ、わらわを何だと思っておるのじゃあ！！いい加減にせんかあ  
！！」

ダイダラボッチが八蛇に抱きつき、延々と顔をすりすりさせている間に、

浮世がそろそろというタイミングで、ダイダラボッチの肩を掴んできた。

「そこら辺にしとけよ  
八蛇ちゃん明らかに嫌がってるだろ？」

しかし、浮世のストップをかける声に、ダイダラボッチは明らかな

拒否を示してきた。

「やーだー」

もう少しぐらいしてもいいじゃない」

ダイダラボッチのこの態度には、浮世も「はあ」とため息を吐いた後で、

改まった様子になってガツンと言ってきた。

「あのな、そんないたいけな子に対して、よくそんな大人気ない事が出来るよな？」

ボッチももういい年してるんだろ？だから止めてあ

――

と続けようとした浮世の言葉も、目の前の存在の前に消えていった。

そう、ダイダラボッチが怒りをあらわにして――自身の背後から、

ぬうやかあと戦った（遊んだ）時のあの巨大な手を、地面から形成していたのだ。

それは土や植物らしき物がこべりつき、どこか古い感じのする物だった。

こんな物がいきなり目の前に現れれば、誰だってびっくりくものである。

浮世がいやゝな汗をだらだらと流して、

ダイダラボッチにどうにか話しかけようとした。

「あ、あの……ダイダラボッチさま？」

今更丁寧な口調を使つても、怒れる鬼神おこめを止めれる訳がない。

「うきよ……いい年してるって、私が年寄りだって言  
いたいのか……?」

その巨大な手が、グーの形になったかと思うと、浮世に対して思いっきり振り下ろされた。

「ちよちよちよちよちよちよちよおおお!!!!!!?」

今まさにダイダラボッチの鉄槌が下されそうになり、浮世はびびつてへたりこんだ。

その時であつた。

ダイダラボッチが振り下ろそうとした鉄槌に、鋭い切断音がしてき  
たのだ。

切られた後の線がいくつも浮かび上がった瞬間に、その巨大な手は、  
盛大な音を立てて、ばらばらに切り裂かれたのだ。

「！！！」

突然の出来事に、驚愕し、固まるダイダラボッチ。

ちなみにばらばらになった手は、もちろん浮世の上に落下していっ  
た。

「あばばばああああ・・・・・・」

結果的には、埋もれる形になってしまった浮世。

悲しい断末魔と共に、土くれとなった手の中に沈んでいった。

「・・・・・・」

浮世の有様に無言になるしかないダイダラボッチと八蛇。

少しもしない内に、その場にスタッと軽い音をさせて、誰かが降り立ってきた。

「――何をしようとしたのですか？あなた方・・・」

異様な殺気を放ち、声を放ってきた。

ダイダラボッチと八蛇が声のする方に振り向くと、そこにいたのは

藍色の綺麗な長髪をなびかせて、蒼い羽織りに黒色の袴をさせた女性がいた。

腰には一目でわかる刀を携えており、頭には髪に隠れて見えない程度の小さな角が、

三本ほど生えているのが見えた。

しかしそれ以上に、彼女の凍りついたような無表情の顔が、

ダイダラボッチと八蛇には強い印象が残っていた。

突然現れた異形なる存在に皆が意識を奪われている内に、

突き刺すような言葉を発してきた。

「これ以上の無礼は、私が許しませんよ？」

腰に帯刀した刀の唾から、刀身を少し出して光らせた。

心なしか、その刀身の光は稲光に見えない事もなかった。

その者の有無を言わせない態度と殺気が、八蛇から言葉を奪おうとしていたが、

ダイダラボッチはまったく意に帰さずに、その者に率直な言葉を述べた。

「ええ？無礼つて何の事？」

「とぼけた事を仰りますね・・・そこに埋もれている人間に、あなたが何をしようとしたか・・・知らないとは言わせませんよ」

あまりに大げさな殺意をはらんだ言葉に、ダイダラボッチはあくまでマイペースである。

「ええゝ？だつてえ、悪いのは浮世の方なんだよ？」

「え？・・・」

ダイダラボッチの発言によって、その者はようやく状況を呑み込めたようである。

そう、誰が善で、誰が悪であるかを――

その瞬間に、さっきの殺気だった態度からは一変して、落ち着き払った態度になったのだ。

「し、失礼しました！！そう言う事だとは露知らず・・・お恥ずかしい・・・」

急にしおらしくなってしまったので、さしものダイダラボッチも調子が狂うものである。

それでもマイペースを貫くがダイダラボッチの能力<sup>スキル</sup>。

「うん・・・まあ、とりあえず誤解は誰でもあるって事でそんなに気にしなくてもいいと思うよ」

ダイダラボッチがそつとその者に手を差し伸べ、友好の意思を示めたのだ。

その者は「え？」と若干戸惑った様子になったが、

少しして照れた様子でダイダラボッチの差し伸べた手を握ったのだ。

「はい、これで仲直りでいい？」

「はい・・・」

ダイダラボッチののんきな声に、その者は恐縮した様子で応対した。

握手を解いたところで、二人は今更な事を思い出し、行ったのだ。

「あ、そう言えば、名乗るのが遅れてたね

私の名前は、ダイダラボッチ

ボッチって呼んでくれたらいいよ」

「わ、私の名前は・・・如月きさらぎ 千鳥ちづです」

ぺこぺことした調子で、如月 千鳥はダイダラボッチに挨拶した。

かしこまった態度に「うーん」と思ったダイダラボッチは、

ちよつとだけ改まった様子で、声を掛けたのだ。

「別にそんな礼儀正しくしなくてもいいよ」

そんなんじゃ、千鳥ちゃんが疲れるでしょ？」

ダイダラボッチの心遣いにも、千鳥はあくまでかしこまった態度である

ついでに付け加えると、かなり及び腰でもある。

「すみません・・・何分私はこういう性分ですので・・・」

こんな様子を見せられたダイダラボッチ。

その瞬間に、ダイダラボッチのスイッチ的な物が入れられる音がした。心の中で。

「駄目駄目、そんな性分じゃ疲れちゃうよ？私を見てみなよ、このリラックスしたテンションをさ、そんなかしこまった調子じゃ、コミュニケーションが取り辛いよ？」

ダイダラボッチの言い分に、千鳥は自身の主張を通すのみである。

「いえいえ、ボッチさんはそれでよろしいのかもしれませんが、私がそういう態度でいる事は正直難しいです  
今までずっと厳しい環境で育てられてきましたから、自然とこうなるのです」

ダイダラボッチ、遠まわしに馬鹿にされていると判断して、少し力チンとなる。

「へ、へえ……でもそれって、社交性とかないって感じがするけど？」

しかし千鳥はズバツと返す。

「いえいえ、敬語で応対し、礼儀を持って応対すれば、おのずと正しい道が開かれます

ボッチさんも少しは教養を持つべきかと？」

今の一言で、ダイダラボッチのカチンが少し強くなる。

「あはは……私は別に？」

今までずっとこうだったし、これでいいと思ってるもん……」

千鳥、なおもダイダラボッチに言葉の斬撃を入れる。

「では、私もずっとこうでしたので、このままでもよろしいでしょう？」

相手の個性を自身の意見で塗りつぶそうとするのは、エゴとも言えますよ？」

今の一言によって、ダイダラボッチのカチンがとうとうカチーンに

なった。

「……あのねえ、

私は千鳥ちゃんの事を思っ『思っ』てくださるのなら、余計なお世話です』……」

はい、切れました。ダイダラボッチが切れました。

完全に逆切れですけど、ものの見事にカッチーンときたようです。

「もういいよ……久々に暴れてもいいかなあ!」

普段は温厚な人ほど、切れば怖い。

そんな言葉を体現してると言わんばかりに、ダイダラボッチの怒りが周囲を覆った。

近くにいる八蛇は怯えていたが、対峙している千鳥はむしろ堂々としていた。

まるでダイダラボッチの怒りを――正面から受け止めたかのように。

少しもしない内に、額に切れマークを浮かべたダイダラボッチが、背後から土くれで形成した巨大な一本の手を土から伸ばしていた。

その手が向いている先はもちろん——千鳥である。

危険を感じ取った千鳥は、自身の刀の刀身をチラッと見せてきた。

もちろんこれは、すぐにでも抜けるように構えている証拠である。

もはや二人の間に、余計な言葉は不要である。

そう、二人が言すべき言葉は——ただ一つ。

「弾幕ごっこをしましょうか!」



打ち合わせた訳ではない。二人は意思を揃えて、同時に――  
――そう言ったのだ。

今ここに、仁義なき戦いが――幕を開ける――

## 第二十一話 雷の刀 巨人の怒り（後書き）

後書き

あつりいゝ？戦わす予定なんて無かったのに・・・なぜだあ！？＼  
（＞Ｄ＜）／

とりあえず、銀さんの応募キャラである如月 千鳥が登場！！d（。  
ゝω・、）

多分銀さんのイメージと全然違っだろうなあゝ・・・引っ込み思案  
？何それ美味しいの？

今まで堅物キャラがいなかったので、ちょいとやってみただ！！  
その結果、ダイダラボッチが切れると・・・最近こいつがチルノに  
見える・・・（、Ｄ、）

うちのキャラは総じて馬鹿ばかりです。どげんかせんといかん！  
！（、・ω・、）

おつとと、最近サボりがちだったので、他の連載も頑張らないと・・・  
・φ（・ω・、）

では、第二十二話をお楽しみに（＊＾―＾＊）

P S 、主人公埋葬中・・・

## 第二十二話 水を差す鬼 奪われた思い（前書き）

ありのままあらずじ

浮世の失言によって、ダイダラボッチの鉄槌が下されそうになったが、

とりあえず浮世はまあ無事ではすまず生き埋めに。

その後でダイダラボッチと千鳥が戦いになった。

ではござ。

## 第二十二話 水を差す鬼 奪われた思い

「それじゃあ、一気に行くよー!!」

ダイダラボッチの背後にあった巨大な手が、その手を広げて千鳥に襲い掛かってきた。

その様子はさながら、獲物を捕らえんとする鷹のように、ただ真っ直ぐに来た。

千鳥はそれを予期していたと言わんばかりに、空へと跳躍してその手をやり過ごした。

手は地面に激突し、すさまじい轟音と軽い地震を起こして、ボロボロと崩れ去っていった。

「まだまだあー!!」

ダイダラボッチは先ほどの手を地面から二本ほど轟音と共に生やし、空に逃げた千鳥をその手で潰さんと二本の手が拍手でもするように如月を叩き潰した。

二つの手が拍手した音が響いた後に、その両手に無数の亀裂が走っ

て行く。

亀裂から光が出てきたかと思うと、手はその形を崩し、

豪快な音と共にまたもや崩れ去った。

そこから現れたのは、刀のその手に構えた千鳥の姿であった。

不思議な事に、千鳥の身体には一切の傷はなく、綺麗な姿を保っていた。

そして千鳥はそのまま、ダイダラボッチに対して切りかかるように降下していった。

「切る!!」

ただ一言そう言い放ち、ダイダラボッチに高速の一閃を放つ。

その一閃の軌跡を描いた斬撃の弾幕をダイダラボッチの向けて飛ばした。

ダイダラボッチは一切慌てる事もなく、手をかざしてその弾幕を蹴散らすように、

手を広げたような形の巨大な弾幕を飛ばした。

その弾幕は勢いを殺される事もなく、真っ直ぐに千鳥へと向かっていった。

「芸がありませんね!!」

千鳥は飛んできた弾幕を即座に両断し、

いよいよダイダラボッチにその刀が届くと思える距離にまだ降下した

「はああ!!」

ダイダラボッチに向けて、上から叩き切るような剣戟を放つ。

その剣戟はダイダラボッチの頭を切り裂こうとしたが、刃はダイダラボッチ自らが、

片手で鷲づかみにして、ガツチリと受け止めてしまったのだ。

「何!？」

これには千鳥も驚く他にない。

千鳥の刀はぴくりともせず、ダイダラボッチにつかまれたまま、

千鳥は宙ぶらりんに固まってしまった。

「よいしょつとお!!」

ダイダラボッチは掴んだ刃ごと、千鳥を思いっきり森の方へと投げ飛ばした。

千鳥は刀ごと投げ飛ばされ、無数の木々をぶち破った後、

十数本ほどの木でようやく受け止められた。

「ははは!!よく飛ぶねえ!!」

遠くに飛んでいった千鳥を眺め、高笑いを浮かべるダイダラボッチ。

一方千鳥は、目の前の敵が——先ほど楽天的にしていた者とは別人だと思っていた。

これほどの力を、ただ笑って振り回す。

ほんの少しの良心があるなら、そんな事を平然と出来るとは思えない。

当のダイダラボッチであるが、こちらはあくまでこれ——遊びと判断していた。

だからこそ、罪悪感も何もない、ただ子供のように、楽しんでいただけであった。

ダイダラボッチと千鳥との間には、

戦いにおける価値観に置いて、決定的な違いが出ていたようである。

否、この際価値観など無価値に等しいだろう。

千鳥は、ダイダラボッチの力に押されている。ただそれだけの話である。

戦いに高潔な精神を求める千鳥は、

今のダイダラボッチの態度が―――あまりにも気に食わなかった。

神聖なる戦いを軽んじているあなたが―――私に勝てる道理などありません！！

千鳥は態勢を立て直し、刀を一度鞘に納めた後の―――己の闘気を高めた。

そう、彼女は放とうとしたのだ。己が賭ける―――至高にして最高の一撃を。

高められた闘気は全て、一振りの刀の元へと集っていった。

目視できるほどに高められた闘気は、青い光をまとい、鞘に納まる刀に宿った。

そして振りかざされたのだ――蒼き刀の一振りが。

「納符・  
・  
・  
・  
・  
・  
威風!!」

彼女の放った一閃から、無数に散らばる弾幕が――

ダイダラボッチ目掛けて飛び交った。

大きさこそビー玉ほどでも、その速度、その数は驚異的なものである。

「――！」

不意に飛んできた圧倒量の弾幕を前にして、

ダイダラボッチは巨大な手を生やして防ごうと試みた。

しかし弾幕の力は凄まじく、生やした手はいとも容易く弾幕を通し、結果的にはダイダラボッチに無数の弾幕が襲い掛かった。

「あわあ!!」

弾幕はダイダラボッチの身体をかすめるか、もしくは直撃し、

ダイダラボッチの身体は見る見るうちにボロボロになっていった。

防いだ手も同時に崩壊し、今のダイダラボッチは文字通りいい的であつた。

その的を、千鳥はもちろん逃すはずがなかった。

「もう一発!!」

千鳥は闘気の宿る蒼き刀を再び振りぬき、またもや無数の弾幕を放つていった。

ボロボロになったダイダラボッチはその刹那——最悪の選択を選ぼうとしていた。

こうなったら——私本来の姿で、相手してあげようじゃない

い！！

ダイダラボッチがその選択をしようとした瞬間——戦場に鶴の一声が鳴った。

「おいおい、何をする気だい？ダイダラボッチよ」

その声がした瞬間に、千鳥の放った弾幕に向けて、小さな弾が一つ飛んできた。

それは花火のようにヒュルルと飛んできた後に、周囲の物を豪快に吸い込み始めた。

周囲の物とは弾幕も当然含まれており、

千鳥の弾幕は全て、その物体に吸い込まれていった。

その物体が弾幕を全て吸い終わったかと思うと、

物体はそのまましばらくのように消え去ってしまった。

「????」

一連の事に、何一つ理解できないダイダラボッチと千鳥。

その二人の間の丁度真ん中辺りのところに、誰かが空から降り立ってきたのだ。

地面に若干めり込むほどの衝撃と共に降り立ってきたその者は、

足に來た痺れを全身に伝わせて、少しだけその場に固まった。

その後で、その者はゆっくりと――ダイダラボッチの方に振り向いたのだ。

「やれやれ・・・久々に会えたと思ったら、なんて出会い方をさせるんだよ、お前さんは？」

相変わらず、加減って文字を知らないようだねえ、ダイダラボッチ」

頭を掻き、あきれた様子でダイダラボッチに話し掛けるその者、頭の左右には長くねじれた見事な角を生やし、背丈は小さめで、手に鎖をはめ、

服は長めのスカートに袖の破れたドレスと、随分とラフな感じである。

一言で言うなら、幼女が鬼になった。とでも言えばよいであろうか。とりあえず彼女は、そのままフラフラと若干危ない足取りで、

ダイダラボッチの方へと歩いていった。

ダイダラボッチに触れると思える距離ぐらいで、改まった調子になってきた。

「ま、その方があんならしいよ！！久しぶりだね、ボッチ！！」

さっきまでと違い、温和かつ友人に向けるような笑顔で挨拶をした。ダイダラボッチも若干かがんで、その者に背丈を合わせるように、笑顔で挨拶を返したのだ。

「そうね、何十年ぶりぐらいでしょうねえ、萃香」

ダイダラボッチは懐かしそうな顔で、彼女の名前を呼んだ。

そう、この幼女のような鬼は、あの伊吹萃香であつたのだ。

先ほどの弾幕を吸い込んだ物体を投げ込んだのも、

萃香の能力が生み出した弾幕であつたのだ。

久方の出会いに懐かしむ萃香は、駆けつけにと言わんばかりに、

腰に下げていた青色の瓢箪を取り出してきた。

「それじゃ、まずは一杯呑むかい？」

出会って早々酒を薦めるとんでもない友人に、ダイダラボッチも多少呆れ気味である。

「もう、あなたもちつとも変わらないわね、萃香」

「はははは！百年ちよつとで変わるほどあたしは安くないからねえ！――」

酔っているせいなのか、友人に出会えた事が嬉しいのか、

萃香はテンションの高い笑い声を出していた。

互いに何も変わっていない者同士の、たわいのないやり取り。

それは人間の寿命から計るにはあまりにも長い年月であるだろう。

二人が再会に感慨を受けている間に、

身体に痛みを残した千鳥がゆっくりと二人の元に歩いてきたのだ。

その手には、闘気は失せたが鈍い光を放つ刀を握り締めたままで――

「その者……神聖な戦いに水を差すとは……どういった見ですか？」

その無礼な態度……今ここで叩きなおしてあげましょうか？」

殺気、ただ強烈な殺気を、のん気そうな萃香に向けられたのだ。

これに萃香は怯む事もしなかった。否、むしろ狂喜でもしているかのような様子だった。

そう、その笑顔がまるで――狂気による笑顔のように。

「!？」

危険を感じ取った千鳥は、即座に萃香から距離を取った。

その一瞬で、千鳥は全て理解したのだ。

今日の前にいる存在が———どれほど強大かを。

それがわかった瞬間に、千鳥は身体が身震いを起こしていた。

わかっていなかったとはいえ、自分よりも格上に挑もうとしていた事を、

千鳥は心中で怯えたのだ。

もし、あのまま自分が無謀にも挑んでいたらどうなっていたか。

想像するに難しいことはない。恐らくは一瞬で潰されていただろう。

それは比喻でも何でもなし。漫然たる事実になるだろう。

そして同時に、千鳥はその危険が———先ほど自分と戦っていた存在にもあると、

今更になって再認識したのだ。

千鳥はその瞬間に後悔した。勝てない戦いをしていた事に。

その次に千鳥は安堵した。勝てない戦いを仲裁された事に。

その次に千鳥は悔いた。己の力がまだまだと言う事に。

最後に千鳥は思った。今の私はどうすればよいのかと言う事に。

すっかり膝を折り、意気消沈となった千鳥の元に、萃香がゆっくりと駆け寄ってきたのだ。

もはや逃げようとしなかった千鳥に、萃香はにこやかな笑顔を向けた。

「とりあえず、一杯呑むかい？」

その場に座り込み、瓢箪を千鳥に突き出し、薦めてきた。

千鳥は萃香の突然の行動に戸惑ったものの、少しして無言でそれを受け取り、

それはもう豪快に瓢箪の酒を飲んだのだ。

焼け付くように喉を通り過ぎる鬼の酒。千鳥も鬼の端くれである以上、

酒には滅法強かったらしく、大した呑みっぷりを見せてきた。

「プハア」

瓢箪から口を離し、酒を呑んだ後のあの息を吐いて、頬を赤に染めた。

まあ鬼といえども、酒を口にすれば大なり小なりへべレケになるものである。

萃香は千鳥の呑みっぷりがいたく気に入ったらしく、

機嫌よさそうに千鳥の顔を見つめてきたのだ。

「はっはっは！！あんたよくみりやあたしと同じ鬼じゃないか！！いいねえ、今日は古い友人にも出会えたし、同属にも出会えた！！まったくもって、めでたい日だねえ！！」

両手を広げて、歓喜の声を上げる。

自分の嬉しさを体現するのに、それが一番わかりやすかったと思ったのだろう。

ダイドラボッチと千鳥は、とりあえず乱入してきた鬼と共に、

ただただ楽しそうな様子を見せていた――



一方、尾裂狐はどこかの山の方にて、色とりどりの山の幸を取って行った。

思った以上に取れた事に喜んでいたのか、うきうきとした様子で歩いていたのだ。

「ほっほう、ここはいい場所じゃのう  
どうやらわっちはついているようじゃ」るるるるゝんつとゝ

足取りの軽い尾裂狐。手元に余るほど取れたので、そろそろという所で、

尾裂狐はそのまま山を下り、帰路に着こうとしていた。

「これだけ取れば、浮世の奴もわっちに頭が上がらんじゃろう  
まさかここまで取れると思わなかったからのう  
ふふふ、浮世の喜ぶ顔が目になぁあり？今わっちはぁ何を  
言っておるのじゃ？」

尾裂狐はその瞬間に、自分で自分の言った事に疑問を抱いていた。

「なんでじゃ・・・なんで浮世の名ばかり言っているのじゃ・・・  
喜ぶのはむしろ、ボツチ達の方にきまっとるじゃろ・・・  
だのに今のわっちは、浮世の名ばかり口にしとった・・・」

尾裂狐はその疑問に、自分が行っていた事を思い返してみた。

そう、尾裂狐はこの辺りで山の幸を取る過程において、何度も何度も口にしていたのだ。

浮世の名を——意味もなく——口にしていたのだ。

否、その発言に意味など最初からありはしなかったはずである。

だが繰り返し反芻していたという事実が、それに意味を見出してしまったのである。

今の彼女の心は——彼の事で埋まり、潰れそうになっていた。

尾裂狐が胸を抱えて、思わず持っていた山の幸を落とし、地面に散らばらせてしまった。

尾裂狐が慌ててそれらを拾っているのに、

小さな木の実が一つだけ、どうしてもどこにも見当たらなかったのである。

尾裂狐は数え間違いなどするような者ではない。むしろ数字関係には滅法強い。

だからこそ、たった一つだけない木の実がどこなのか、気になって仕方なかったのである。

しばらく探し待っている内に、その実がどこにあるのかが――

はつきりとわかったのだ。

そう、その木の実は――通りすがった誰かが拾い上げていたのである。

尾裂狐がその誰かに気づいた時に、見慣れた木の実を持っていた為、やっと見つけたという様子でその誰かに駆け寄った。

「おお、それじゃそれじゃ

お主、それをここで拾ったのか？」

その誰かは、重々しい口を開けて、返事を返してきた。

「そうだよ・・・」

「そうかそうか

それじゃ、それをわっちに渡してくれんか」

尾裂狐がそれを手渡すようにアピールしたのだが、

その誰かは聞く耳を持つとしなかった。

むしろ、敵対意思でもあるかのような態度で、尾裂狐を睨んできたのである。

「あのう・・・どうしたんじゃ？」

尾裂狐が様子のおかしさを問おうとしたその瞬間に、

その誰かの手が、尾裂狐の首を掴んできたのだ。

「!!!？」

あまりにも突然の出来事に、反応する間もなく、

尾裂狐は首を持たれたまま宙吊りの状態になった。

「あぐ・・・は、はなさんか・・・はなさんかあ・・・」

尾裂狐は両の手を使って、首を掴む手をどけようとするが、

あまりの力の強さになすべがなかった。

首を絞める力が更に増していき、尾裂狐の苦しみが更に増していく。  
ギリギリと鈍い音がしてくるうちに、その誰かが首を絞めながら、  
尾裂狐に尋ねてきたのだ。

「貴様・・・愛に悩んでいるな？」

尾裂狐はその質問にまともな解答を出せる状態ではなかった。

事実今の自分は、呼吸もままならない状態であるのだから。

しかし、言葉にしくなくても、その誰かには手に取るようにわかって  
いたようである。

「そうかそうか、まさか人間に惚れているとはな・・・  
それも悪くはないだろう、愛と言う者は種族を超えても良い事だ」

「ち・・・ちが・・・わっちは・・・浮世の事なぞ・・・」

尾裂狐が必死に否定しようとしたその発言は、

明らかに自分への肯定にしかなくていなかった。

「そうかそうか、惚れた者の名は浮世か・・・  
よいぞお前、私の傀儡として・・・非常に相応しい」

その誰かは首を締め上げていた手から真っ黒なオーラを出し、  
それが尾裂狐の体中を包み込むように駆け巡っていった。

「あ・・・あ・・・あ・・・あ・・・」

それと同時に、尾裂狐の視界がどんどん真っ暗になっていく。  
ただただ真っ暗になっていく。

尾裂狐は何も見えなくなる。何も掴めなくなる。何も出来なくなる。  
尾裂狐の身体はもはやその自由を完全に奪われた。五感も奪われた。

たった一つ残ったのは、己の悔やむ心だけであった。

彼女がその時に出した言葉は、ただ一つである。



助けて  
・  
・  
・  
・  
浮世  
・  
・  
・  
・  
・  
・

その願いは虚しく、尾裂狐はそのまま気を失ってしまった。

その誰かは、気を失った尾裂狐を担ぎ、その場を後にしていった。

不気味な含み笑いをさせながら――。

## 第二十二話 水を差す鬼 奪われた思い（後書き）

後書き

ふう、急ピッチなので少々疲れましたが・・・（´Д`）

今回は歴代通して一番長くなりましたねえ。

とりあえず、皆様から不満の声が多々上がってきた為、

その不満を解消させる展開にしましただ！！

山場！！東方キャラ！！そんなもって急展開！！

ちなみにずっと前から考えてたネタですので、急にやった訳じゃありませんよ？

書き出したのはいきなりですけどね。 （^―^）

え？ちょっと強引過ぎないかって？

今までずっとプロローグな有様だったんですから、まあ勘弁してくださいな。

物語は、いつだって急展開がありえる物！！

では、さすがに遅くなると思う第二十三話をお楽しみに（\*^―^\*）

P S 主人公埋葬中。そろそろ蘇生してくるかも？

第二十三話 博霊の巫女 見参（前書き）

ありのままあらずじ

ダイダラボッチと千鳥が弾幕勝負し、どっちつかずの勝負って所に、

萃香が横槍入れて無理やり仲裁。

千鳥が怒ろうとしたけど、力の差を感じ取ってたじたじとなり、

萃香が酒飲まして結局は和解。

尾裂狐が人知れずピンチに。

ではどぞ。

## 第二十三話 博霊の巫女 見参

萃香の酒によつて、すっかりへべレケになってしまった千鳥。

ダイダラボッチはあまり口にしていなかったのか、完全にしらふ。  
萃香は例のごとく。

萃香は常時なので平気だが、千鳥は足元も危うい状態なので、  
とりあえずダイダラボッチが肩を貸して歩いていた。

「あははははゝゝお酒っておいしいねゝゝ」

「千鳥ちゃん、ちょっと落ち着いてくれないかなあ？」

ダイダラボッチに肩を貸されながら、テンションの高さを維持。  
さすがにダイダラボッチは迷惑そうな様子である。

「はっはっは！いいじゃないかあ、正直でいるって事は！」

萃香が近くでぎゃんぎゃんと騒ぐ。

ちなみに今歩いている理由は、千鳥の酔いを川の水で治そうという魂胆である。

三人が川に到着した時、遊ぶのが終わった様子のぬうとかあと結がいた。

「あら、来てたのねえ、みんな」

「ボッチ姉さん、これはどういう事なのだ？」

かが示した先には、ダイダラボッチの手が土くれになって、山盛りになっている土があった。

そう、先ほど千鳥に切られて、バラバラになった手である。

かが気にしたのは、そこからつめき声が出ている事である。

「むー！ー！むー！ー！むー！ー！」

その声がダイダラボッチの耳に届いた時、

彼女はようやく、ある事を思い出したのである。

「あ、そう言えば浮世が埋まっただんだ  
すっかり忘れてた」

「むー!!むー!!むううー!!」

ダイダラボッチののんきそうな声に反比例するように、彼のうめき  
声が大きくなる。

さすがにこれはまずいと、全員が急いで浮世の救出に乗り出した。

しばらくして、泥だらけかつ不機嫌な様子の浮世が出土された。

千鳥は萃香が付き添って川に顔をつけて酔いを醒ましており、

ダイダラボッチはひたすらに謝って、子供達はその様子を見ていた。

「ごめん！！本当にごめん！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ダイダラボッチが何度頭を下げても、浮世はそっぽを向いたままな調子。

子供達はいまいち状況を理解していなかった為、

ダイダラボッチの味方に回っていった。

「浮世兄さん！！そろそろ許してあげればいいのではないのか！？」

「そうだよ！！こんなに謝ってるのに、ひどいよ！！」

「！！！」

かあと結は声に出して、ぬうはむすつとした顔になって怒りをあらわにした。

しかし、浮世にも味方はいるのである。そう、八蛇の事だ。

「お前らは何もわかってないのじゃ！！」

その傍若無人の大悪妖怪が何をしたのか、まったくわかってないんじゃない！！」

私怨も混ざっている為、かなり脚色して話してきた。

しかし、純粹無垢な子供にはこれが思いのほか効いたようである。

「ええ！？ほ、本当なのか！？ボツチ姉さん！！」

「そんな・・・僕は・・・お姉さんの事・・・信じてたのに・・・」

「・・・」

三人が三人とも、勘違い？に動揺し、一様にダイダラボッチを見つめた。

「あ、あの・・・私は・・・」

更に状況が悪くなり、もはや立つ瀬も何もなくなってきたダイダラボッチ。

そこに機嫌を悪くしていた浮世が「待った！」をかけた。

「八蛇！！今のお前の証言には根拠がなさすぎる！！」

確かにボツチは俺を生き埋めにしかけたが、

これは千鳥という不確定要素も原因だったんだ！！」

なぜか変にかっこつけて八蛇を指差す。八蛇も「ぐう！」と変にひるんだ様子である。

「だ、だが！！ダイダラボッチは今までにわらわをことごとくいじめてきた！！」

これはダイダラボッチが傍若無人を証言するに『異議あり！！』

「それは今回の事件に関係があるのか！？いや、ないな！！今回の事件は、あくまで俺とボッチとのいざこざだ！！君の実体験は、今回の事件に意味を持たない！！つまり、ボッチは傍若無人などではないと言う事だあ！！」

浮世のまくし立てる弁論に、八蛇はまだ頑張っている様子。

「う、うう・・・し、しかしだな、お前はダイダラボッチの被害者ではないのか？」

なぜわらわにこんな事『喰らえ！！』」

「いや、ここに俺を生き埋めにした本当の原因があるぞ！！」

どこから取り出したのか、浮世は千鳥の刀を八蛇に見せ付けてきた。それを見た八蛇の顔はどんどん青ざめていく。

いよいよ浮世のフィニッシュが決まる時だ。

「そうだ！！この刀がボツチのあれを切らなければ、俺は生き埋めになんかならなかった！！」

つまり、今回の生き埋め事件の真犯人はあゝ・・・

千鳥！！あの者に他ならな『いい加減にしなさい！！』 あだあ！！  
「！」

浮世の言動と行動に痺れを切らしたダイダラボツチが、浮世の頭を思いっきり叩いた。

浮世はそのまま地面に叩きつけられて、二、三回ほど地面をバウンドした。

痛み等で転げまわる浮世を尻目に、ダイダラボツチは説明を介した。

「あのね、今回の事は浮世が言ったらいけない事を言ったから、私がちよつと怒ろうと思ったの

まあ結果的には、千鳥ちゃんが邪魔して浮世が生き埋めになったんだけど」

ダイダラボツチの優しい説明のお陰で、子供達は改めて納得していた。

「なるほどお、そうだったのかあ」

「じゃあ、悪いのはお兄さんの方じゃないの？」

「・・・」

子供達全員の視線が、説明するダイダラボッチから、

転げまわる浮世に移った時、浮世はピタッと転げまわるのを止めて、

「・・・い、いやな、俺はそこまで悪くないんだぞ？」

ただ、ボッチがちょっといい年して大人気ないって言ったただでえ・・・」

冷や汗をだらだらと流す浮世を、ダイダラボッチを含む子供五人衆が取り囲んでいった。

五人という意味は、八蛇も混ざっていると云う事である。

さっきの完全論破ですごぶる機嫌が悪い様子。てか軽く涙ぐんでいる。

「うーきーよー？まだ言うわけえー？」

「ちょっとお仕置きが必要だ」

「ごめんね、これもお兄さんの事を思ってたよ」



丁度六人のいる場所にその者の影が落ちるように、その者は空に浮いていた。

「か弱き人間を取り囲み、何をしようとしているのだ！？魑魅魍魎よ！！

今私が、貴様らを成敗してくれる！！」

腕を組み、どつしりと構えた様子のその者、

外見は長めの黒髪に紅白がやたらに目立つ巫女服っぽい物を着ており、

どこか元気のよさそうな子供っぽい感じである。

その者は軽快に笑いながら、地面に勢いよく降り立ち、着地した。

が、勢いがよすぎたのか、着地した反動で体に振動が伝わっていき、

少し動きが止まってしまった。

しかし、そんな事はなかったと言わんばかりに、その者は持っている杖？を、

ダイダラボッチ達の方に振りかざした。

「ええい！！私が来てもなお逃げないとはいいい度胸だ！！

「こつなつたらあゝ、早速とおき使っちゃおうかなあゝ!!」

懐から今まさに何かを取り出そうとした瞬間、

どこからともなく現れた萃香が、その手をガシッと掴んできた。

「おいおい、やめときな、巫女さん  
こいつらは悪い妖怪じゃないよ」

萃香のなだめる声に、その巫女は驚きながらも、多少冷静さを取り戻したようである。

「むむうゝ、鬼に悟られるとはあゝ・・・博霊の巫女として、恥ずかしいゝ・・・」

とりあえず懐から出そうとした物をしまい、顔を多少赤らめる。

萃香はその瞬間に、改まった様子になって、巫女に話しかけてきた。

「お？よくいたらあんた、新しい博霊の巫女じゃないか？」

「そう!! 私は偉大なる先代の意思と力と名を受け継いだ巫女!!  
その名も博霊『可愛らしいねえ、あなた』・・・」

肝心なところを、ダイダラボッチが絶妙な感じで言葉を滑り込ませてきた。

「私の頃はもつと大人びてたけど、あなたは本当子供らしいねえ」

ダイダラボッチの超上から目線よりも、

むしろその巫女は自己紹介を邪魔された事を腹立てた。

「ええい！！私が名前を言おうとしているのに邪魔するなあ！！  
いいか！？私の名前は博霊」いやはや、元気のよさそうな巫女だねえ」・・・」

今度は萃香の声が入り、またしても名前が言えなかった。

「子供らしいって言っても、それはあくまでまだ子供なんじゃないのかい？」

「ああ、そうかもね  
背丈とかもどことなく大きくないからね」

「あ、あの・・・ちよつと？」

巫女が必死に自分の存在を主張しても、二人は聞く耳ナッシングである。

「そついやさ、300年ぐらい前の巫女は覚えてるか？」

「ああ、あの子？ 確かとんでもない事しでかしたわよね。」

「あの時は本当にたまげたよ」

まさか博霊の巫女があんな馬鹿なことするなんて、思いもしなかったよ」

「あの子は本当に面白かったわよねえ」

二人が完全に今の博霊の巫女を無視する為、とうとうプッチーンと切れてしまった。

「い・い・か・げ・ん・に・しろおおおおお！！！！！」

私をのけ者にするんじゃない！！妖怪に鬼！！」

相当大的声で叫んだので、ダイドラボッチも萃香も耳をキーンとさせていた。

このタイミングで、浮世がいよいよ助け舟を出してきた。

「なあ、君の名前を覚えてくれないか？」

「よくぞ聞いてくれたあ！！」

「よし、それじゃ私の名前を言ってあげよう！！」

無駄にポージングしまくる様子が、皆一様にイラッと来ていたが、

これ以上何かしたら何をするのかわからないので、とりあえず見守っていた。

そしていよいよ、その巫女が自らの名前を名乗りだした。

「よく聞くといい！！私の名前はあ——」

「博靈 靈羅だっ!!」

## 第二十三話 博霊の巫女 見参（後書き）

後書き

あゝあ、やりたかったネタやってたら、とんでもない登場シーンになってしまった・・・

さて、今回登場したこの巫女は、何を隠そう歴代の巫女が一人！！

その名も、博霊 霊羅！！

テンションが歴代巫女最高！！！実力は未知数！！ちなみに歳は霊夢と一緒に。

外見は霊夢に元気をプラスしたら多分こうなりますだ。

もちろんオリジナル巫女です。ハイテンション巫女はマジでやりたかったんですよ。

目標はとて博霊の巫女に見えない巫女です！！霊夢よりひっどい感じで。

いいじゃないか！！こんな巫女がいても！！

とりあえず、引いた伏線は次回にて。やはり遅いぜ展開！！

ま、第二十四話を楽しみにしていってくださいな。

んではまた〜（\*^|^\*）ノシ

PS、みてみんという画像投稿サイトにて、

この小説のキャラクター「ダイドラボッチ」を投稿しました  
だ。

よろしければどうぞ。

## 第二十四話 迫り来る魔の手（前書き）

ありのままあらずじ

千鳥が酔いつぶれ、萃香が笑い、ダイダラボッチはあきれる。

子供達が訪れ、浮世は生き埋めから解放。

浮世が八蛇を論破し、その結果浮世がみんなからの的にされる。

そこにハイテンション巫女である博霊<sup>はくれい</sup>霊羅<sup>れいら</sup>が現れた。

更新遅れて申し訳ございません。

ではどぞ。

## 第二十四話 迫り来る魔の手

博霊の巫女である彼女は、数々の妨害？を乗り越えて、

今ようやく己の名を名乗る事が出来た。

しかし、名乗るタイミング悪かったせいか、

皆のリアクションはビックリするほど軽かったのである。

そう、霊羅が名乗った瞬間は、誰一人として拍手もせず、

「へー」や「ほー」の声すらも上げずに、ただただぼーっと眺めて  
いただけの有様。

この空気が前では、さしもの霊羅はどうすればいいのかわからない  
という有様である。

「え、えーつとお……そのお……」

打つ手も何もなくなってきた霊羅。

観客であった子供達はわいわいと騒ぎ出し、大人達は適当に会話を  
始める。

もはや誰一人として霊羅の方など見向きもしない状況下、

軽く涙目になる霊羅の肩を、誰かが後ろからポンと叩いてきたのだ。振り向いた先にいたのは、水を被って酔いを無理やり醒まそうと努力していた千鳥である。

しかし、顔面ブルーな様子から考えると、どうやら酔いはあまり抜けなかった様子である。

どこからどう見ても危ない姿を晒している千鳥に、

霊羅も青ざめそうになった瞬間に、千鳥が親指を立ててスマイルを送ってきたのだ。

「ぐ、グッジョブです……………霊羅さ……………」

その一言を言い切る事もなく、千鳥が地面に倒れてしまった。

「……………」

どうすればいいのかさっぱりわからない霊羅に、

話に飽いた萃香がふらふらと歩いてきたのだ。

「ういゝ、久々に語り倒したねえ……………」

ま、この子はとりあえず私が永琳にでも見せておこうかなあつと

千鳥を軽々と担ぎ、どこへなりと歩き出そうとする萃香。

その後ろ姿に、なぜか八蛇が声をかけてきたのだ。

「おぬし、今更なんじゃが……鬼か？」

「そうだよ、この角を見ればわかるだろう？」

自分の頭についている立派な二本の角を見せ付ける。

八蛇は無邪気そうな顔をさせて、それを見つめてきたのだ。

「ほお、おぬしの角はすごいじゃ  
わらわに触らせて欲しいのじゃ」

ねだるように言ってくる八蛇に対して、萃香は「ちっちっち」と指を振ってくる。

「この角は鬼の誇りだ  
そう易々と触らせるわけにはいかないなあ」

八蛇の事を完全に子ども扱いする萃香の態度に、

八蛇がプッチンと切れてしまった。どうやら逆鱗に触れてしまったようである。

「おぬしいゝ・・・わらわを子ども扱いしたなあ・・・  
こうなったら、わらわの力を思い知るがいい!!」

八蛇が両手を掲げて、何かを呼ぶような態勢を取る。

その瞬間に、近くを流れていた川が、その流れを変えて萃香の方に流れてきたのだ。

しかも、川の勢いはまるで濁流のようになり、

萃香の背丈など軽がると飲み込むレベルであった。

「どつじゃあ!!これがわらわの力——」

と言う前に、萃香は既に飛び立ってその場を離れ去っていた。

そして濁流は、そのまま八蛇を飲み込んでいったのだ。

「あ、ありやりやあああああああ・・・」

自分がどうなるかまったく計算していなかった八蛇は、

容易く流れに飲み込まれていったのだ。そして、この流れはある二次災害も招いていた。

それは、浮世達の方にも流れてきた。と言っまるっきりの二次災害である。

「あれ．．．．あれって．．．．俺達も危なくないか？」

「まずい！！ここはかあに任せろ！！」

浮世が冷や汗を流した後に、かあが文字通り壁となって、

皆を川の奔流から身を挺して守ろうとした。

しかし、かあが身を挺してダイダラボッチとぬうと結を守れたのだが、

浮世だけがその流れに攫われてしまったのである。

「おおあああああああ．．．．．」

「う、浮世お！！」

ダイダラボッチが地面から巨大な手を伸ばして浮世を掴もうとしても、

その手は濁流に飲まれ、無常にも壊れていったのだ。

「浮世!!」

「駄目だよ、ボッチ姉さん!!今は危なすぎるよ!!」

「!!」

「は、離してよ!!離してえ!!」

ダイダラボッチが飛び込もうとしてまで助けに行こうとしたが、

ぬうと結が必死にダイダラボッチを止めていたのだ。

川の流れがようやく収まった頃には、浮世の姿はどこにも見当たらなくなってしまった。

ダイダラボッチは膝を折り、その場に這い蹲るような態勢になった。

そして、姿が見えなくなった彼の姿を思い浮かべ、涙を浮かべた。

今にも泣き崩れそうになったが、ぬうとかあと結の三人が、

ダイダラボッチの傍に駆け寄り、慰めてきたのだ。

「大丈夫だ

浮世兄さんがあれぐらいでどうにかなると思えない」

「僕もそう思うよ

浮世兄さんなら、きっと大丈夫だよ」

「ん……」

三人の暖かい激励を受けて、ダイダラボッチは涙をぬぐい、じつと、浮世が流れていったと思える方を見つめたのだ。

「そうだね、浮世があればぐらいでどうにかなるだなんて思わないものね」

ダイダラボッチの目には、一つの迷いもなくなっていた。

彼を信じるという思いが、彼女の心をずっと照らしたのである。

「それじゃ、浮世を探しに行きましょう！！」

「おー！！」

ダイダラボッチを先頭に、四人が浮世が流された先に向かおうとした瞬間に、

ダイダラボッチの前を一匹の虫が飛んできた。

「ん？」

それはバッタのようにも見えたが、バッタにはあまりにも大きい。

体躯は30センチほどもあり、かなりの大きさである。

「なんだろう、これ？バッタかなあゝ……………」

結がそれを不思議そうな顔をさせて触ろうとするが、足についている鋭い刃によって、

触ろうとした指が切れてしまった。

「いたい……………」

結が切れた指を舐めているうちに、四人の周りに、

目の前にいるバッタと同じようなバッタが、大量に飛び回ってきたのだ。

「え、ええ！？」

「な、なんだこれは……………」

「まさか…………これって……………」

「……………」

バッタが飛びかう音が騒音のように響いてくる中、

四人が各々でリアクションを取っている間に、

バッタ達が四人目掛けて飛び交ってきたのである。

「うわぁ!?!」

「むううう!!」

「くっ!!」

「!?!」

四人はどうか回避していくが、鋭い刃が衣服などをかすめ、切り裂いていく。

あまりにも攻撃が激しかった為、ぬうが壁を形成させ、バッタの突進を食い止めた。

バツタ達が壁にぶつかる生々しい音がした後に、

バツタ達が突如、一斉に一箇所に集まり出したのだ。

ぬうが壁を取り払い、四人が視線をその先に向けた。

「な、何をする気なんだろう？」

結がおびえた様子で眺めていると、

バツタ達がぶつかるように混ざり合い、気がつけば一つの生命体のような姿になっていた。

その姿は髪も服も肌も緑色をさせた、人間の若者のような姿であったのだ。

髪はオールバックの短髪で、服はＴシャツと短パンのような物。

そして、その容姿はどことなく若々しい姿をさせていた。

一言で言うのなら、ぬうや結より少し上ぐらいの年齢層に見えていた。

突如現れたその者は、容姿に見合うぐらいの若い声をさせて、

ダイダラボッチに指差して話しかけてきたのだ。

「ほう、お前がダイダラボッチとかいう妖怪だなあ？」

「そうよ、それがどうかしたの？」

「だったら話が早い……」

今ここで、お前はおいらに殺されなあ!!」

両手両足から刃を生やし、そのままダイダラボッチに向けて飛び掛つてきたのだ。

それも並大抵の速さではない。足のバネがいかれてるというっておかしくない速さだった。

「な――」

あまりの速度に対応できないダイダラボッチ。

そのままその者に切られそうになった瞬間、その者を阻む壁が出現したのだ。

「いっただあ!!これはさっきの奴かあ!!」

その者はそのまま壁にぶつかった後で、後ろに飛び、距離をとった。

「こんちくしょう!! 誰がこれを出してやがるんだあ!？」

その者の叫び声に対して、ぬうがひょっこりと前に姿を見せたのである。

「ほう!! 嬢ちゃんがやったのかあ!？」

おいらは嬢ちゃんみたいな子でも容赦しねえぞ!!」

強気に挑発していると、かあがぬうの後ろにそつと姿を見せてきた。

「いや、ぬう一人ではないぞ

このかあも相手になってやる

いいかな?ぬう」

ぬうはかあの言葉に当然うなずき、二対一の戦いに突入しようとしていた。

「へ!! どうせなら四人がかかりでもいいんだけどよあ・・・まあいい!!」

とりあえず、おいらの名を名乗っておいてやるぜえ!!」

刃を見せつけた後で、その者が声を高らかに名乗りだしたのだ。



「おいらの名前は……ヤイバツタだあ!!」

## 第二十四話 迫り来る魔の手（後書き）

後書き

更新が遅れまして、本当に申し訳ございません。

これからは心を入れ替えて望みたいと思っておりますので、

読者の皆様、どうか付き合ってくださいませ。

今回は増えすぎた登場人物を洗い流す的なノリで、

こんな話展開になっちゃったわけですけどお、

ちよっと物語を動かす為に、またもや新妖怪を採用してしまったのです。

その名もヤイバッタ！！ちなみに最初はリアルで普通のバッタでした。

しかし、擬人化妖怪にしないと東方って感じがしないなと判断したので、

とりあえずこんな形になったわけです。

前回と話のノリが少し似ていますが、これはわざとですのであしからず。

次回はぬうとかあのコンビが、未知の敵であるヤイバッタに挑みま

す！！

激闘の第二十五話をお楽しみに！！

んではまた（\*^|^\*）ノシ

## 第二十五話 二人の結束（前書き）

ありのままあらずじ

八蛇が怒って洪水を起こし、ある程度の面々は避難。

八蛇と浮世が流されていき、ダイダラボッチと結とぬうとかあはど  
うにかなった。

洪水が治まって、浮世を探しに行こうとしたら、妖怪ヤイバッタに  
出会った。

ではどぞ。

## 第二十五話 二人の結束

ダイドラボッチの面子は、ヤイバッタの挨拶にきよとした様子になっていた。

「ヤイバッタか……聞かない名前だ  
ボッチ姉さんはどうだ？」

「私も知らない  
最近出てきた妖怪なのかな？」

「僕も知らない……」

かあが答えを求めても、ダイドラボッチと結はわからない様子である。

その様子を察したかどうかは知らないが、ヤイバッタは答えを提示してきた。

「てめえらが知らないのも無理はないぜ！！」

おいらはお前らが知るはずのない妖怪だからなあ！！」

言葉を言ったとほぼ同時に、

ヤイバッタが背中の中を羽を広げて、ぬうとかあ達に飛び掛ってきた。

「――ぬうん――」

そこをかあが文字通り、壁となって立ちふさがる。

「おらああ――」

ヤイバッタは腕についている刃で切りかかるが、  
かあの体に澄み切った鋭い音と火花を立てた後で、刃は文字通り欠けてしまった。

「くそお――」

ヤイバッタが距離を取ろうとした瞬間、ヤイバッタにぬうの生成した壁が迫っていた。  
壁はヤイバッタの一回りほどの大きさで、ヤイバッタを易々と飲み込んだ。

「なあ――」

ヤイバッタは何かを言う間もなく、遠くの木に叩きつけられていった。  
壁と気が衝突した轟音が鳴り響き、ヤイバッタは当然押しつぶされる形になっている。

しかし、それは壁に埋もれている為、実際はどうなっているのかは誰にもわからない。

ぬうとかあが臨戦態勢を解かないまま、ヤイバッタを押しつぶしたはずの壁をじつと見る。

少しして、壁が揺れ動き、倒れていた方と逆の方向に倒れていった。土煙が少し巻き起こり、その中から姿を見せたのは、首辺りを動かして鳴らしていたヤイバッタであった。

「ふう……さすがにびっくりしたぜえ……」

中々どうしてやってくれるじゃねえか、面白くなってきたぜえ！  
「」

うなった後で、態勢を低くして羽を力強く羽ばたかせる。しかし飛ばない。

風を巻き起こし、すさまじいほどの土煙を自分の背後に巻き上げさせた後で、

ヤイバッタは地面から足を離れた。

「トップガン！！」

一瞬、それこそ目にも止まらない速度で、ヤイバッタはぬうとかあに飛び込んできた。

「！！」

二人はどうにか身構えようとしたが、間に合わずそのまま飛び込みを食らってしまった。  
直撃したのは、かあの方である。

「ぬうあー!!」

かあは衝撃と反動で態勢を大きく崩し、轟音を立てて倒れてしまった。

「あ………」

ぬうがかあの心配をした矢先に、ヤイバッタが腕の刃をぬうに振りかざそうとしていた。

「ばーか!! 隙だらけだぜえ!!!!」

ヤイバッタの凶刃が今まさにぬうを襲おうとしたが、ヤイバッタの刃は目に見えない壁で阻まれた。

「ちい!! さすがに油断はしてなかったか!! この勢いじゃ無理っばいなあ」

ヤイバッタは再びぬうとかあから距離を取った。  
ぬうは見えない壁を展開しつつ、かあの元へと駆け寄る。

「！！……………」

こくこくとうなずいたり、涙を目に浮かべたりしながら、かあに確認を取るぬう、

「大丈夫だ、かあがこれぐらいで倒されるわけがないだろう」

かあはその手でぬうの涙をぬぐって、再び立ち上がった。  
そして二人は、迷いのない目でヤイバッタを見る。

ヤイバッタも腕の刃を取替え、鋭い刃に変えていた。

「遊んでても仕方ねえなあ……………こうなったら一気に力タをつけてやるよお！！」

ヤイバッタは己の羽を激しく動かし、縦横無尽にぬうとかあの周りを飛び交う。

ぬうとかあは、捕らえきれないと判断して防御を強くしていく。  
そしてヤイバッタが刹那の攻撃で二人の防御を切り刻んでいく。  
火花が飛び散り、ぬうの壁はひびが入り、かあの体に傷が刻まれていく。

それでもなお二人は屈しない。強い目を持ってヤイバッタの攻撃に耐えていた。

「くそがあ！！いい加減に倒れるよあ！！」

焦りを覚えたヤイバッタは、冷静さを欠いた突撃を二人に試みた。もちろん、強烈な一撃を与える為の行動である。しかしこれこそが、ぬうとかあの絶好のチャンスになったのだ。

「いまだ！！」

かあがヤイバッタの突撃をその身で受け止める。

「ばかがあ！！もろに食らいやがつたなあ！！」

ヤイバッタがかあの体に刃を突き立てていこうとする。

「ぐう……………」

痛みに耐えるかあ。それをヤイバッタがあざ笑う。

「いい加減に………くたばりなあ!!!」

ヤイバツタが、今まさに、必殺の一撃を振り下ろそうとした。

その瞬間、今までじっとなつて待っていたぬうが、攻撃を開始した。

「!!!!」

ヤイバツタは、今までぬうが隠していた殺気を感じ取り、回避行動に移ろうと試みた。

しかし、全てはもう手遅れの段階であつた。

ぬうの形成した二つの壁が、文字通りヤイバツタを押しつぶすように飛んでいった。

「くそがあああ!!!!」

ヤイバツタは両の手を広げて、迫ってくる壁をどうにか止めようとしていた。

しかし、壁は力強く、残酷にヤイバツタを潰さんと迫っていく。

ゆっくりと、しかし確実に、壁はヤイバツタを挟み込んでいく。

やがてヤイバツタは手で押さえきる形から、完全に身動きが出来ない形になつていた。

「ぐうう!!! まだだ!!! まだおいらの本気を見せて……があああ  
あ!!!!!!!」

壁は残酷にヤイバッタを追い詰める。肉と骨が締め上げられる嫌な音を奏でて。

痛みから既に威厳はなくなり、苦痛の悲鳴を上げる。

万事休すのヤイバッタは、息を荒げ、汗をたらしながら、言葉を並べてきた。

「ま、待ってくれ！！おいらはある奴らに命令されてやったんだ！！だから、お前らにうらみがあるとかそういうんじゃないんだ！！」

ヤイバッタの言葉を聴いて、ダイドラボッチが静かに反応を見せた後にたずねてきた。

「ある奴ら？誰？そいつらって誰なの？」

「い、一番上はおいらもしらねえ！！」

「だ、だけど、奴らはお前らを狙えって命令してきたんだ！！」

「ちょっと待ってよ、なんであんたはおとなしく命令を聞いているのよ？」

「あ、あいつらが怖かったんだ！！あいつらの命令に逆らったら、おいらの命がねえ！！」

「だからおいらは、あいつらに従うしかなかったんだ！！」

「じゃあ、なんで今更そんな事を言うのよ？従わないと殺されるん

じゃなかったの？」

「どの道この状況じゃおいらは殺されるだろお!!」

戦ってて思ったんだ!! あんたらならあいつらに対抗できるって!!

だから、おいらを見逃してくれえ!! 頼む!! このとおりだ!!」

壁にはさまれながらも、ヤイバッタは必死に懇願していた。  
嘘や演技とは思えぬ涙に、ダイダラボッチの心が動いた。

「ぬうちゃん……その子を離してあげて」

「しかし……」

かあが心配そうな声を出しているが、ダイダラボッチは迷いのない調子である。

「大丈夫よ、もうこの子に反撃する意思は見えないわ  
いざとなったら、私が抑えつけるからさ」

ダイダラボッチの言葉を聞いて、ぬうはゆっくりと壁を消していく。  
宙吊りに近い形になっていたヤイバッタは無様に地面に落ちた。

「いで!!」

軽いリアクションを取った後で、ヤイバッタはどうにか立ち上がった。

しかし、さっきまで攻撃を受けていただけあって、さすがにぼろぼろである。

そのぼろぼろな体をどうにか動かし、ヤイバッタは申し訳なさそうな顔をさせて、

ぬうとかあの前に来た。

「強いなあ……二人は……おいらじゃまだまだ……」

頭をガシガシと手でいじるヤイバッタ。二人の強さに心底驚いている証である。

おだてられた二人は、まんざらでもない様子で顔を合わせていた。

「さてと、そろそろそいつらの名前を言ってくれない？ヤイバッタ」

ダイドラボッチの問いに、ヤイバッタは「おお」と今更のように返答した。

「そうだ、あいつらの名前を言っておかねえとな……」  
あいつらの名前……それは――

ヤイバッタが口にしようとした瞬間に、ヤイバッタの体は一瞬の元バラバラになった。

音も立てず、あまりにも静かに、ヤイバッタはこの世から消えるようにバラバラになった。

その場に残ったのは、ヤイバッタの右手一本だけであつた。

ダイダラボッチ他三人は、今起きた事が何一つ理解できていなかった。

さつきまで戦い、今救われようとしていた者が、一瞬の元にこの世からいなくなつたのだ。

否、全ていなくなつたわけではない。墓標のような右手だけが確に残っていた。

ダイダラボッチはどうか足を動かし、ヤイバッタの右手を拾い上げた。

その手には、まだぬくもりがあつた。命があつた証があつた。

しかし、ヤイバッタという存在そのものは、完全に消え去ってしまった。

そう、それこそその手以外の全てを残さずに――。

ダイダラボッチはその手を握り締めた。潰さないように。包み込むように。

そして、まだ見ぬ本当の敵に――恨みの炎を灯して――。



その頃、川のほとり辺りにて、誰かに連れ去られている浮世の姿が  
あった。

## 第二十五話 二人の結束（後書き）

後書き

ヤイバッタ、死す！！それもまあよくある感じで。

バッタの集合体なら、バラバラになっても大丈夫じゃね？って思う人はおろう。

残念ながら、ヤイバッタはそれこそ霧になるレベルではらばらになったのです。

そりゃまあ助かりませんよ、はい。

今度復活は？それは想像にでもお任せしますね。

次回はみんなが気になる浮世君に視点を移しますね。

第二十六話を、どうぞお楽しみに。  
んではまた（〃＾ー＾〃）ノシ

## 第二十六話 小心の狸（前書き）

ありのままあらずじ

ぬうとかあがヤイバツタと戦い、ぬうとかあが押されたが、  
やつのところでヤイバツタを追い詰めた。

ヤイバツタは土壇場で自分が利用されている事を語り、  
命をとりとめようとしたが、彼は八つ裂きにされ、命を散らせた。  
ではどぞ。

## 第二十六話 小心の狸

「ん・・・・・・・・ここは・・・・・・・・」

八蛇の起こした洪水に巻き込まれ、気絶していた浮世が目を覚ました時、

視界には洞窟でよく見るような物が広がっていた。

仰向けに寝かされていた浮世は、体をどうにか起こそうとしたが、指先がわずかに動く程度で、体はほとんど動かす事ができなかった。

「（まずいな・・・・・・・・まったく動けないぞ・・・・・・・・）  
せめて状況ぐらいは確認したかったんだが・・・・・・・・）  
つう  
！！  
」

不意に電気が走ったかのような痛みに襲われ、浮世は苦痛に震える声を上げた。

浮世が体を動かそうとしても動けなかった理由は、全身の至る所にある痛みが原因である。

浮世はどうにか動く首を動かし、自分の体を見て回った。

服は完全に脱がされており、その代わりに包帯らしく物が体に巻かれていた。

それを見た浮世は、自分の身がどうなっているのか大体把握したのだ。

そして、今自分がどういう状況に置かれているのかも――

「……………俺はどうやら、手当てをされて……………寝かされてるみたいだな

一体誰が……………何の目的があつて……………」

ぶつぶつとつぶやいていると、洞窟内をヒタヒタと歩いてくる音がしてきた。

「ん？俺を……………助けてくれた奴か？」

浮世が音のした方を見ると、小柄な少女らしき者が浮世の方に歩いてきていた。

暗くてわかりづらいが、全身が緑色のコートで覆われており、狸っぽいやつもあった。

その手にはよく見ると、少し小ぶりの魚があつた。

少女は浮世の傍辺りで、ちょこんと座り込み、息を整えていた。

浮世はその少女に対し、とりあえず話しかけてみた。

「もし……………その子？」

浮世の言葉を聞いた瞬間に、その少女はビクツと反応した後で、一瞬で浮世の視界から消えるように物影に隠れてしまった。

浮世もこれには参った様子である。

せめて返事か何か返してくれれば会話はできるのだが、これでは会話も成り立たない。

少女は物陰でビクビクしながら、浮世をじつと覗き込んでいた。  
浮世はどうしようか悩んだが、とりあえずそのままで聞くべきことを聞いたのだ。

「えつとさ．．．．君が俺を助けてくれたのかな？」

浮世の言葉にやはりびくつくが、今度はちゃんと言葉を返してきた。

「そ、そーだよ

お兄さんが．．．．川に転がってたから．．．．拾ってき  
たの．．．．」

「転がっていた．．．．か．．．．」

まあ、事実、意識も飛んでいたから．．．．そう言われて当然か．．．．

後さ、この怪我の手当て．．．．君がしてくれたのかな？」

「う、うん．．．．あんまり上手じゃないけど．．．．」

「いや、十分だよ．．．．ありがとう．．．．」

「えへへ．．．．どういたしましてえ」

小柄な少女は、物陰から少し姿を見せた後に、照れくさそうな様子を見せていた。

ほのぼのとした光景の中、突如少女の後ろに、飢えた様子の熊が姿を見せてきた。

「あ、危ない!!」

浮世が思わず声を出した為、熊はうなり声を上げて少女に襲い掛かろうとした。

「がああああ!!!!!!」

鋭い爪が少女を襲おうとしたが、爪は少女を傷つける前に止まった。そればかりか、熊は少女に対して興味が失せたかのように、おとなしく洞窟から出て行ってしまったのだ。

「え?え?え?」

浮世がまったく状況を理解できない中、少女が浮世の疑問に答えるように語り始めた。

「ふうちゃんはね・・・・・・・・喧嘩とかしてる人を・・・・・・・・止めさせたりできるの・・・・・・・・」

自分でも曖昧なだけだね・・・・・・・・意欲を無くさせる力があるらしいの・・・・・・・・

戦いたい意欲とか……食べたい意欲とか……無くす事ができるの……  
今の熊さんも……それで帰ってもらったの……  
……」

少女の言葉を聞いて、浮世は理解できなかった状況をどうにか理解した。

「そうか、それが君の……能力なんだね」

「あああ……多分そうだと思う……」

どこか申し訳なさそうに語るところを見ると、

少女はどうやら自分の能力を使う事を好まない様子である。

それもそうかもしれない。相手の意思などお構いなしに使えるその能力は、

一歩間違えれば使った対象に危険が及ぶどころか、生死に関わる可能性すら考えられるのだ。

この少女がその危険性をどこまで理解できているのかは定かではないが、

この様子を見る限り、能力を使った対象を不幸にした経験はあるらしい。

見ていて不憫に思った浮世は、ろくに動かない体を起こそうとした。

「……君は……いつつ!!」

「あうゝ・・・・・・・・駄目だよ・・・・・・・・動いたら・・・・・・・・」

少女は浮世の様子が心配になったのか、浮世に駆け寄っていった。その瞬間を待っていたと言わんばかりに、浮世は即座に少女の頭を撫でたのだ。

「あう！？」

少女は驚きながら速攻で距離を取ろうとしたが、浮世がもう片方の手で少女が逃げようとするのを止めたのだ。

「あうあうゝ！！離してゝ！！」

腕を振り回して振り払おうとする少女に、浮世は微笑み、頭を撫でた。

「大丈夫だ、落ち着いてくれ、俺は君の敵じゃない  
俺はただ、君が心配だから、不安をぬぐってあげようと思っただけだよ」

浮世はひたすらまっすぐに、少女の目を見つめた。  
少女の目は鮮やかな紅の瞳をさせていたが、左目は眼帯で隠してい

た。

浮世はその眼帯を別段不思議には思わず、ただただ真っ直ぐに、彼女に向き合っていた。

一切の嘘がない、純粹な浮世の思いと態度を前にして、少女はじたばたするのを止めた。

そして、少し照れた様子ながらも、浮世としっかり向き合ったのだ。

「……………お兄さんの事……………信じてみる……………」

「ああ、信じてくれ」

頭を撫でる手を離し、少女の手を両手で握る。

少女は浮世の温もりを感じ取り、安堵した様子を見せていた。  
一段落したところで、浮世は改まった様子で話しかけた。

「おっと、そう言えば名乗るのが遅れていた  
俺の名前は人橋 浮世って言うんだ」

「ふ、ふうちゃんの名前は、風慈ふうじ 梢しほって言うの」

「風慈 梢か……………ああ、だからふうちゃんなのか」

「そ、そーだよ……………お兄さんも呼びたかったら、ふうち  
やんって呼んでいいよ」

「それじゃ、これからはふうちゃんって呼ぶかな」

俺の事も、浮世とかでいいよ」

「わかった」

挨拶が終わったところで、浮世は次に場所の確認を始めた。

「で、ここはどこかな？」

「えっと、ここはふうちゃんの家だよ

一応・・・・・・・・洞窟の中・・・・・・・・かな？」

「そうか・・・・・・・・雨露を凌ぐ為に、洞窟の中に・・・・・・・・  
って事か」

浮世はふと、辺りを見渡し始めた。

暗くて気づきにくかったが、よく見ればそこかしこに人が使って  
そうな道具などがあつた。

どこから手に入れたのか気になる所だが、大方拾ってきたかそ  
ういふ物だなと判断し、

浮世は余計な詮索を止める事にした。

そして浮世は、冷静になってある決定的な事を思い出したのだ。

「あ、そうだ！！ボツチ達とはぐれたんだ！！」

「ぼっち？ぼっちってだあれ？」

「俺の仲間の事だよ」

他にぬっちゃうとかかあ君とか結君がいたな

おっと、どこにいるかわからないが尾裂狐もいたか」

「それで、浮世はどうするの？」

「そいつらと合流しないとな・・・・・・・・はぐれたままじゃまずいから・・・・・・・・っ！！」

体をどうにか動かそうとするが、痛みがそれを阻害し、ままならなかった。

「今は無理しちゃ駄目、ここで安静にするべきだよ」

梢が浮世を寝かせていた場所にそつと寝かせる。

「ああ・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・これじゃ合流できそうにないし・・・・・・・・」

悔しそうにつぶやく浮世。今の彼にできるのは、彼女達と無事合流できる事を祈る事だけであつた。

「ボツチ・・・・・・・・みんな・・・・・・・・無事でいてくれよ・・・・・・・・」

洞窟の天井を仰ぎながら、皆の事を思つ浮世であつた

## 第二十六話 小心の狸（後書き）

後書き

遅れてもうしわけございません。

今回はかなりの急ピッチでしたので、忙しい事この上なかつたです。とりあえず、浮世が今どうなってるのかがわかってくれたと思います。

後書き書く時間もなくなってきた・・・・・・真にすみませんです。

次回の第二十七話も付き合ってくれとうれしいです。  
んではまた（＊＾―＾＊）ノ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8651n/>

---

導かれし者が幻想入り lock pass meseege.

2011年7月27日22時37分発行